

深 川 市

音 江 2 遺 跡

— 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭 和 62 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

深 川 市

音 江 2 遺 跡

— 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭 和 62 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



北筒式土器



丸のみ形石斧

例 言

1. 本書は北海道縦貫自動車道建設用地内のうち、深川市における音江2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、財団法人北海道埋蔵文化財センター調査部調査第3課が担当した。
3. 本書の作成は、調査第3課の鬼柳 彰・森 秀之が担当した。文責者はそれぞれ文末に記した。
4. 遺構名称は、竪穴住居跡「H」、土壇「P」、焼土跡「F」の略号を用い、確認順に番号を付した。(P-4は欠番)
5. 実測図の縮尺は次のとおりである。
遺構 1:40 完形土器 1:4 土器拓影 1:3
剝片石器、石製品、銃弾 1:2 礫石器 1:3
6. 表中の石器石材については、次の略称を用いた。
And. 安山岩 Bl-Sch. 黒色片岩 Che. 珪岩
Gni. 片麻岩 Gr-Mud. 緑色泥岩 Gr-Sch.
緑色片岩 Mud. 泥岩 Obs. 黒曜石 Sa.
砂岩 Sch. 片岩 Ser. 蛇紋岩 Sh. 頁岩
Ta. 滑石 Tu. 凝灰岩
7. 放射性炭素による年代測定は、京都産業大学山田治氏に依頼した。
8. 黒曜石剝片について蛍光X線による原産地推定を京都大学原子炉実験所薬科哲男氏に依頼した。
9. 調査にあたっては、深川市教育委員会の協力を得た。また次の人々の指導・助言をいただいた(順不同、敬称略)。
野村 崇、瀬川拓郎、猪口正信、東出隆治

目 次

I	調査の概要	
1	調査要項	1
2	調査体制	1
3	調査に至る経緯	1
4	調査結果の要約	2
5	遺跡の環境と立地	3
II	調査方法	
1	発掘区の設定	16
2	調査の方法	16
3	遺物の分類	16
III	遺構と遺構出土の遺物	
1	竪穴住居跡	18
2	土 壇	22
3	焼 土 跡	25
IV	包含層出土の遺物	
1	土 器	32
2	石 器 等	33
V	まとめ	
1	調査のまとめ	44
2	丸のみ形石斧について	45
3	耕作土から出土した銃弾について	48
4	石狩川中流域の北筒式土器・余市式土器に伴う石器について	51
音江 2	遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地分析	57
音江 2	遺跡出土木炭の液体シンチレーション炭素年代	58

挿図目次

図Ⅰ—1	遺跡の位置……………	4	図Ⅳ—3	石器 (1)……………	35
図Ⅰ—2	発掘区及び周辺の地形……………	6	図Ⅳ—4	石器 (2)……………	36
図Ⅰ—3	遺跡の層序……………	7	図Ⅳ—5	石器 (3)……………	37
図Ⅰ—4	第Ⅳ層上面の地形と遺構位置		図Ⅳ—6	石器 (4)……………	38
	図 (1)……………	9	図Ⅳ—7	石器 (5)……………	39
図Ⅰ—5	第Ⅳ層上面の地形と遺構位置		図Ⅳ—8	石器 (6)……………	40
	図 (2)……………	11	図Ⅳ—9	石器 (7)……………	41
図Ⅰ—6	周辺の遺跡……………	14	図Ⅴ—1	包含層の遺物出土分布……………	44
図Ⅱ—1	発掘区の設定……………	17	図Ⅴ—2	深川市内発見の丸のみ形石斧	
図Ⅲ—1	H—1……………	19		……………	46
図Ⅲ—2	H—2……………	21	図Ⅴ—3	耕作土から出土した銃弾……………	48
図Ⅲ—3	H—3……………	23	図Ⅴ—4	銃弾の出土分布……………	49
図Ⅲ—4	P—1・2・3・5……………	26	図Ⅴ—5	ピーボディー・マルチニー銃	
図Ⅲ—5	P—6・F—1……………	27		……………	50
図Ⅲ—6	遺構出土の遺物 (1)……………	28	図Ⅴ—6	空知太2遺跡遺構出土の石器	
図Ⅲ—7	遺構出土の遺物 (2)……………	29		……………	55
図Ⅳ—1	土器の出土分布……………	32	図Ⅴ—7	特徴的な石器……………	56
図Ⅳ—2	土器……………	34			

図版目次

口絵 1	北筒式土器	図版 7	遺構出土の遺物
口絵 2	丸のみ形石斧	図版 8	作業状況
図版 1	発掘調査前の状況	図版 9	遺物出土状況
図版 2	側道部分調査後の状況	図版 10	包含層出土の遺物 (土器)
図版 3	調査後の状況	図版 11	包含層出土の遺物 (石器)
図版 4	H—1・H—2	図版 12	包含層出土の遺物 (石器)
図版 5	H—3	図版 13	包含層出土の遺物 (石器)
	H—3 床遺物出土状況	図版 14	包含層出土の遺物 (石器)
図版 6	P—1・P—2	図版 15	包含層出土の遺物 (石器)
	P—3・P—5		包含層出土の遺物 (銃弾)
	P—6・F—1		

I 調査の概要

1 調査要項

事業名 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査
事業委託者 日本道路公団札幌建設局
事業受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名 音江^{おとえ}2遺跡（北海道教育委員会登載番号 E-10-49）
所在地 深川市音江町字音江493番地ほか
調査面積 9,930 m²
調査期間 昭和62年4月1日～昭和63年3月31日
(発掘 昭和62年5月7日～7月14日)

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長 植村 敏（昭和62年6月25日まで）	調査第3課長 鬼柳 彰（発掘担当者）
澤 宣彦（昭和62年6月26日から）	文化財保護主事 西田 茂
専務理事 山本慎一	〃 熊谷仁志
常務理事 藤本英夫（昭和63年2月3日まで）	〃 田中哲郎
業務部長 間宮道男	嘱 託 和泉田毅
調査部長 中村福彦	〃 森 秀之
	〃 中田裕香

北海道教育委員会社会教育部文化課調査班主査 森田知忠（昭和62年5月25日～5月30日）
〃 文化財保護主事 工藤研治（昭和62年6月1日～6月6日）

3 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道の建設予定路線のうち、深川市における埋蔵文化財包蔵地所在確認調査は昭和52年度及び60年度北海道教育委員会によって行われ、市内の音江町から納内町にかけて、周知の遺跡2箇所と新発見の遺跡4箇所がこれにかかることが明らかになった。財団法人北海道埋蔵文化財センターは北海道教育委員会の指示により、昭和60・61年度、これらの遺跡について規模・性格等を知るための事前発掘調査を実施、61年度には引き続いて音江町の国見2遺跡の一部と向陽2遺跡¹⁾の発掘調査を行った。

本書で報告する音江2遺跡は当初の所在確認調査では発見されなかったが、当センターによる国見2遺跡発掘中の昭和61年10月初旬、遺跡周辺の地勢について調査していたところ、音江川右岸段丘上において、工事予定路線内及び北側の畑地に、黒曜石剝片が散布していること

I 調査の概要

を確認したことによって判明したものである。

事前発掘調査は昭和 61 年 10 月 9 日から 16 日にかけて実施され、工事予定区のうち音江川右岸に沿って走る 2 本の市道の間、約 18,000 m² から土器片・黒曜石の石器・剝片などが出土すること、これらの遺物の分布傾向が南側では希薄で、北側が濃密であることが明らかになった。さらに、ここから北方約 400 m のところにある音江神社付近にかけての畑に、同様の遺物が散布していることから、本遺跡の範囲は約 80,000 m² に及ぶことが判明した。

調査対象区域のうち、遺物の分布が希薄な南よりの約 8,000 m² について、北海道教育委員会は同年 10 月 21 日から 23 日まで工事立会調査を実施した。この調査では土器片 1 点のほか剝片少数が得られたが、遺構は発見できなかった。

今年度の調査は工事工程との関連から、調査区内北端部の側道工事部分 3,800 m² を 5 月から 6 月上旬にかけて発掘し、これに続く部分の発掘作業を 7 月半ばまでおこなった。

注 1) (1987) 『深川市向陽 2 遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター)

4 調査結果の要約

音江 2 遺跡は深川市南部を流れる石狩川左岸南方の丘陵地帯に位置している。遺跡が立地する音江川右岸の中位から上位段丘面は開拓当時から畑地などに利用され、遺跡の南端にあたる調査区も全域にわたって耕作されている。このため検出された遺構はすべて上部が削平され、出土遺物も本来の位置から移動しているが、両者の分布状態はほぼ重なっている。

発掘された遺構は竪穴住居跡が 3 軒、土壌 5 基、焼土 1 個所である。遺構及び包含層から出土した遺物は土器片 788 点、石器 687 点、石製垂飾 1 点、開拓時代の銃弾 15 点、ほかに剝片類が約 22,000 点である。土器は小破片が多いが、文様構成等からみて北筒式と余市式に位置づけられる。器形を復元し得たのは住居跡 H-3 で出土した北筒式土器の 1 個体のみである。石器は石鏃・石槍・つまみ付ナイフ・スクレイパー・石のみ・石斧・砥石などの器種がある。これには形態からみて縄文時代早期あるいは前期のものとみられる石鏃とつまみ付ナイフ数点が含まれているが、大部分は土器と同様の時期の遺物と考えられる。剝片石器はおもに黒曜石が使用されているが、礫石器のうち石のみと石斧は神居古潭変成岩地帯に多い片岩が用いられている。石のみのうちには従来、北筒式あるいは余市式土器に伴うものとされながら、発掘例が少ない「丸のみ形石斧」4 点がある。

以上のことから、本遺跡には縄文時代中期末から後期初頭の頃、集落が存在したことが推定される。遺構のなかには遺物が出土していないものもあるが、位置関係・規模・形態などを総合して考えると、発見された遺構は同様の時期に構築されたものと考えられる。(鬼柳 彰)

5 遺跡の環境と立地

環境 大雪山系の石狩岳(1,962 m)に源を発する石狩川は、旭川市から神居古潭^{かむい こなん}の峡谷を抜けて、深川市東部で空知平野に入る。そして雨竜^{うりゅう}町で雨竜川を、滝川市と砂川市の境で空知川を合わせて、石狩平野に向って南流する。北空知の沖積平野西側は増毛^{ましげ}山地の北西部、北側は天塩^{てしお}山地の南端、南東側は夕張^{ぼろや}山地へつらなる幌内^{ほろない}山地にあたる。

幌内山地は石狩川と空知川、それに東方で富良野盆地を北流して旭川市で石狩川に注ぐ美瑛^{びえい}川によって囲まれた三角形の地域を指す。山地は中央部を北流する内大部^{ないだいぶ}川と、この南方へ続く内大部断層によって東西に分かれている。東部は神居古潭變成岩や新第三紀層が南北方向に分布しており、神居山(810 m)、班溪^{ばんけい}幌内山(901 m)などの山々が峻険な峰をつらねている。地質は神居古潭變成岩帯の結晶片岩類によって複雑な構造を示している。

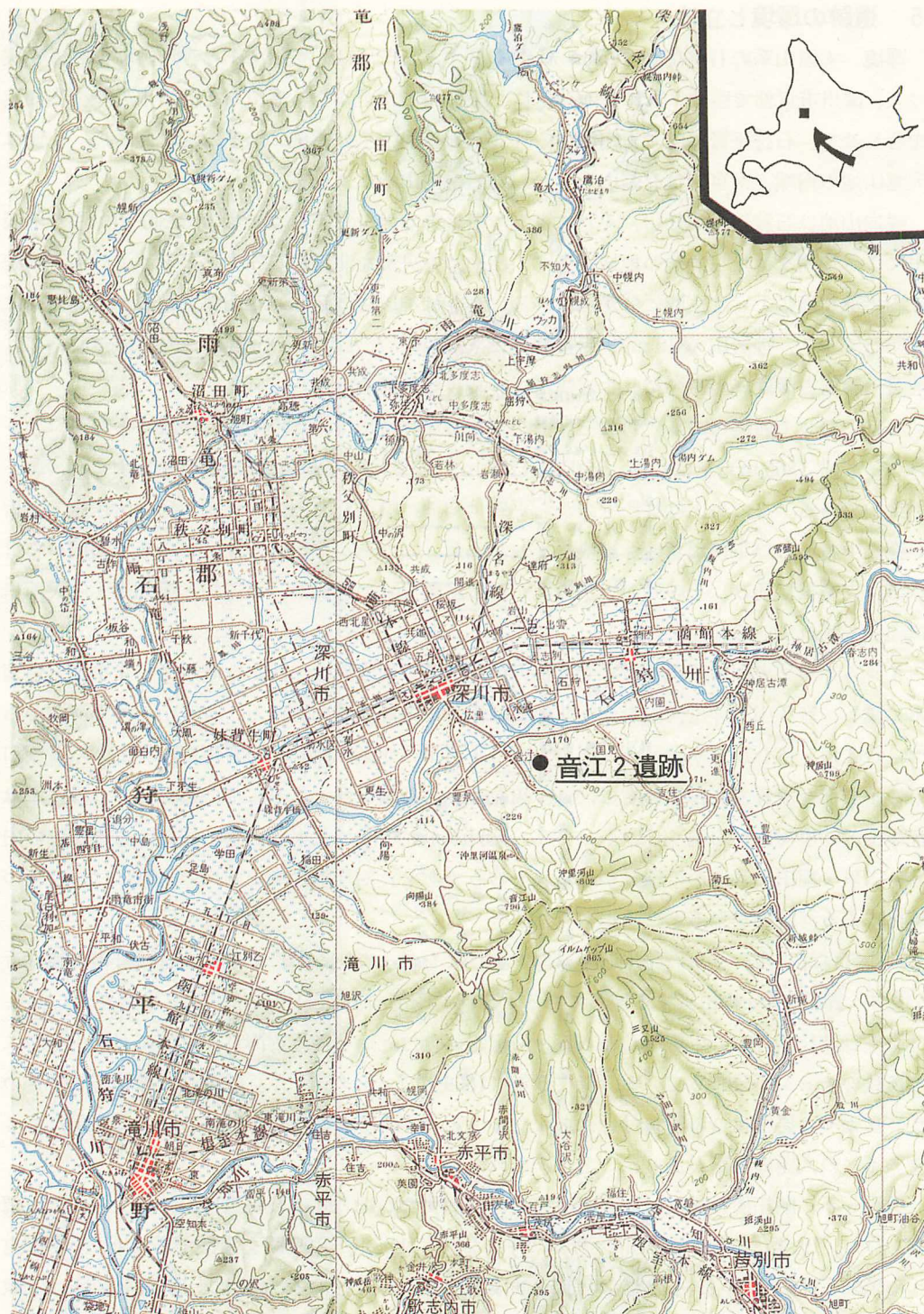
これに対して西側はおもに新第三紀層からなる丘陵地帯で、この中央に位置するのが、イルムケップ山(865 m)をはじめ、音江山(796 m)・沖里河山^{おきりかわ}(802 m)が主峰をなすイルムケップ火山である。この火山は鮮新世末から更新世初期に噴出した円錐形火山で活動休止後、開析が進み中腹から以下は扇状地性崩壊物でおおわれ、なだらかな丘陵となっている。山頂からは八方に支尾根が延び、その間の大小の沢から流路数 km の溪流が、石狩川・空知川・内大部川に向って流れている。

イルムケップ火山の頂部を境にして幌内山地西側の南半部は、西から滝川市・赤平市・芦別市に属し、音江山・沖里河山を含む北半部は深川市の最南端にあたる。音江山・沖里河山からは、音江川^{まちはい}・待合川^{まちあい}・オキリカップ川などの小河川が北東へ流れ、石狩川に注いでいる。深川市の平野部を流れる石狩川の右岸には、幅数 km の沖積平野が広がっているのに対し、左岸は音江山・沖里河山から続く丘陵がせまり、石狩川が蛇行して北東へ大きく屈曲する音江町の内園・広里・稲田にわずかの平野がみられるのみである。明治時代まで両岸の平野には石狩川の蛇行による河跡湖が至るところにあった。

音江町は深川市のうち石狩川左岸以南のすべてを含んでいるが、本来今の音江町市街地付近を指す「音江法華^{おとえ ぼっけ}」に由来する地名である。松浦武四郎の『丁巳日誌』に「オトイホク(リ?)」、『戊午日誌』に「ヲトエボケ」¹⁾とある。雨竜川河口付近から神居古潭にかけての石狩川沿岸には多数のチャシが分布している。寛文9年(1669)のシャクシャイン戦争の頃の石狩アイヌの長ハウカセの居所はこの河口付近にあったといわれており、松浦武四郎の日誌には深川にも多数アイヌの人達の集落があったことが記されている。

明治5年、開拓使長官岩村通俊の命を受けた室蘭の高畑利宜は石狩川に沿って上川までの調査を行い、19年にはそれまで川を溯る以外になかった上川への陸路を確保するため、上川仮道〔市来知^{いちきしり}(三笠市)から中別太^{ちゅうべつと}(旭川市)間〕を開さく、次いで20年には上川道路〔空知太(滝川市)から忠別太間〕の工事にかかり、23年にこれを完成させた。開さく工事には月形の樺戸集治監の囚人を使役、とくに沖里河山から続く丘陵が石狩川左岸に接する国見峠の工事は困難をきわめたという。当時この一帯はヤナギ、アカダモ、クルミ、カツラ、ハンノキなどが繁茂

I 調査の概要



図I-1 遺跡の位置

(この図は国土地理院発行の20万分の1地形図「留萌」「旭川」を複製したものである。)

する森林であった。

音江法華には明治 22 年に駅通が設置され、その後上川道路沿いに市街地が発展した。このころから音江では稲作が始まり、字豊泉ではリンゴの栽培も行われるようになった。明治 32 年、音江は滝川村から分村して空知郡音江村となり、昭和 38 年には石狩川対岸の雨竜郡深川町・一
 巳町・納内町と合併して深川市となった。

音江の旧名「音江法華」はアイヌ語に由来している。永田方正著の『北海道蝦夷語地名解』には「O tuye pok オト・イエボク 川尻ノ潰ル山下 此川ハ山ヨリ遽ニ流レ下リ川尻處々へ切レル故ニ名ク」と説明されており、明治時代の地図にも今の音江川の名称としてあらわされているが、山田秀三氏は「pok」の語義から、「今の音江市街地附近に、地名発生の処を求むべきではないか」²⁾と述べている。

音江川は沖里河山の中腹から丘陵地帯を深く刻んで、音江の市街地を抜け音江町広里の東端で石狩川に注いでいるが、明治時代までは広里の東部で流路を南西に変え、待合川のほかにエブサプトクセ川、テムムンサプボ川などの小川を合わせて、広里の西端で本流に注いでいた。広里の今の河口付近には分流があったという。

立地 音江 2 遺跡は音江川上流右岸にある。範囲は音江市街の東端にある音江神社付近から、今回調査した北海道縦貫自動車道の予定地まで南北約 400 m に及ぶ。遺跡の東側は沖里河山から国見峠へつらなる尾根の西斜面へ続いており、現在このなだらかな斜面は畑・牧草地・果樹園などに利用されている。

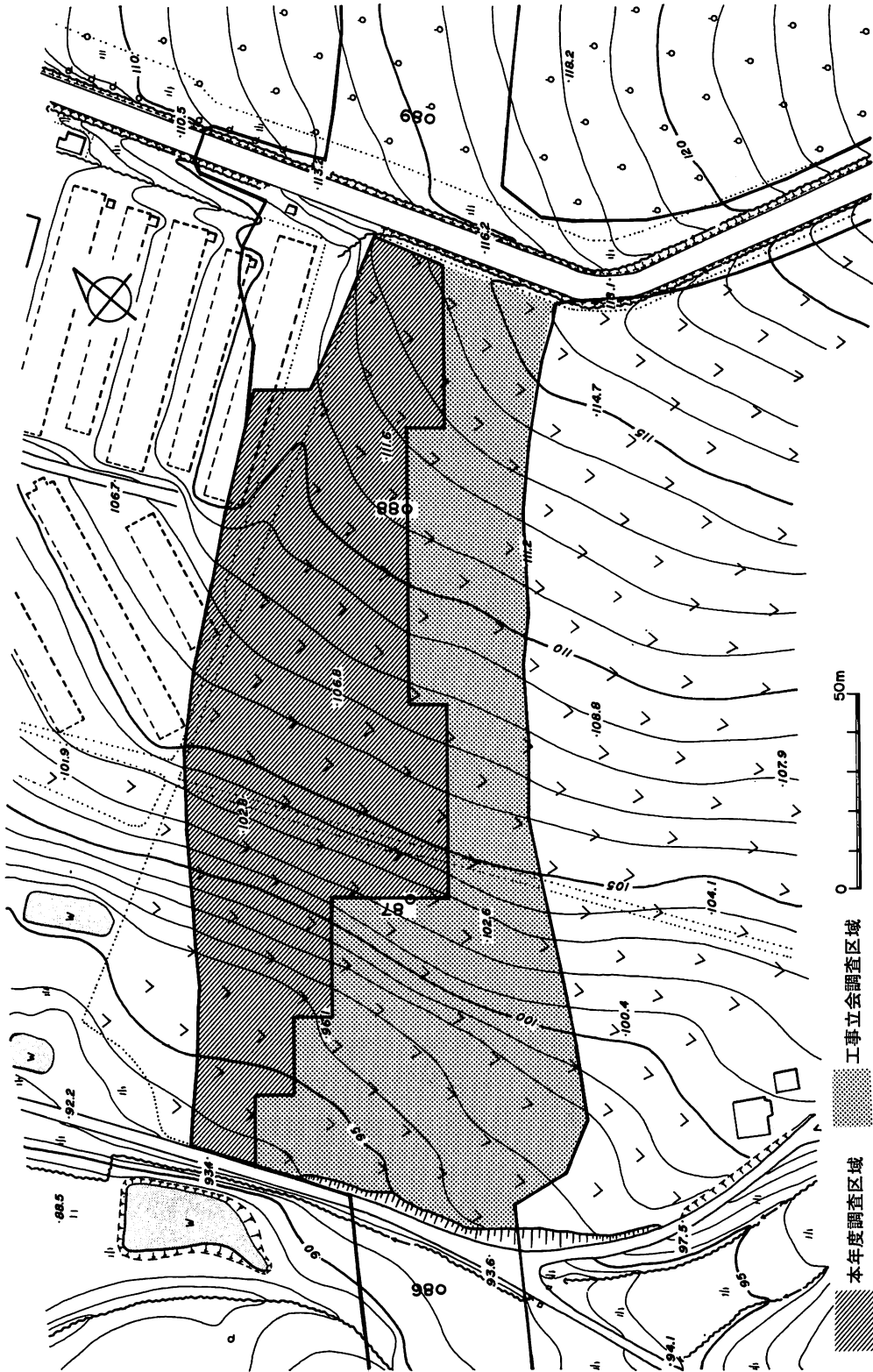
調査区は中位から上位段丘面にかけて広がっており、北西には調査区の北端からわずかに離れたところに音江川に開口した沢があって、その周囲は小さな森になっている。また前掲した『北海道蝦夷語地名解』に音江川の分流と説明されているトクボク (tuk pok) という音江川の分流が、かつて調査区の東側を流れていたらしいが、耕作地が区画整理された今では、判然としない。

遺跡の南方にはイルムケップ火山がその偉容を誇り、北西には広里の水田地帯・石狩川・深川の市街地が広がって、そのはるか後方には増毛山地の暑寒別岳 (1,491 m) や樺戸連峰が眺望される。

調査区は最近まで放牧地として利用されてきたが、以前は畑がつくられていた。20 年ほど前まで調査区中央を横ぎる段丘縁辺に沿って道があり北西の森に通じていたが、その後段丘の高い部分を削平して低い所に盛土したため今は残っていない。また北東には調査区に接して養鶏場跡があった。

基本層序 調査区内の層序は次のとおりである (図 I-3)。第 I 層—耕作土あるいは盛土。第 II 層—黒色腐植土。第 III 層—茶褐色土 (漸移層)。第 IV 層—暗黄褐色土 (地山)。

上位段丘面は耕作が地山に達しており、本来の遺物包含層 (II 層) は一部にしかみられない。遺物の多くは第 I 層中から出土した。第 III 層以下は無遺物層である。地山にはイルムケップ火山の噴出物とみられる大小の安山岩角礫が混入している。



周辺の遺跡について

上川道路の開通によって音江法華に市街地が形成され、一巳と音江法華間の渡船場が開設された明治 26 年の夏、上川道路の敷設にあたった高畑利宜の長子高畑宜一は、雨竜郡新十津川村から上川郡永山村間を踏査して、翌 27 年「石狩川沿岸穴居人種遺跡」と題する報文を『東京人類学雑誌』に寄稿した。この報告にはオキリカップ川河口付近から内大部にかけての石狩川岸の平地に多数の堅穴があることが記されている。彼は音江法華付近で数個所の堅穴を発掘して、「朝鮮土器」³⁾・擦文土器の破片を得、さらに畑地で鉄鍋・刀・鏑などを発見した。また稲見山にある環状列石も見分けてその形状を記録、これが地勢上要地を占めていることから、「或ハ祭祝ノタメニ使用セシヤモ不知………」と説明している。この環状列石は明治 21 年にはすでに発見されていたという。⁴⁾

音江の先史遺跡はこれを機に広く知られるようになった。とくに稲見山の環状列石は人類学や考古学上の関心を集め、この地を訪れた研究者の報告が数多くある。⁵⁾

大正 7 年に刊行された『北海道史一附録地図』には、稲見山の環状列石と音江法華・納内・神居古潭の堅穴群やチャシ跡の測量図が掲載されており、本文中に「石狩川沿岸には、處々に堅穴及び砦ありしが、開墾又は洪水の爲殆ど埋滅し、今稍々舊時の跡を留むるは、深川附近より神居古潭に至る間の兩岸なりとす。」とあって、当時この一帯の遺跡がよく残されていた様子がわかる。

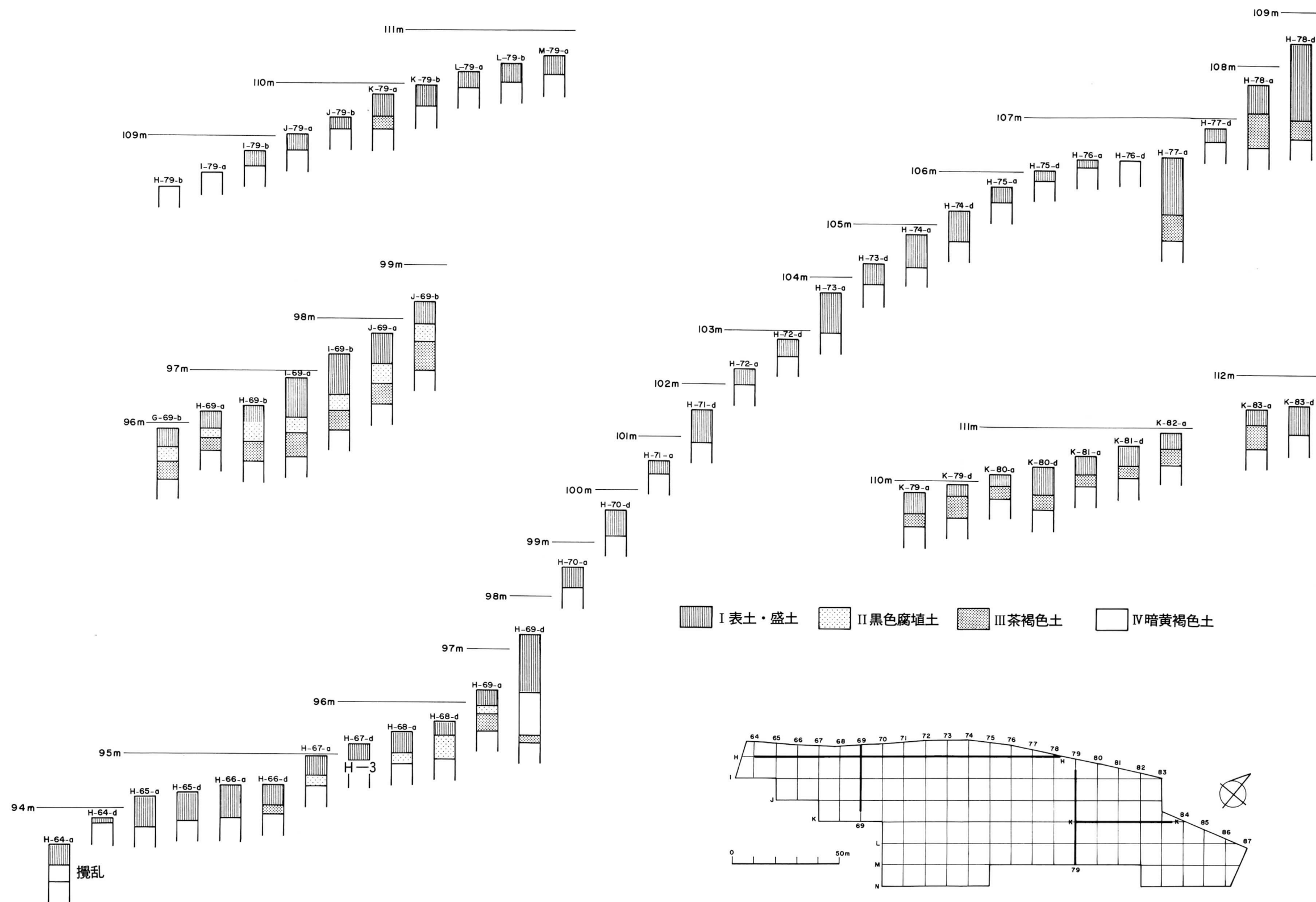
東京大学の駒井和愛博士は昭和 26 年から 31 年にかけて、5 回稲見山を訪れて音江村当局の協力のもとに環状列石の調査を行った。この調査によって、積石下の墓墳から多数の翡翠玉のほか朱漆塗弓が出土、この環状列石が縄文時代の墓地であることが明らかにされた。駒井博士は調査の結果を数回『考古学雑誌』に発表した⁶⁾ほか、昭和 34 年には成果をまとめて『音江一北海道環状列石の研究』をあらわした。この環状列石は昭和 31 年、「音江の環状列石」の名称で国指定史跡になっている。

駒井博士の調査に参加協力した音江村教育長池田輝海氏は、その後音江村のほか納内・一巳・深川方面の遺跡分布調査を行った。この成果は『深川市史』にまとめられている。

加藤晋平氏は昭和 38 年、北海道の丸のみ形石斧についての論考⁷⁾のなかで、池田氏が音江で採集した 4 例をとりあげ、この石斧が北筒式あるいは余市式土器に伴うものであることを示唆した。

『深川市史』に掲載されている遺跡は 87 箇所あるが、造田や各種の工事により失われ、今は確認できないところも多い。しかし、本書で報告する音江 2 遺跡のように、これから新たな遺跡が発見される可能性もあろう。北海道教育委員会の遺跡台帳には現在、49 箇所が掲載されている。

深川市における遺跡の分布は雨竜川の上流を除く南部の丘陵地帯及び石狩川兩岸の平野に広がっている。音江 2 遺跡が立地する沖里河山の北斜面から広里の平野部は、深川市東部の石狩川、内大部川流域及び音江の環状列石を含む稲見山周辺と並んで、深川市では最も多く遺跡が



図I-3 遺跡の層序

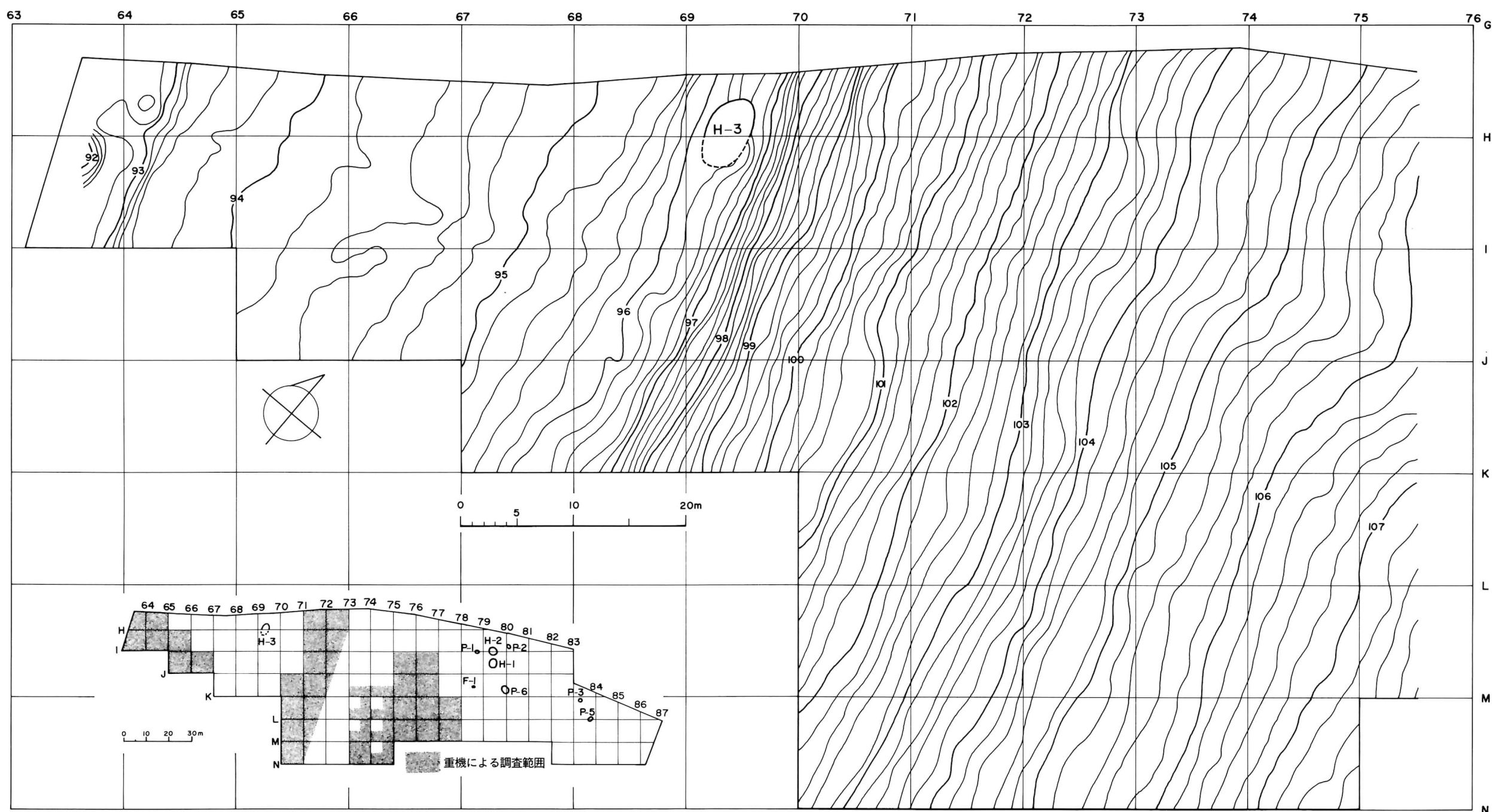


図 I-4 第Ⅵ層上面の地形と遺構位置図 (1)

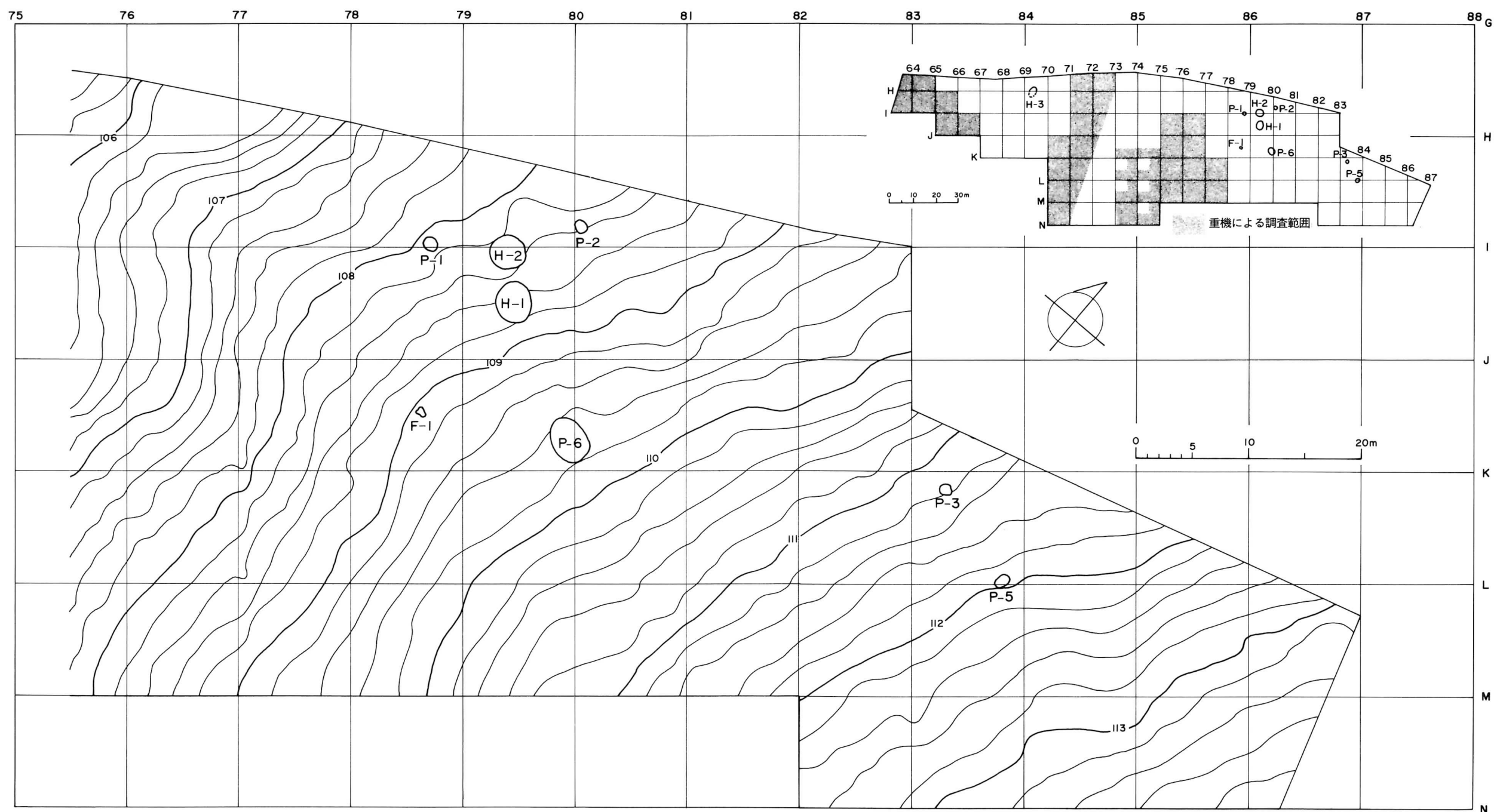
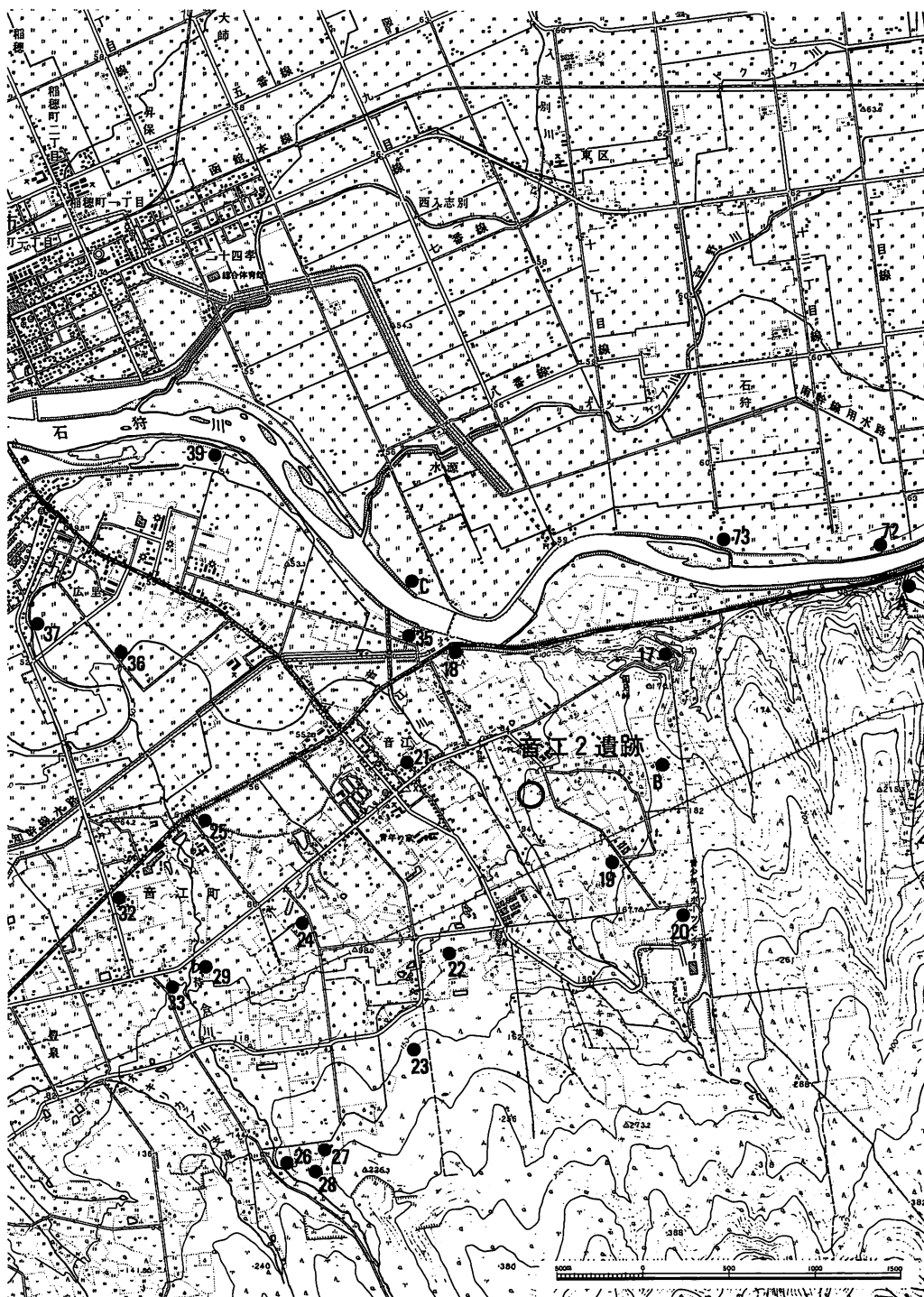


図 I—5 第Ⅵ層上面の地形と遺構位地図 (2)



図I-6 周辺の遺跡

(この図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「石狩深川」を複製したものである。)

図中の番号は15ページの表に対応する。

分布する地域である。国道12号を境にして南側の丘陵地帯には音江川・待合川・オキリカッ
川筋に沿って、おもに縄文時代の遺跡がある。北側の広里は現在一面の耕地になっているが、
明治時代までは至るところに石狩川の河跡湖が残る湿地だったという。高畑宜一が書き残した
堅穴群の一部は、今も地中に埋もれているものと推定される。(鬼柳 彰)

周辺の遺跡(『深川市史』『先史のあしあと』に掲載されている遺跡のうち音江2遺跡周辺のもの。番号は『市史』のとおり。)

番号	名 称	時 期	説 明 (『市史』より抜粋・要約)	道教委登録名称
17	音江町 国見 C	不 明	かつて「義経の穴」といわれた横穴があったが、今は崩れ落ちて見ることはできない。	ピラタンネ遺跡 音江1遺跡
18	〃 音江 A	〃	道路拡幅工事のため崖を切り崩していたところ、石斧が7個まとまって発見された。	
19	〃 音江 B	〃	標高120m程の段丘面の畑から、小型の丸のみが採集されている。	
20	〃 音江 C	〃	耕作地から石斧が数点採集されている。	
21	〃 音江 D	〃	以前から石斧などが採集されていたが、昭和32年に靴形の斧が発見された。	
22	〃 音江 E	〃	チェサブトクセ川の支流を登った台地から、蛇紋岩の丸のみが発見されている。	
23	〃 音江 F	〃	標高100m程の段丘から黒曜石製の両面加工のポイントが採集されている。	
24	〃 音江 G	〃	沢のゆきづまりにある洞窟。自然のものか古代人が住居等に使用したものか不明。	
25	〃 音江 H	チャシ	尾根の先端を利用して竃が掘られ、内側に大小数個の竃みが観察される。	
26	〃 音江 I	縄 文	円形の堅穴遺構が発見されている。付近から北筒式土器が採集されている。	音江のチャシ
27	〃 音江 J	不 明	安山岩の割石を配列した遺跡。耕作のじゃまになるため半分以上が除去されている。	
28	〃 音江 K	縄 文	縄文時代の堅穴。石囲いの戸が発見されている。石斧・石刀・丸のみなどが出土。	
29	〃 音江 L	〃	縄文時代の堅穴あり。石斧・石鏃・ポイントなどがかなりの数出土している。	
32	〃 豊泉 A	縄文中期	北筒式土器散布。戸をもった堅穴住居跡数箇所発見さる。造田の際、多量の土器片出土。	
33	〃 豊泉 B	不 明	片面調整のポイント・ノッチ・ナイフブレードなどの石器が採集されている。	
35	〃 広里 A	擦文以降	擦文時代の堅穴が群をなして分布。擦文土器のほか日本刀、釧・錦織片他が発見さる。	東広里遺跡
36	〃 広里 B	縄 文	造田中、緑色泥岩の鋸歯石器発見された。付近から土器片、石斧が多数発見されている。	
37	〃 広里 C	中 世	明治38年耕作中、刀約50振が発見された。今は残されていない。	
38	〃 広里 D	〃	耕作中、日本刀1振が出土。駒井和愛博士の所見では室町時代以前のものとこと。	
39	〃 広里 D	擦 文	自然の起伏を利用して堅穴が分布。長方形を呈し、長辺の中程に張出がある。	北広里遺跡
72	一已町 東石狩 A	縄文中期	縄文時代の堅穴あり。口縁部に縄文、胴部に押型のある土器、北筒式土器片出土。	
73	〃	擦 文	石狩川畔に堅穴が相当数あった。土器片や砥石が採集されている。	一已12丁目付近遺跡

上記以外に、北海道教育委員会の埋蔵文化財包蔵地カードに登録されている音江2遺跡付近の遺跡には次の3個所がある。

- A 出会沢チャシ 舌状台地に立地。丘先部は道路工事により破壊されており、主体部も耕作により原形が失われている。
B 国見2遺跡 丘陵上の頂部から南斜面にかけて立地する縄文時代の遺跡。(昭和61年度より当センターが発掘調査中)
C 一已水源遺跡 大正7年の『北海道史』(附録地図)に、110余個の堅穴があると記されている地点。

注 1) 高倉新一郎校訂(1982)『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』北海道出版企画センター
〃 (1985)『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』北海道出版企画センター

- 2) 山田秀三(1977)「深川のアイヌ語地名を訪ねて」『深川市史』深川市役所
3) 須恵器。明治時代には須恵器を朝鮮土器あるいは祝部土器と称した。
4) 『深川市史』によると明治21年、新聞記事で紹介されたことがあるという。
5) 塩田弓吉(1912)「北海道に於ける石器時代遺跡遺物所在地」『人類学雑誌』28—1
阿部正己(1918)「石狩国の環状石籬に就て」『人類学雑誌』33—1
宮坂光次(1925)「石狩国空知郡音江村の環状石籬」『考古学雑誌』15—3
6) 駒井和愛(1952)「日本に於ける巨石記念物 続々々」『考古学雑誌』38—5、6
〃 (1955)「北海道音江の環状列石」『考古学雑誌』41—1
〃 (1956)「北海道音江の環状列石と朱漆塗弓」『考古学雑誌』42—1
7) 加藤晋平(1963)「丸のみ形石斧について」『考古学雑誌』48—4

参考文献

- 瀬川秀良(1974)『日本地形誌 北海道地方』朝倉書店
〃 (1977)『深川市史』深川市役所
〃 (1985)『農郷』音江農業協同組合

II 調査の方法

1 発掘区の設定

発掘にあたっては、調査区全域に次の方法でグリッドを設定した。

道路予定線センターの STA 87 と STA 88 を結ぶ直線を基準線（Mライン）とする。そして STA 87 を基準点（70 ライン）として 10 m ごとに方眼を区切る。基準線に直交する線を南西から北東に 70・71・72……80 のアラビア数字で示し、基準線に平行する線を北西から南東に C・D・E……U のアルファベットで表示する。この 10 m の方眼は、その西の交点をもって呼称する（例：M-80）。さらに、この 10 m 方眼を 5 m 方眼に四分割し、それぞれ西側から反時計まわりに a・b・c・d と呼称する（例：M-80-a）。

STA 87 平面直角座標系 第Ⅲ系 $X = -34214.1768$ $Y = -13043.3977$

STA 88 平面直角座標系 第Ⅲ系 $X = -34150.0526$ $Y = -12957.6880$

2 調査の方法

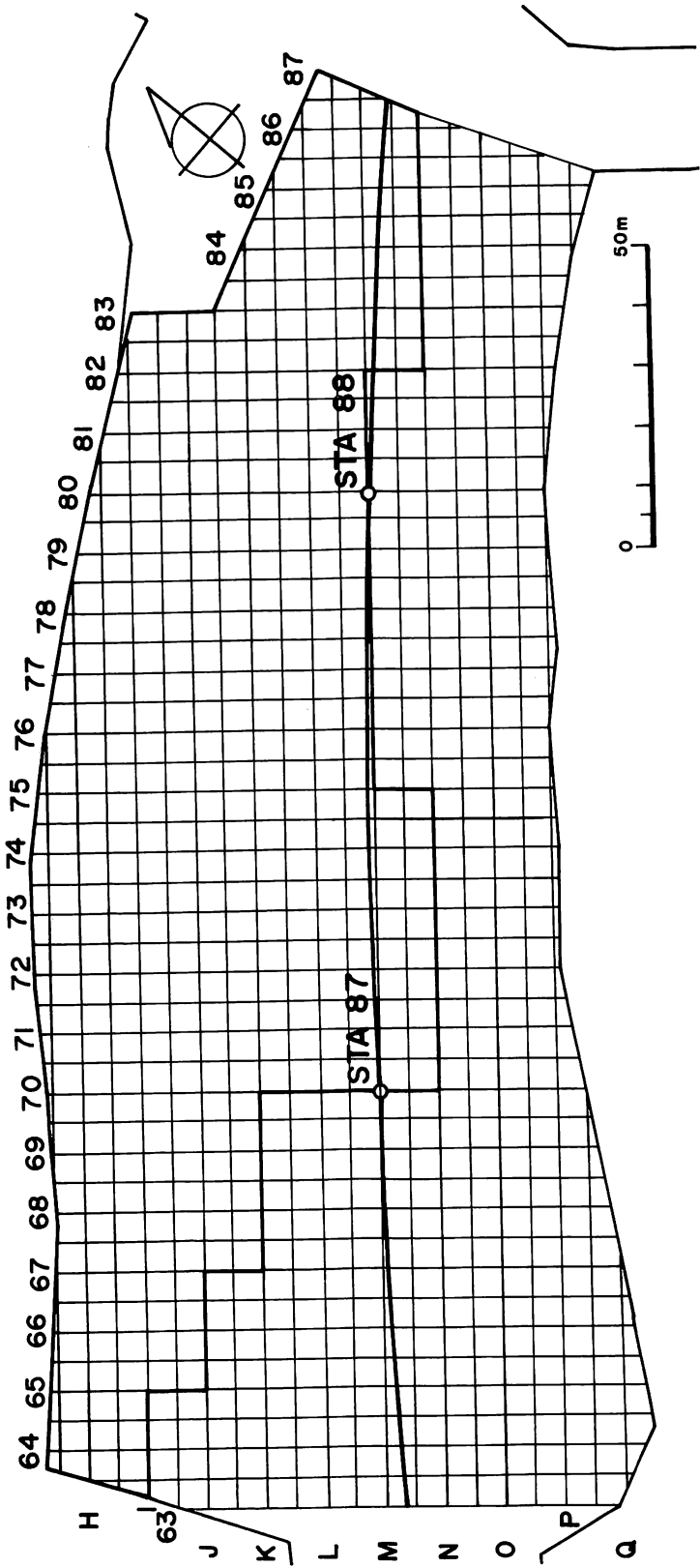
発掘区のうち耕作がⅣ層（地山ローム）に深く達しており、かつ遺物が極めて希薄であると判断した 3,300 m² については重機を用いてⅠ層（耕作表土）を除去し、Ⅳ層上面において遺構の有無を確認する方法をとった。遺物は 10 m グリッドごとに一括して取りあげた。このほかの区域は人力によって調査を進め、Ⅰ層から出土した遺物については 5 m グリッドごとに一括し、Ⅱ層から出土した遺物は状況に応じて撮影して、これも 5 m グリッド一括で取りあげた。また調査区の標準層位を把握するため、原則としてアルファベットの H、K ライン、アラビア数字の 69、74、79、84 ラインにそってベルトを設定し、各ベルトとも 5 m おきに柱状図を作成した。

遺構は大型のものは四分画法、小型のものは二分画法で調査し、土層断面・完掘状況・遺物出土状況を撮影後、縮尺 20 分の 1 あるいは 10 分の 1 で実測した。遺構覆土中の遺物については一括して、床面の遺物は出土位置を記録して取りあげた。また遺構覆土のうちフレーク、チップを含有するものについては土壌を水洗して取り上げた。

これらの作業を終えた後、旧石器時代の遺構・遺物の有無を確認するため、調査区全域にわたってトレンチ調査を行ったが、これに相当するものの検出は皆無であった。

3 遺物の分類

土器はおもに器形と文様により、石器は形態によって分類した。分類は記号を用いた凡例化をせず、本文中に記述する。（森 秀之）



図II-1 発掘区の設定

III 遺構と遺構出土の遺物

1 竪穴住居跡

調査区北東側の平坦部から2軒(H-1・2)と北西側の傾斜地と平坦部の境界付近から1軒の計3軒を発掘した。床面の出土遺物などから縄文時代中期に位置づけられる。(森 秀之)

H-1

調査区中央部北側、西へ傾斜する緩斜面(標高108m~110m)に位置している。グリッドI-79-cを地山まで掘り下げたところ、西コーナー側に落ち込みが認められた。そのためグリッドI-79-a・b・dも同様に地山まで掘り下げ精査した結果、長径約3.6m・短径約3.1mのほぼ円形のプランが確認された。I-79-cに直交するトレンチを設定、土層・床・壁の状況などを検討し、竪穴住居跡と想定して調査をおこなった。

覆土 1 褐色土(少量の小礫を混入、粘質) 2 暗褐色土(粘質) 3 褐色土(少量の黄色土粒を混入) 4 明灰褐色土(粘質) 5 暗黄褐色土(汚れている) 6 褐色土(1層より小礫が少ない) 7 黄褐色土(壁の崩落土) 8 焼土 9 淡褐色土 10 黄褐色土

床面は地山を掘り込んでつくられている。平坦で北側へゆるやかに傾斜しているが、南側壁際は7cm~17cmほど高くなっている。この高まりの壁外には0.2m×0.4mのほぼ長方形の張り出し部分があり、ともに堅くなっている。

壁は北西側以外は全体的にやや急傾斜で立ち上がっている。掘り込み面は削平を受けているため不明である。

焼土は北側壁近くの床面上に検出された。0.4m×0.5mの広がりをもち、床面をわずかに掘り込んだくぼみに約10cmの厚さで堆積していた。

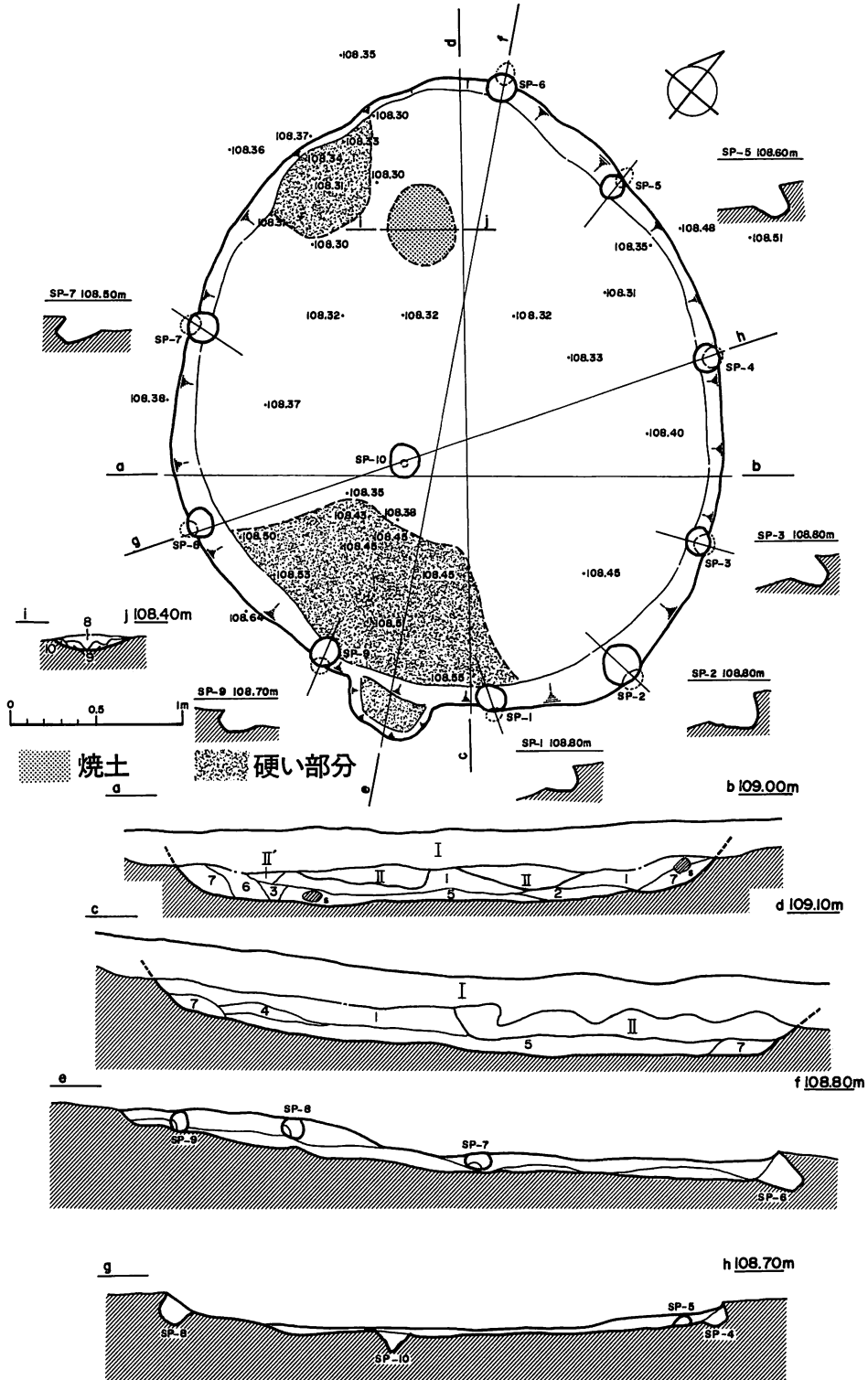
柱穴状の小ピットは10個検出された。床面のSP-10は直立し、先端がとがっている。ほか壁面から検出され、すべて上部が内側に傾く小ピットでSP-10の方向に向いている。

出土遺物はほとんどがフレイク、チップで、少量出土している土器片は細片である。ただ覆土出土の土器片2点(図III-6-1・2)には北筒式土器の特色が認められる。また焼土の上部から黒曜石のフレイク、チップが458点出土した。出土層位は第5層。径約0.6m×0.8mの範囲に集中していた。やや大き目のものが焼土にわずか入り込んでいたが、焼けた痕跡は認められなかった。住居廃棄後に一括して投棄されたものと考えられる。(和泉田毅)

H-2

H-1の北西方向2mほどのところに位置している。グリッドI-79-a・bにおいて地山まで掘り下げたところ、遺構とみられる黒色ないし褐色土の落ち込みがとらえられた。プランが不明瞭なためトレンチ調査を行い、土層や床・壁の立ち上がりの状況などから、竪穴住居跡であることを確認した。

覆土 1 明茶褐色土 2 茶褐色土(黄褐色パミスを多く含む) 3 明茶褐色土(黄褐色パミ



图III-1 H-1

スを含む) 4 明茶褐色土(パミスをわずかに含む)

覆土はH-1に比べて全体に腐植土の割合が少ないことから、人為的に埋め戻されている可能性が考えられる。床面はほぼ平坦で、北側へ緩やかに傾斜している。壁および壁際には柱穴状の小ピット12個が検出された。径20cmほどのもの(SP-1~7)と径10cmほどのもの(SP-9~13)の2種類がある。前者のうちSP-4・6は住居跡H-1の壁をめぐる小ピットと同様に内傾している。ほかのSP-1~3・5・7も底面の形状から判断すると、内傾していたものとみられる。

焼土は南西壁際の床面より10cmほど高い位置で検出された。図示した石槍や、すり石(図Ⅲ-6の5・6)を含め、遺物が焼土検出面とはほぼ同様の高さで出土するものが多いことから推定すると、ここに一つの生活面が想定できる。(田中哲郎)

H-3

調査区の西側、急斜面(西へ傾斜する)から緩斜面に移行する標高97m~99mのところに位置している。グリッドH-69-aの黒色腐植土(Ⅱ層)から土器片・石器破片などが多数、Ⅲ層上面からはほぼ水平の状態で砥石(図Ⅲ-6-10)が出土した。これらのことからこの周辺に遺構の存在が予想されたため、グリッドG-69-b・cの包含層調査にあたっては遺構検出作業も併行しておこなった。この結果、盛土・耕作土を除去した時点で3.2m×4.0mのほぼ半長円形のプラン(西側は不鮮明であった)が検出された。またH-69-a~H-70-aラインの土層観察で東側(山側)の壁の立ち上がりが確認されたことから、竪穴住居跡を想定して調査をおこなった。

覆土 1 茶褐色土(粘質、Ⅲ層と酷似しているが、褐色土を多く含み、礫が少ない) 2 暗褐色土(粘質、小礫を含まない)

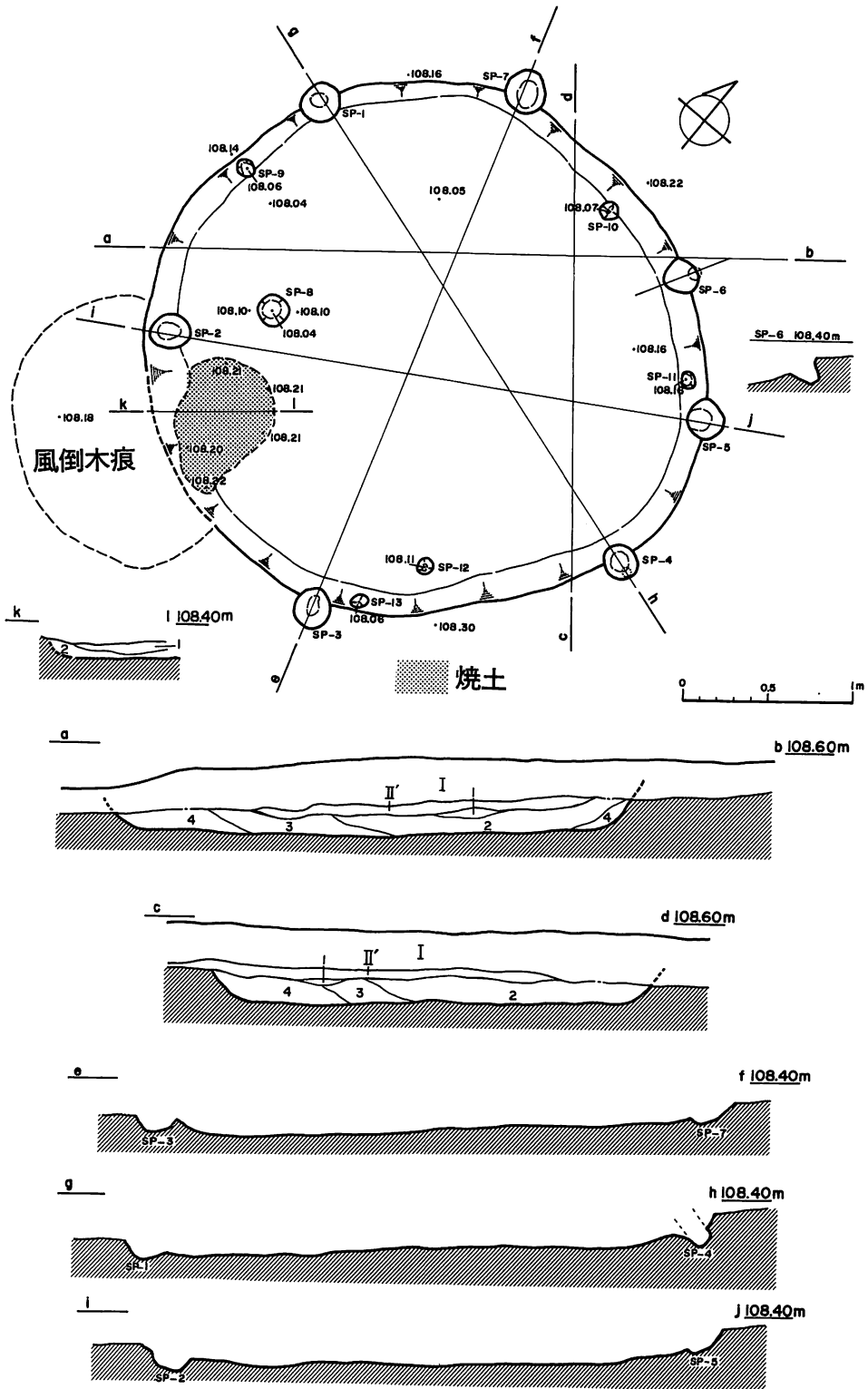
床面はⅢ層を掘り込んでつくられており、とくに東側が深くなっている。全体に平坦で強く、わずかに西側に傾斜している。SP-6とSP-7の間(0.7m×0.8mの範囲)は、ほかより強く、わずかに高い。

東側の壁は急傾斜で立ち上がっているが、ほかは住居廃棄後の流失のためか、ほとんど立ち上がりは認められなかった。掘り込み面はⅡ層中と思われる。

炉跡は検出されなかったが、床面中央部西寄りには0.5m×0.7mの範囲に赤化したと思われる部分が認められた。火の使用痕かと推測される。

柱穴状の小ピットは9個検出された。床面の小ピット(SP-8・9)は直立し、先端部はわずかに細くなっている。またほかの小ピットは壁面につくられており、すべて内側に傾いている。SP-2・3・4・5はSP-8の方向に向いている。住居の全体のプランは明らかではないが、小ピットの位置関係・方向などから推定すると、長軸方向を南-北とし、長径約5.7m、短径約3.9mの楕円形状のプランの竪穴と推定される。

北側の床面・壁際からは図Ⅲ-6-7に示す土器が口縁を東側に向け、横倒しになってつぶれた状態で出土した。これは住居廃棄時の原位置のままと思われる。床面からはほかにつまみ付



図III-2 H-2

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

きナイフ（図Ⅲ—6—8）・スクレイパー（図Ⅲ—6—9）・台石（図Ⅲ—6—11）などが出土している。これらは床面直上にあった礫群の中、あるいはそれらの下から出土したものである。この礫群は東側の壁側に集中していること、床面よりわずか上方にあり、層位的にみて図Ⅲ—6—7の土器の上方にあたることなどからみて、住居廃棄後に投棄されたか、あるいは流入したものと考えられる。またH—69—aのⅢ層上面から出土した砥石（図Ⅲ—6—11）も、出土レベルなどからみてこの住居に伴うものと考えてよいだろう。（和泉田毅）

2 土 墳

住居跡H—1・2の周辺に3基、やや北東寄りに2基、計5基の土墳を検出した。共伴する遺物は乏しく、性格・時期については不明だが、位置関係からみて住居跡に関連する遺構とみられる。なお、P—4と命名したものは調査の結果遺構ではないことが判明したので欠番とする。（森 秀之）

P—1

住居跡H—2から5mほど南西方向の緩斜面に位置している。グリッドH—78—cを調査中、Ⅰ層の下部でフレイク、チップが集中して出土する部分があった。これを中心に周辺を精査したところ、Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みがとらえられ半截した結果、土墳と確認された。

覆土 1 茶褐色土 2 黒色土（漆黒、遺物多し） 3 暗茶褐色土（赤褐色土粒を含む） 4 黒色土（赤褐色土粒を含む） 5 茶褐色土（1層との間に黒色土の薄層あり） 6 暗茶褐色土 7 暗黄褐色土（硬くしまる）

平面形は南東側がやや突き出た楕円形、長軸方向はほぼ北西—南東である。墳底は皿状。遺物の大半は2層中から出土した。出土状況図に示した礫は、覆土下位の6・7層上面で出土したものである。これと、上位の1～3層が北側から黒色土を間にして埋まっている状況を見ると、人為的に埋め戻されたものと考えられる。また、Ⅰ層下部で出土したフレイク、チップは、耕作によって土墳上部が削平された際に移動したものと推定される。（田中哲郎）

P—2

住居跡H—2から約5m北北東方向に位置している。Ⅳ層上面で暗茶褐色土の落ち込みとしてとらえられ、半截して土墳であることを確認した。

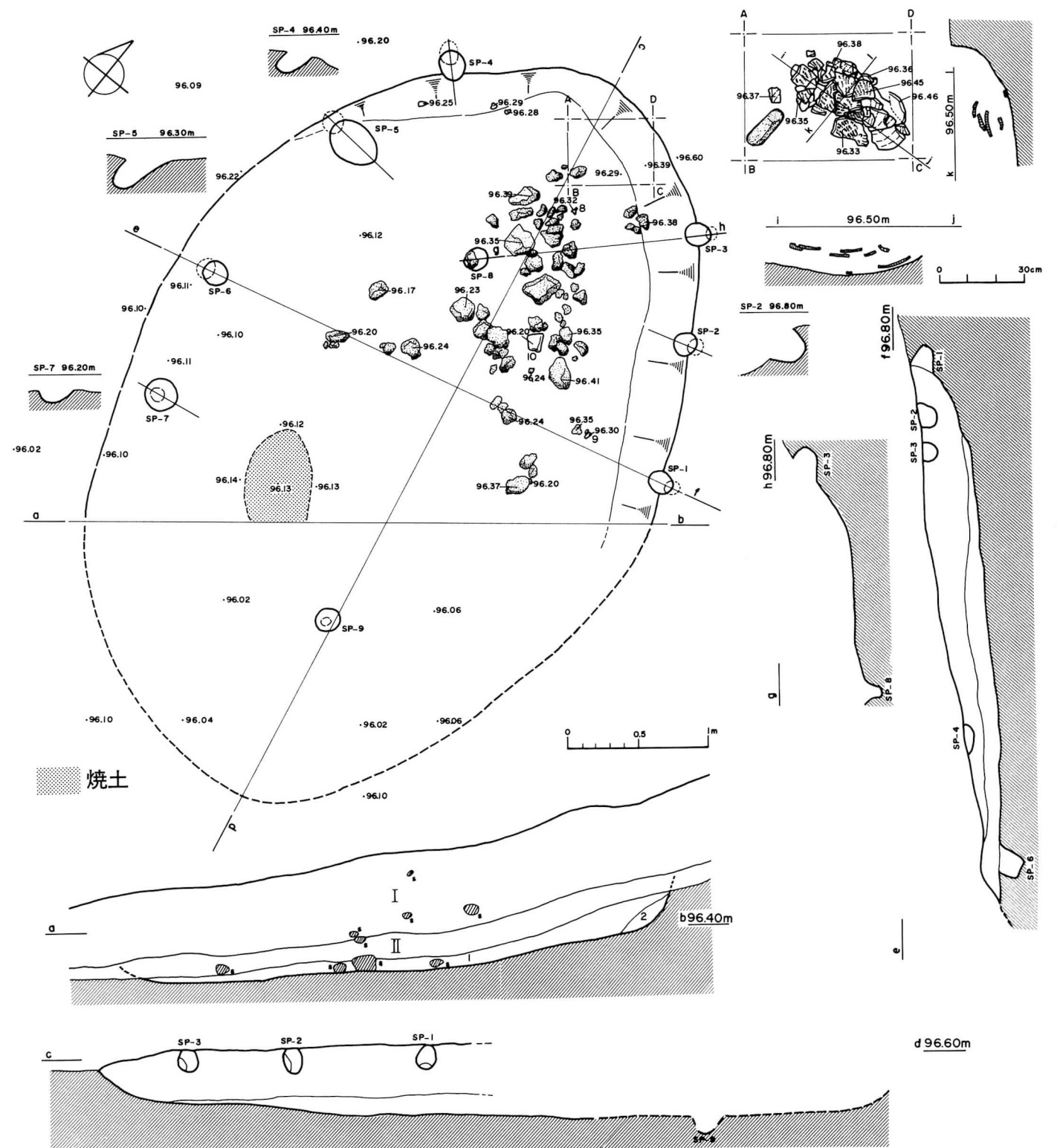
覆土 1 暗茶褐色土 2 黒色土（黄褐色パミスを含む） 3 暗茶褐色土（1より色調がわずかに明るい） 4 暗黄褐色土

断面形は浅い皿状。土墳上部が耕作によって削平され、墳底部分のみが残ったものとみられる。規模・形態・覆土の状況はともにP—1に似ている。長軸方向もP—1同様北西—南東を示し、斜面傾斜方向にはほぼ一致している。出土遺物はない。（田中哲郎）

P—3

調査区東部のⅣ層上面において、径0.7mのはほぼ円形の黒色土の落ちこみを検出した。半截して調査を行い、形状から遺構と判断した。

覆土 II 黒色土 1 暗黄褐色土（粒子が細かく、ローム粒・塊が混入） 2 暗黄褐色土（1



图Ⅲ-3 H-3

と同質、わずかに黄色味が強く、地山の礫と同様の小礫が混入)

竈底はⅣ層中に碗状に掘り込まれ、壁はゆるやかに立ち上がっている。掘り込み面は上部を削平されているため不明である。遺物は出土していない。(熊谷仁志)

P-5

Ⅳ層の上面が赤色化している個所を発見したため半截したところ、土壌であることが判明した。確認面はⅣ層上面である。

覆土 1 焼土 2 暗黄褐色土(ロームに焼土粒混入)

覆土は黒色土をほとんど混じえないロームで、埋め戻されているようである。覆土1層はよく焼けており、とくに2層との境界には焼結して硬化した拳大の焼土塊がみとめられた。床面はわずかに湾曲している。床面中央部に小ピットがある。遺物はない。床面から炭化した木片が出土した。これは ^{14}C 年代測定の結果、B. P. 4,830 \pm 90の数値が得られている。(森 秀之)

P-6

住居跡H-1の南東約10mのところにある。Ⅳ層上面を調査中に片岩・黒曜石のフレイクを集中して包含する径約0.9mの円形の黒色土を確認したため、周辺を精査して遺構であることを確認した。長軸4m・短軸3mほどの浅い皿状の土壌である。

覆土 1 黒色土(Ⅱ層に類似、少量のローム粒が混入、片岩・黒曜石のフレイク、チップを多量に含む) 2 暗黄褐色土(片岩・黒曜石のフレイクが少量出土、小礫を含む) 3 暗黄褐色土(2層と同質、やや黄色味が強い。片岩・黒曜石のフレイクが少量出土、礫を含む)

竈底は東側から西側に向ってゆるやかに傾斜している。壁はゆるやかに立ち上がっているが、北側では内側に張り出す。規模・形状からみると住居跡とも考えられるが、H-1・2の様に炉跡が検出されなかったこと、小ピット8個が検出されたが、規模・形状・配置に規則性が認められず、しかも小ピットの中には覆土を切って掘り込まれており、時期を異にすると判断されるものもあることなどから住居跡とみることはできない。掘り込み面は削平が地山まで及んでいるため不明である。遺物には石斧の破損品・未製品や片岩・黒曜石のフレイクなどがあるが、すべて覆土中から出土し、しかも大部分は覆土1層中に集中していた。出土状況・出土層位からみると、これらの遺物はこの土壌が廃棄され、完全に埋まりきる前に、その窪地で石器の製作が行われたか、フレイクを投棄したものと思われる。(熊谷仁志)

3 焼土跡

F-1

Ⅳ層上面において確認した。近年の耕作によって上面を削平され、生活時の面は失われている。配石や掘り方などはない。遺物は出土しなかった。(森 秀之)

層位 1 焼土 2 暗褐色土(Ⅲ層が2次的に焼けて赤色化している) 3 Ⅲ層

III 遺構と遺構出土の遺物

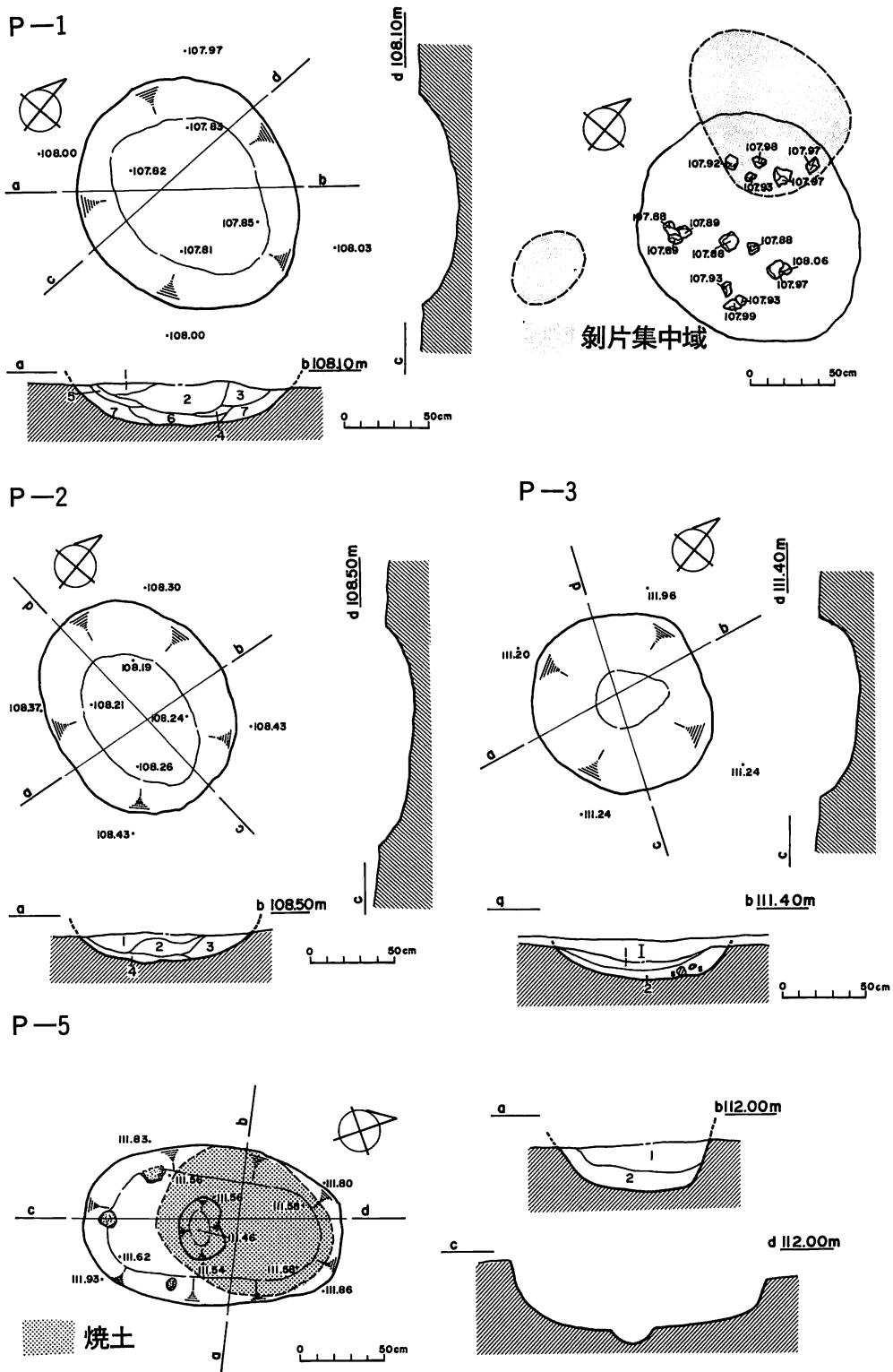
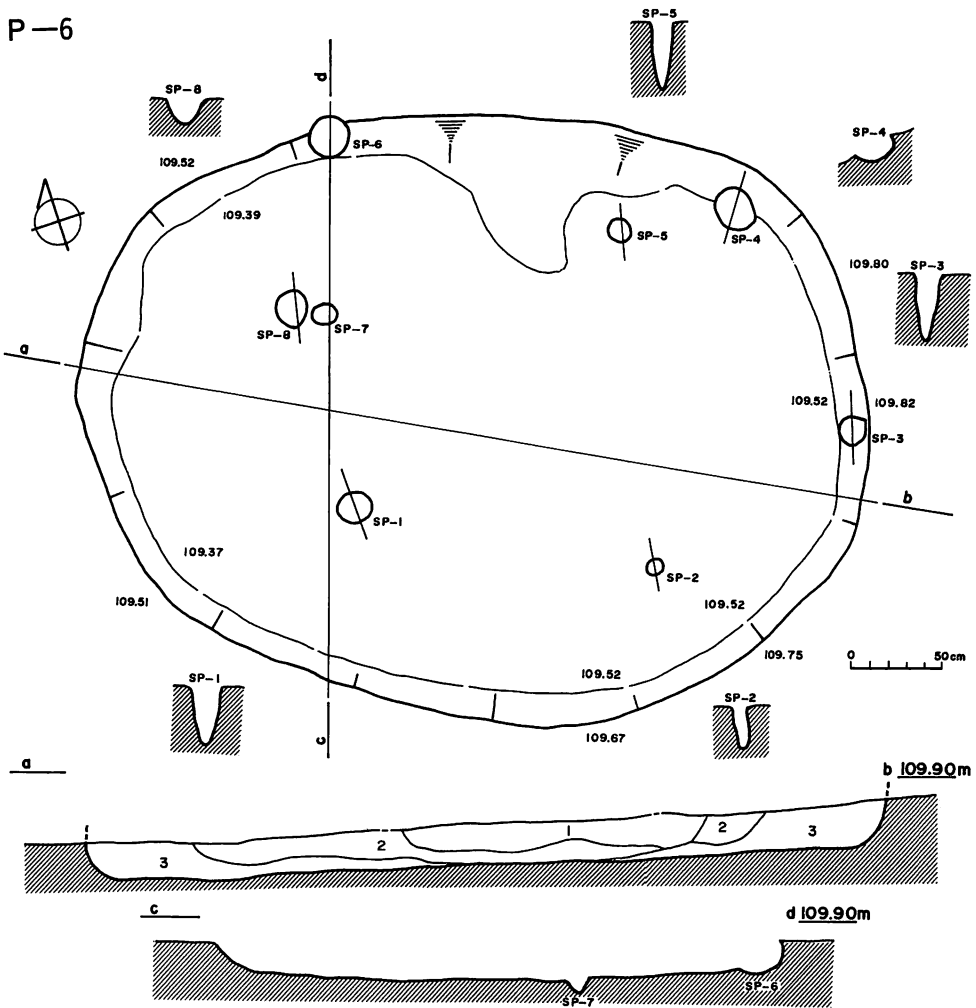
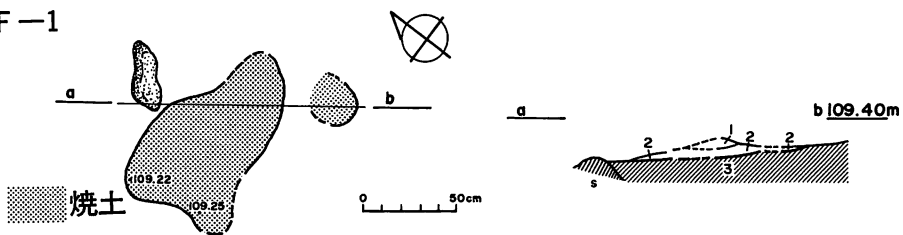


图 III-4 P-1·2·3·5

P-6

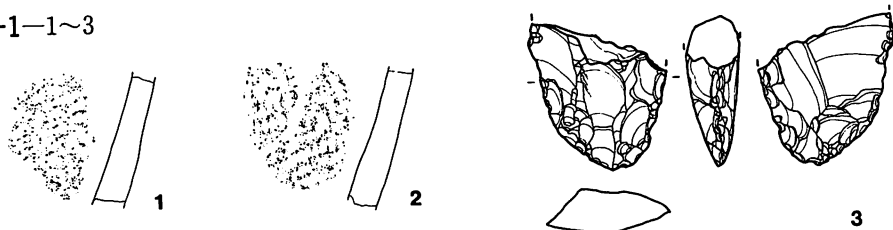


F-1

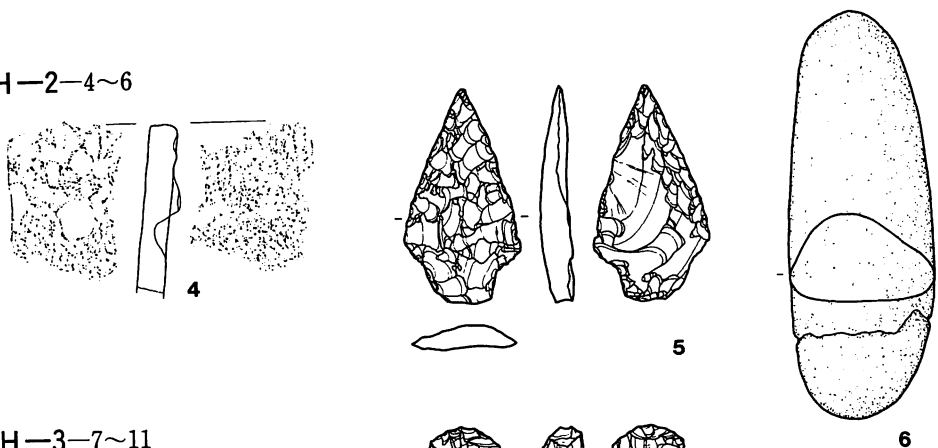


図Ⅲ-5 P-6・F-1

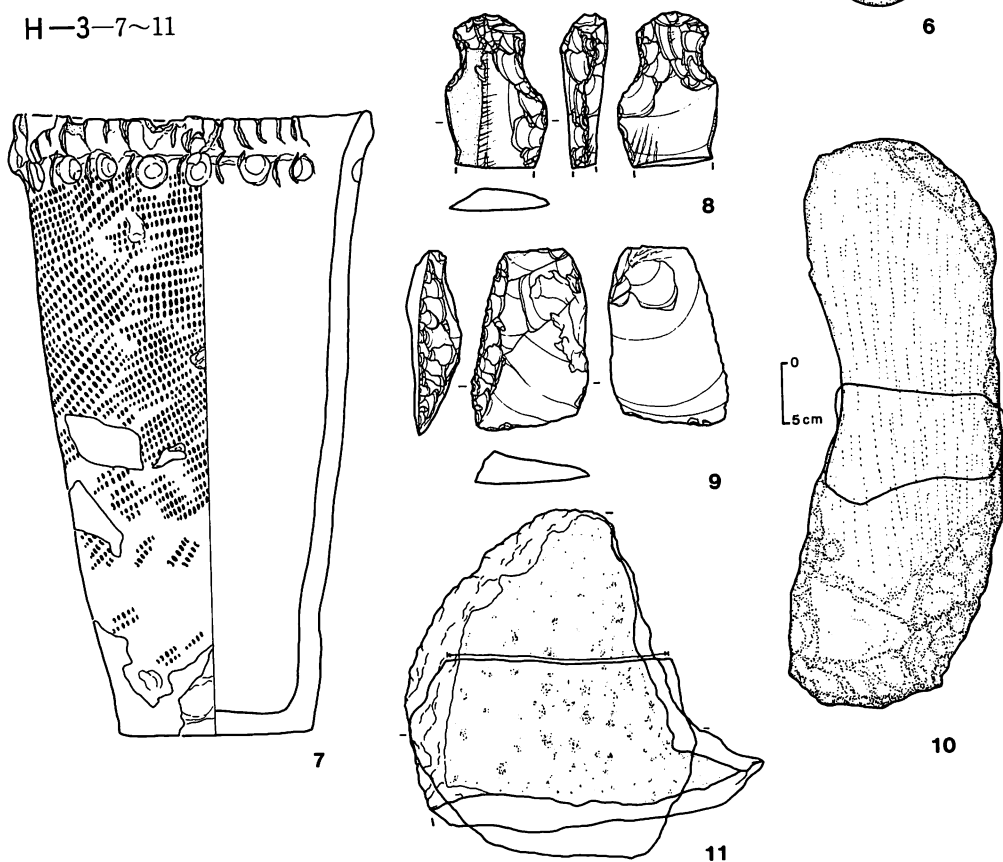
H-1-1~3



H-2-4~6

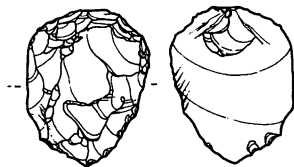


H-3-7~11

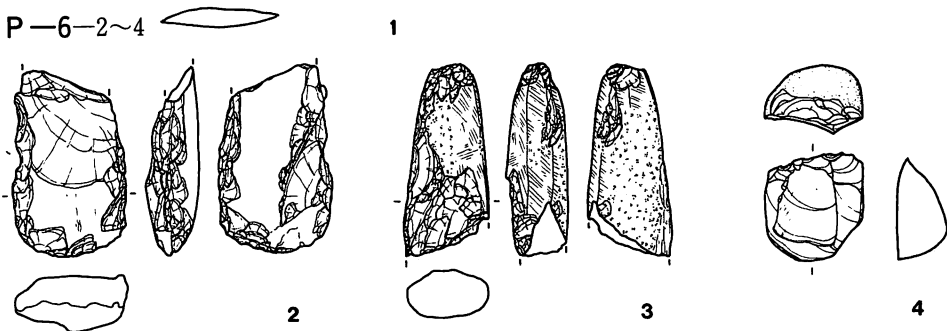


図Ⅲ-6 遺構出土の遺物 (1)

P-1-1



P-6-2~4



図Ⅲ-7 遺構出土の遺物 (2)

H-1

位 置	平面形	規 模 (m)			出 土 遺 物
		確 認 面	底 面	最大深	
I-79-a・b・c・d	円 形	3.75×3.22	3.44×2.97	0.18	床 土器 分類不明15 石器等 片岩フレイク1 覆土 土器 北筒式2、分類不明13 石器等 スクレイパ ー1、黒曜石フレイク458、片岩フレイク6

掲載遺物一覧表 —土器—

図No	分 類	層位	観 察 所 見
Ⅲ-6-1	北筒式	覆土	胴部破片、単節の結束羽状縄文が施文されている。
〃 2	〃	〃	同上 同一個体

掲載遺物一覧表 —石器—

図 No	名 称	大 き さ (cm)	重さ(g)	材質	層位	観 察 所 見
Ⅲ-6-3	スクレイパー	(3.9)×3.6×1.1	(13.8)	Obs.	覆土	

H-2

位 置	平面形	規 模 (m)			出 土 遺 物
		確 認 面	底 面	最大深	
H-79-b・c I-79-a・d	楕円形	3.26×3.15	2.97×2.9	0.14	覆土 土器 北筒式1、分類不明1 石器等 石槍又はナイ フ1、すり石1、黒曜石フレイク5、片岩フレイク3

掲載遺物一覧表 —土器—

図 No	分類	層位	観 察 所 見
Ⅲ-6-4	北筒	覆土	口縁部破片。指頭による円形刺突、図Ⅳ-2-3 と同一個体。

Ⅲ 遺構と遺構出土の遺物

掲載遺物一覧表 ―石器―

図No	名 称	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材質	層位	観 察 所 見
Ⅲ-6-5	石槍又はナイフ	5.7×3.1×0.7	8.7	Obs.	覆土	腹面に一次剝離面を残し、側面観はやや湾曲する。
ㇿ 6	す り 石	16.2×5.9×3.5	50.2	Ta.	ㇿ	

H-3

位 置	平面形	規 模 (m)			出 土 遺 物
		確 認 面	底 面	最大深	
G-69-b・c H-69-a・d	楕円形	(5.76)×(3.8)	(3.9)×3.5	0.42	床 土器 北筒式甕形1 石器等 つまみ付ナイフ1、スクレイパー1、台石1、砥石1、Uフレ1 覆土 土器 北筒式1、石器等 黒曜石フレイク77、片岩フレイク13

掲載遺物一覧表 ―土器―

図No	分類	層位	観 察 所 見
Ⅲ-6-7	北筒式	床	口径37.2cm、高さ65.2cm、底径20.3cm、指頭による円形刺突と2段の爪形文が口縁部にある。

掲載遺物一覧表 ―石器―

図No	名 称	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材質	層位	観 察 所 見
Ⅲ-6-8	つまみ付ナイフ	(4.0)× 0.7×0.5	(10.1)	Obs.	床	下半分欠損
ㇿ 9	スクレイパー	4.8 × 3.1 ×0.9	19.6	Aga.	ㇿ	背面左側縁に刃部
ㇿ 10	砥 石	44.8 × 16.0 ×9.6	10kg	Sa.	ㇿ	
ㇿ 11	台 石	(12.9)×(14.4)×8.1	(1.3kg)	And.	ㇿ	全体の4分の1ほどの破片、使用面は湾曲している。

P-1

位 置	平面形	規 模 (m)			出 土 遺 物
		確 認 面	底 面	最大深	
H-78-c I-78-d	楕円形	1.43×1.36	1.06×0.72	0.22	覆土 土器 分類不明17 石器等 Uフレイク1、礫14、黒曜石フレイク114、片岩フレイク41

掲載遺物一覧表 ―石器―

図 No	名 称	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材質	層位	観 察 所 見
Ⅲ-7-1	Uフレイク	4.1×3.3×0.5	6.6	Obs.	覆土	

P-2

位 置	平面形	規 模 (m)			出 土 遺 物
		確 認 面	底 面	最大深	
H-80-b	楕円形	1.28×1.07	0.87×0.60	0.14	な し

P-3

位 置	平面形	規 模 (m)			出 土 遺 物
		確 認 面	底 面	最大深	
K-83-a	円 形	1.12×1.05	0.42×0.35	0.17	床 礫2

P-5

位 置	平面形	規 模 (m)			出 土 遺 物
		確 認 面	底 面	最大深	
K-83-c L-83-d	楕円形	1.55×0.96	1.27×0.63	0.5	な し

P-6

位 置	平面形	規 模 (m)			出 土 遺 物
		確 認 面	底 面	最大深	
J-79-c J-80-b	楕円形	4.21×3.21	3.85×2.68	0.23	覆土 土器 分類不明1 石器等 石斧未製品2、コア1、 Uフレ1、黒曜石フレイク319、片岩フレイク1,016

掲載遺物一覧表 —石器—

図No.	名 称	大 き さ (cm)	重さ(g)	材 質	層位	観 察 所 見
Ⅲ-7-2	石斧未製品	(7.5)×4.6×22.0	(81.3)	Gr Sch.	覆土	刃部側、研磨に至っていない。
〃 3	〃	(7.7)×3.4× 1.9	(82.2)	〃	〃	基部側
〃 4	石 核	2.8 ×2.5× 1.3	12.9	Obs.	〃	小円礫を利用、打面調整が認められる。

F-1

位 置	規 模 (m)		出 土 遺 物
	確 認 面	最大深	
J-78-c・d	0.94×(0.58)	0.1	な し

IV 包含層出土の遺物

1 土 器

土器は縄文時代中期後葉から後期初頭のものが597点出土した。器形・文様構成・調整・胎土等からみて3類に分けられる。

1) 北筒式土器に相当するもの

1～4は口縁部破片。1・3・4は指頭、2は管状工具で口縁部に刺突が加えられている。このうち1は縦位に貼付けた口縁部突起をもつ。3は二段の押し引き文がある。4は口縁部肥厚帯下位に粘土紐を貼り付け、その間を指頭で撫でつけた後に縄文を施している。

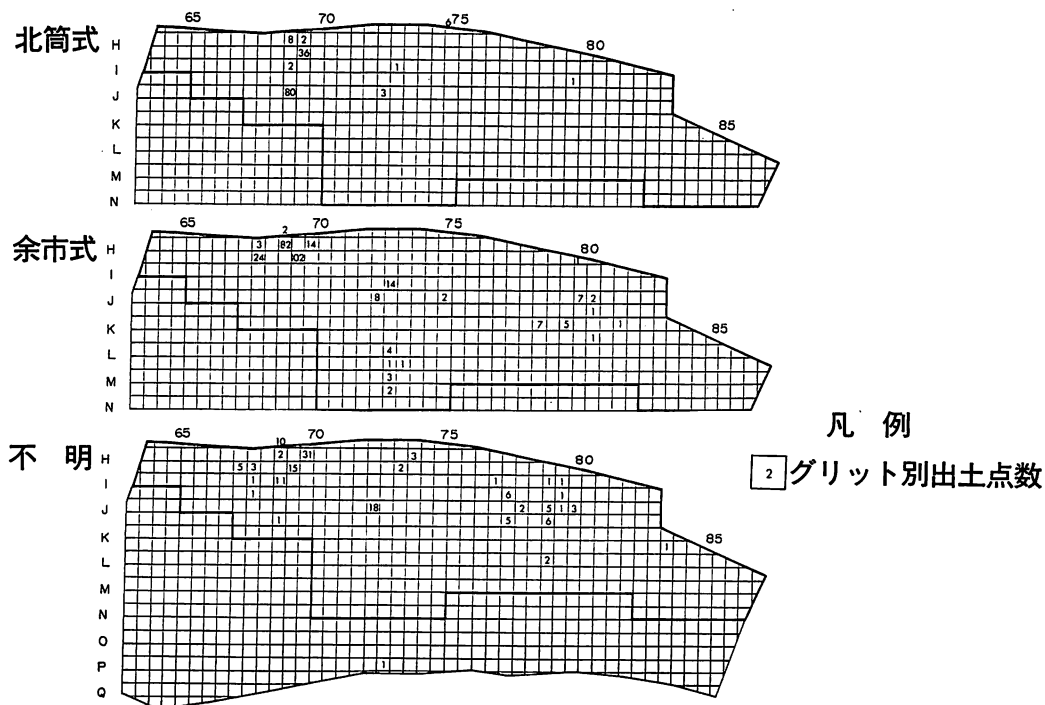
5・6は胴部破片。7～9は底部破片。7は小型土器、底面に縄文がある。

2) 余市式土器に相当するもの

10・11は口唇部直下に貼付帯をもつ。12～16は胴部破片。このうち12・13は羽状縄文である。15・16はタガ状の扁平な貼付帯がある。地文は羽状縄文、この2点は同一個体と思われる。

3) 無文のもの・縄文のみが施されたもの

17は無文の胴部破片。胎土に砂礫を含む。18～20は同一個体である。胎土に砂礫が混じっており、脆弱である。これらの土器は胎土等から推定して余市式土器に含まれるものである。(熊谷仁志)



図IV-1 土器の出土分布

2 石器等

石鏃（1～13） 1～4は無茎で、形態的な特徴から縄文時代早期あるいは前期にかけての遺物と推察される。すべて基部底面が湾入しており、とくに4はえぐりが大きい。5～13は有茎で、このうち5～8は身部と茎部との境界に明瞭な「かえし」がみとめられるもの、9～13はそれとはっきりしないものである。

石槍又はナイフ（14～34） 14は小型で石鏃との区別が困難だが形態からみて便宜的に本分類に含めた。14～18は身部より茎部が長いタイプで、18は唯一、緑色片岩を素材に用いた例である。19～23は身部と茎部の長さがほぼ等しい。23～31は身部に比べ茎部が短い。28は接合された資料で、身部と茎部の境界部分で折損している。32～34は両側縁が非対象でやや粗雑なつくりである。いずれも茎部ははっきりしない。

つまみ付ナイフ（35～40） 35はつまみ部が小さく、背面全体に表面調整が施されており、形態や調整の特徴などから縄文時代早期あるいは前期の遺物とおもわれる。36～40は不整形の剝片のエッジをそのまま刃部とするもので、バルヴに近い厚みのある部分の両側にノッチを入れてつまみ部を作出するタイプである。

スクレイパー（41～66） 41～51は両面調整のもの。とくに41～43は入念に表面調整されており、ポイントに近い整った形状をもつ。52～66は片面のみ、または側縁に調整が限られているもので52～66は剝片の片側あるいは両側縁に刃部があり、52～58には刃部が3個以上ある。63は両側縁にノッチ状の刃部がある。64～66は素材である剝片の一端に急斜度の調整を加えてスクレイパーエッジとしている。

石のみ（67～72） 67・68は基部と刃縁の一部を欠損している。69～72は刃面にえぐりのある特徴的な形状をもつ、いわゆる「丸のみ形石斧」である。

石斧（73～93） 比較的小型のもの（73～75）と角柱状のやや大型なもの（90～93）があるが、刃縁の平面形が丸みを帯びる「円刃」で、側面形が「弱凸強凸片刃」（佐原真、1977）になる石斧がほとんどである。主面や側面に整形の際の剝離や敲打痕を残したものが多い。

たたき石（94・95） 楕円形の礫を用い、片側を打撃している。

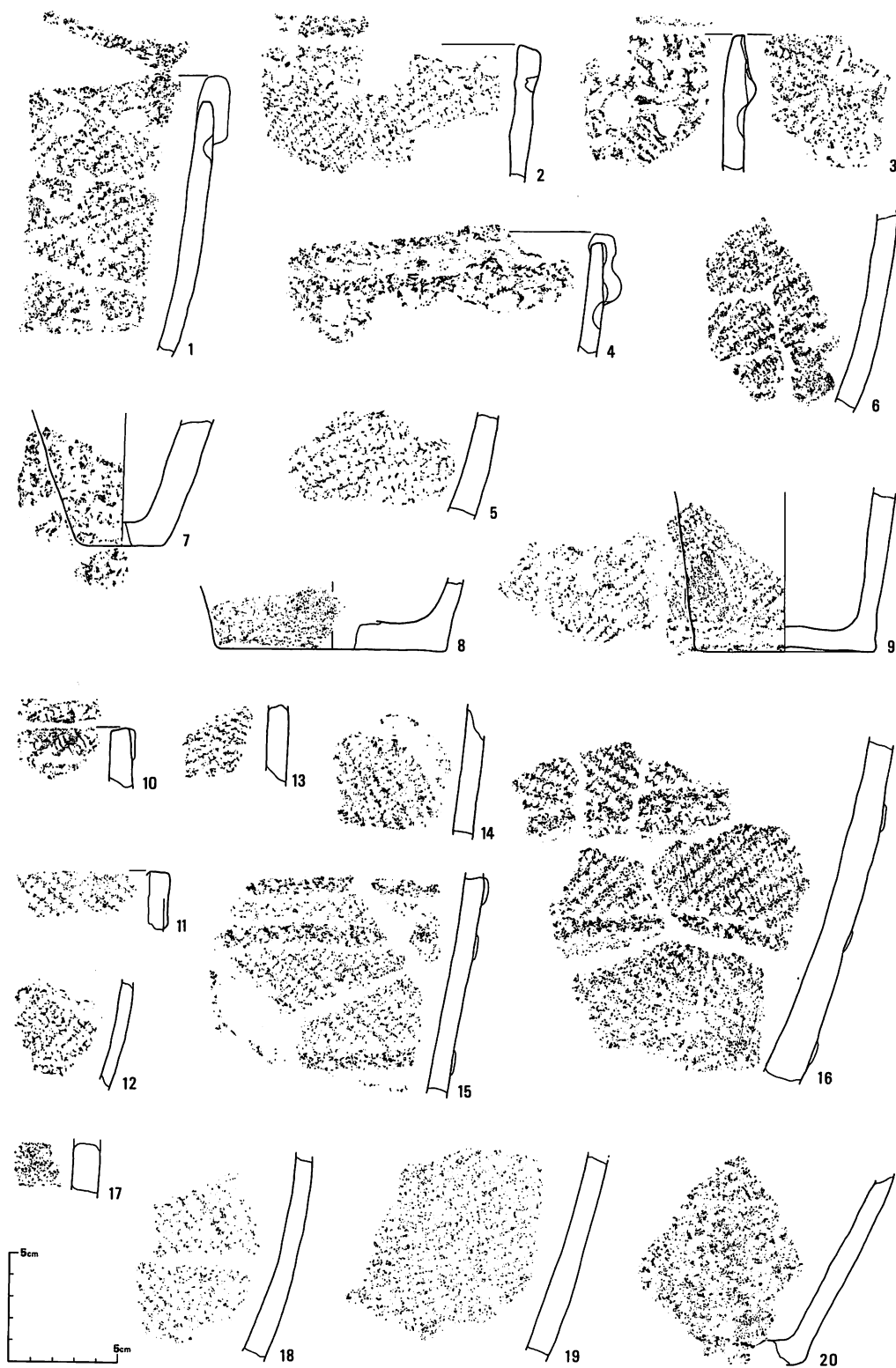
砥石（96～102） すべての砂岩製で使用面が複数ある。96～100は角柱状のもので、98～100は長軸両端を除く4面が使われている。101と102の形状は偏平である。

石核（103～109） 比較的小型で、最終剝離面の長さが3cm位のものが多い。単一の打面をもち、打面調整が施されたプリペアード・コアである。円錐形のもの（103・104）とやや偏平で楔形のもの（105～109）がある。

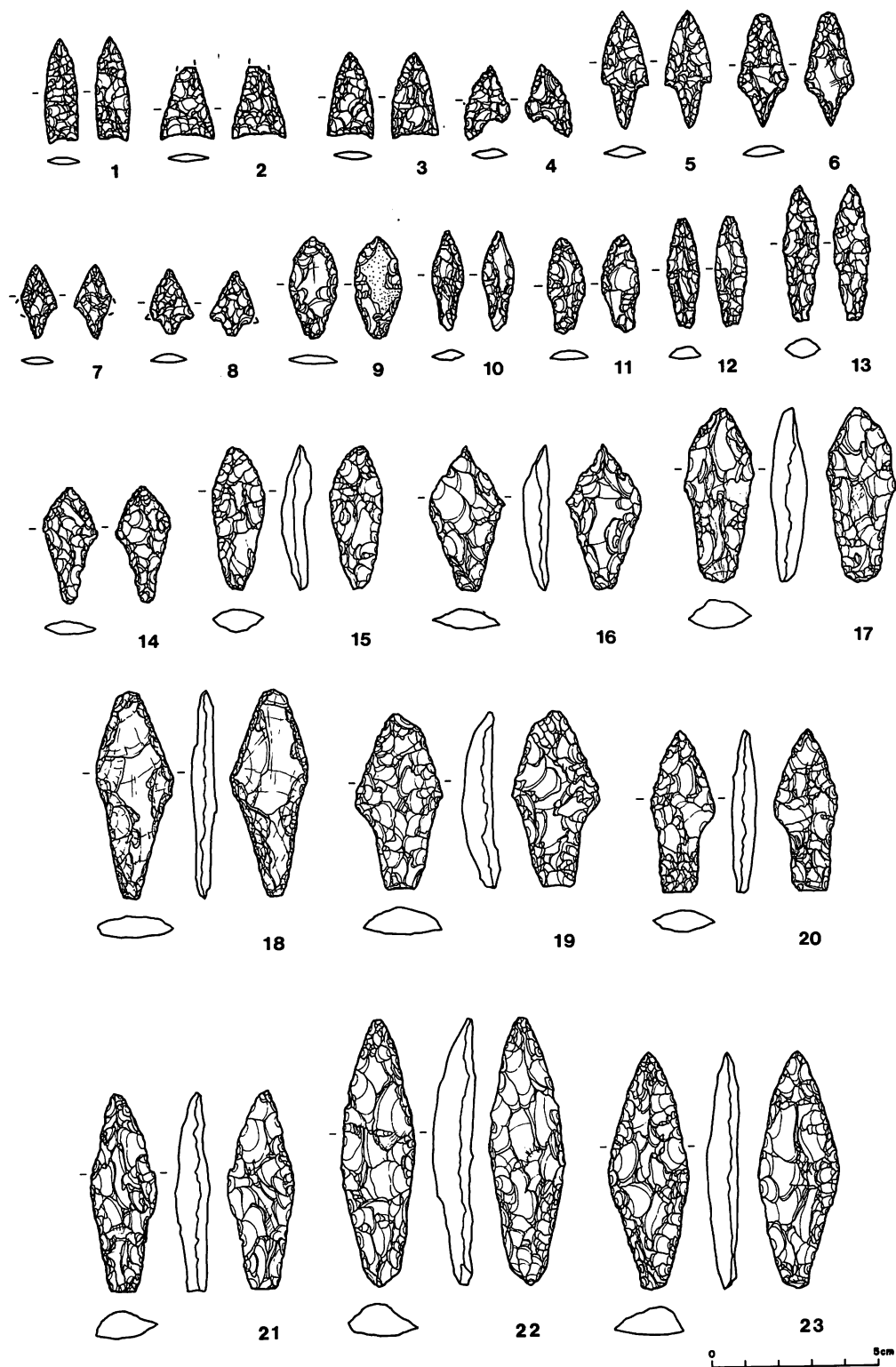
石製品（110・111） 110は垂飾の未製品。111は「虫喰い石」の凹部を穿孔したものである。（森 秀之）

引用・参考文献

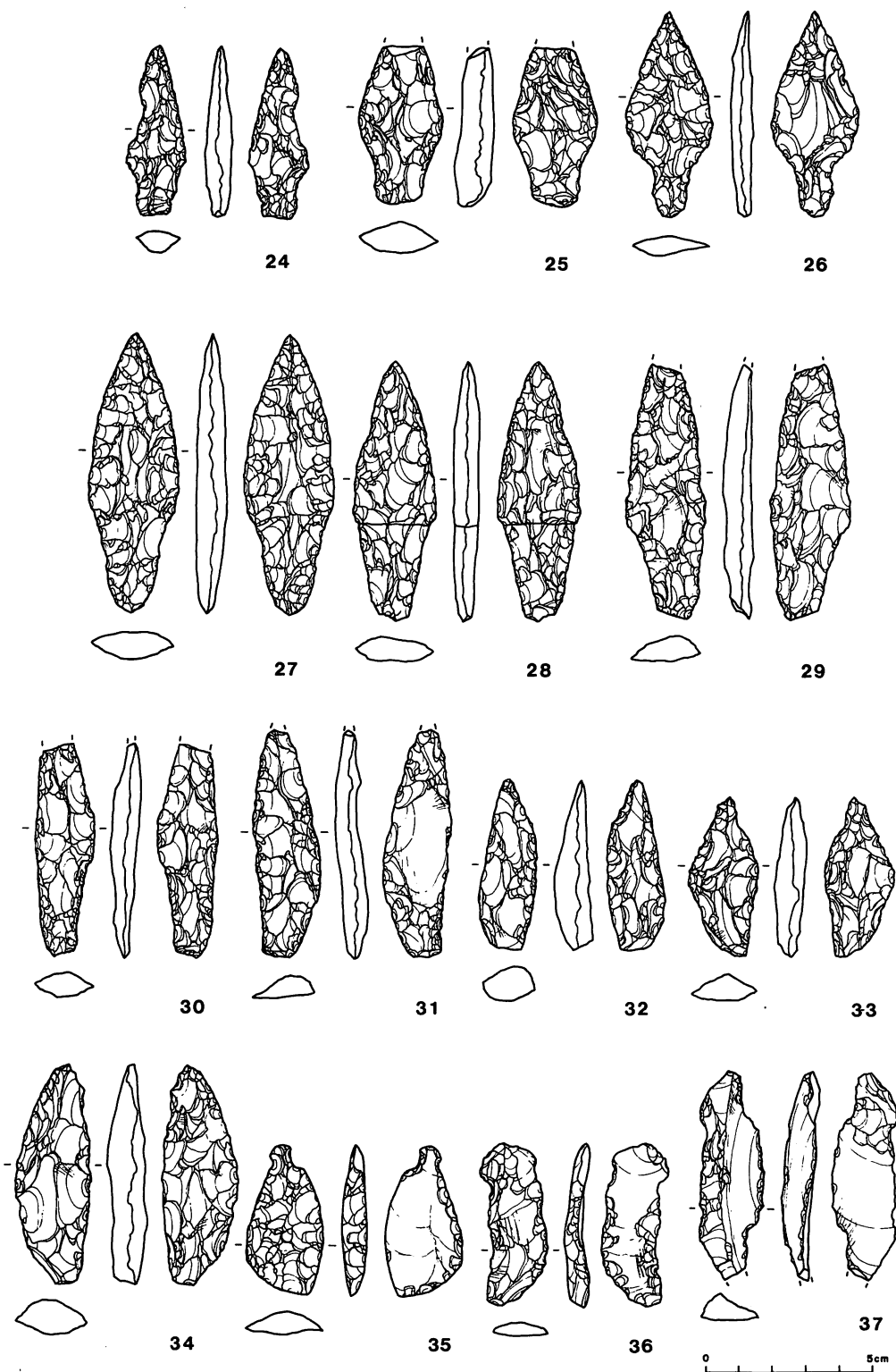
佐原 真（1977）「石斧論——横斧から縦斧へ——」『慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集』



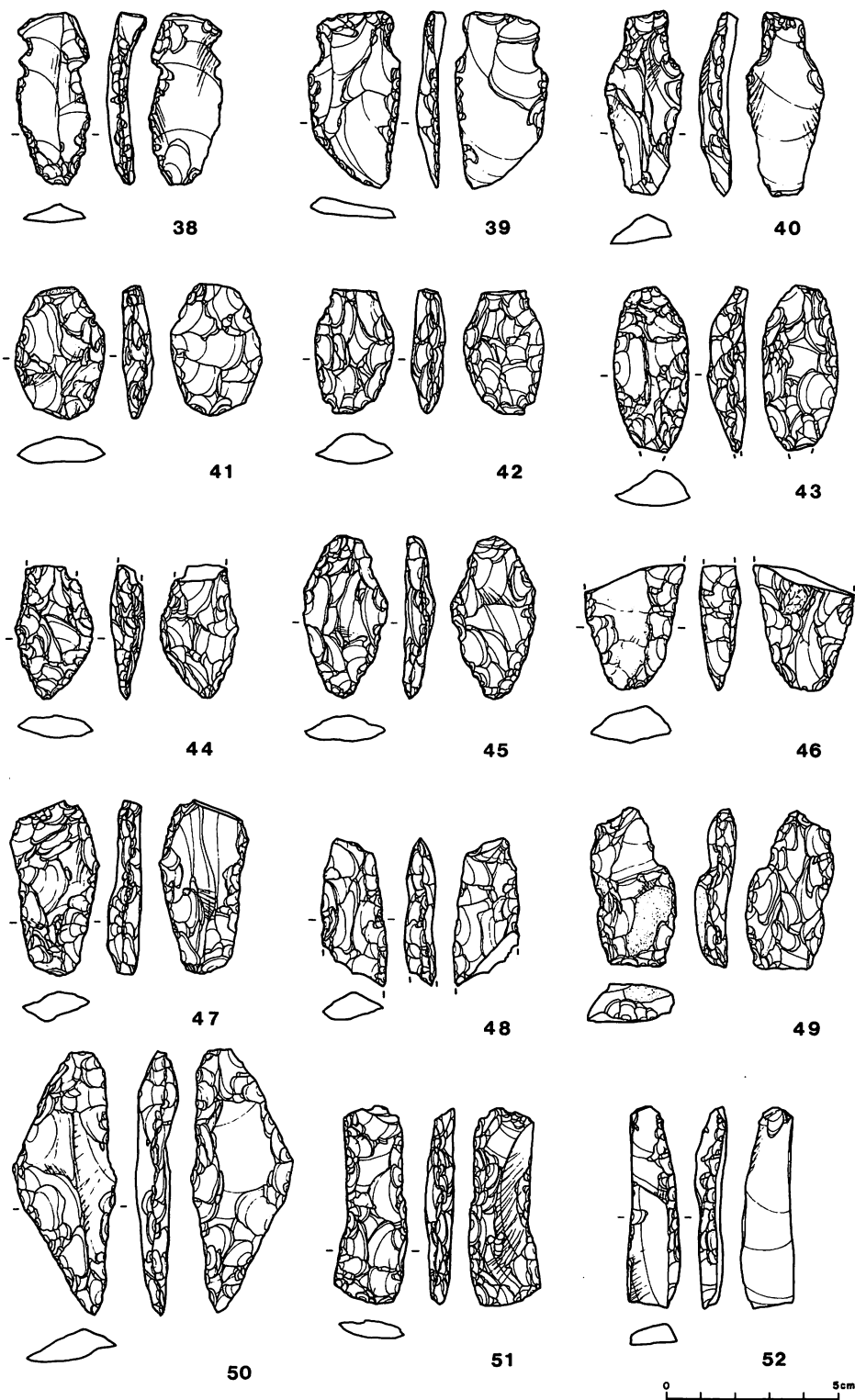
図Ⅳ-2 土 器



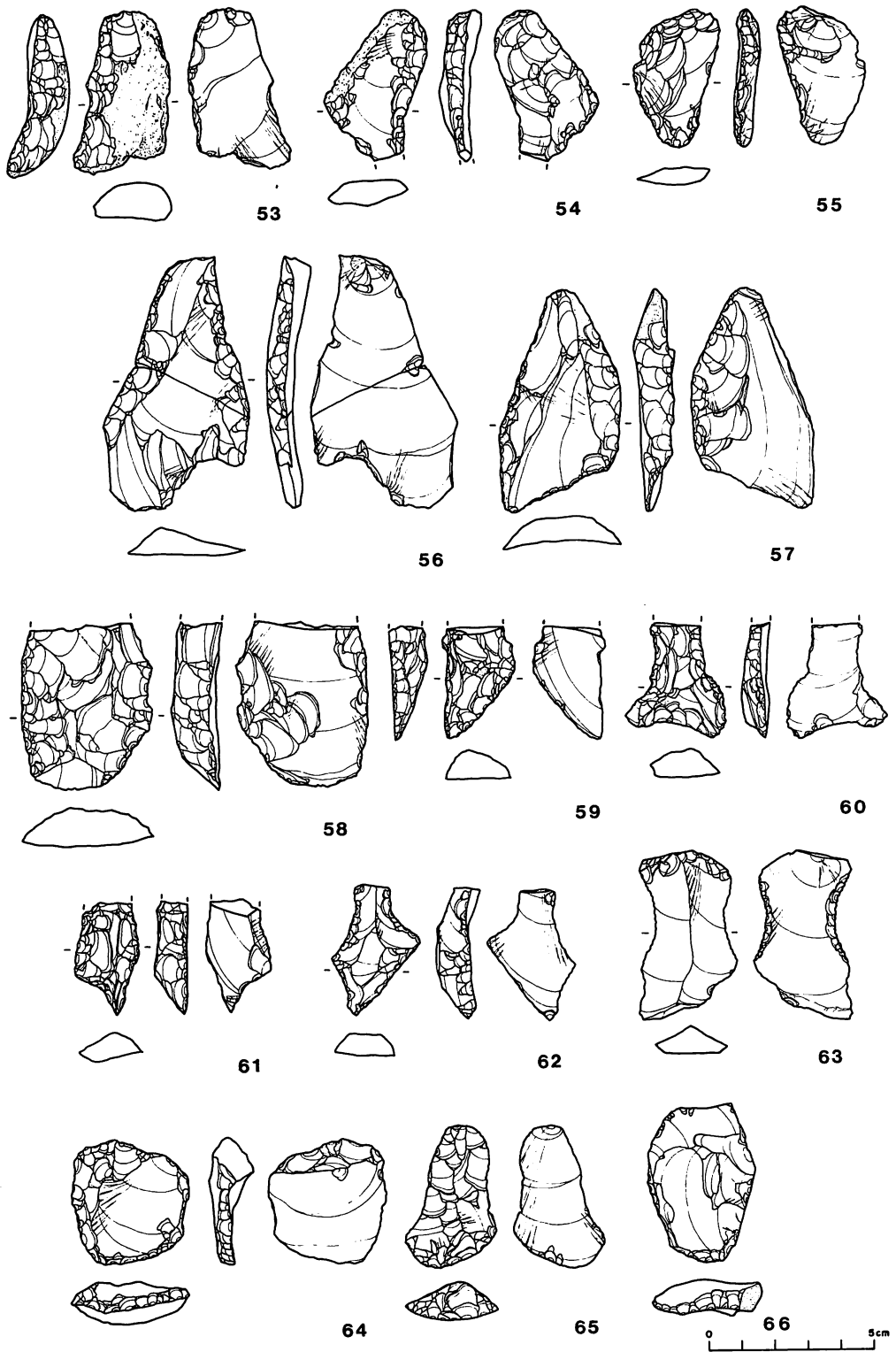
図Ⅳ-3 石 器 (1)



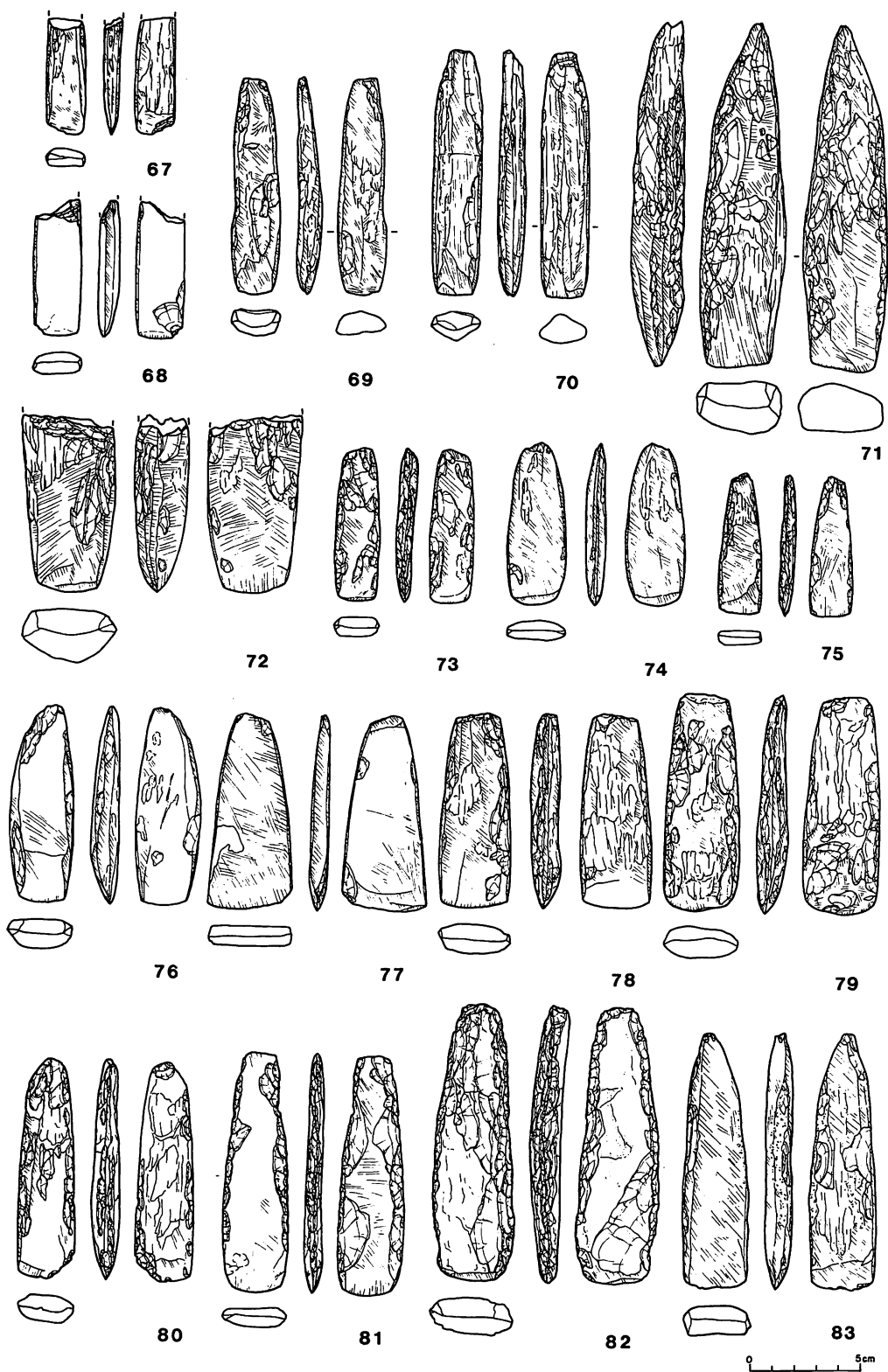
図IV-4 石 器 (2)



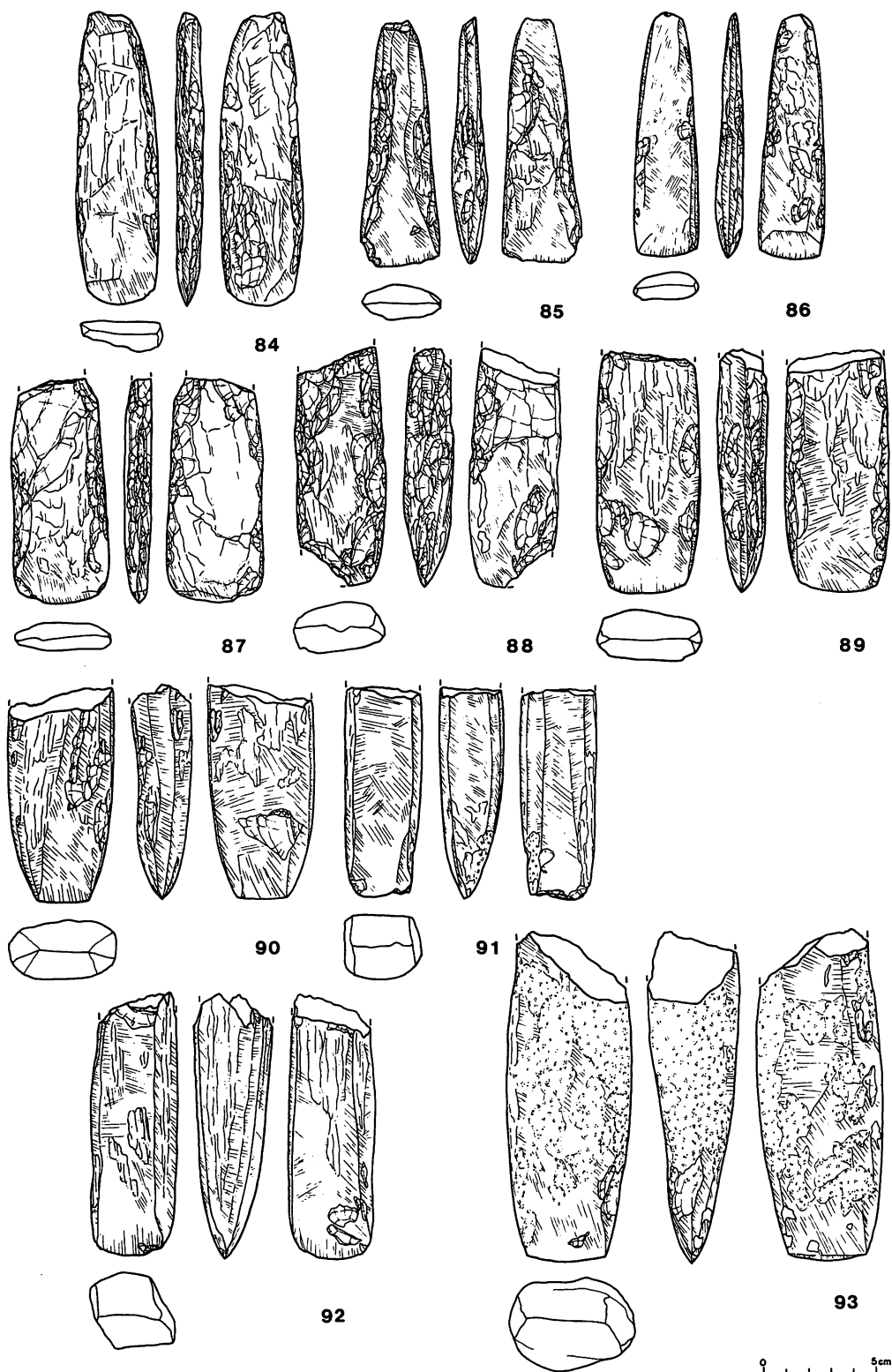
図IV-5 石 器 (3)



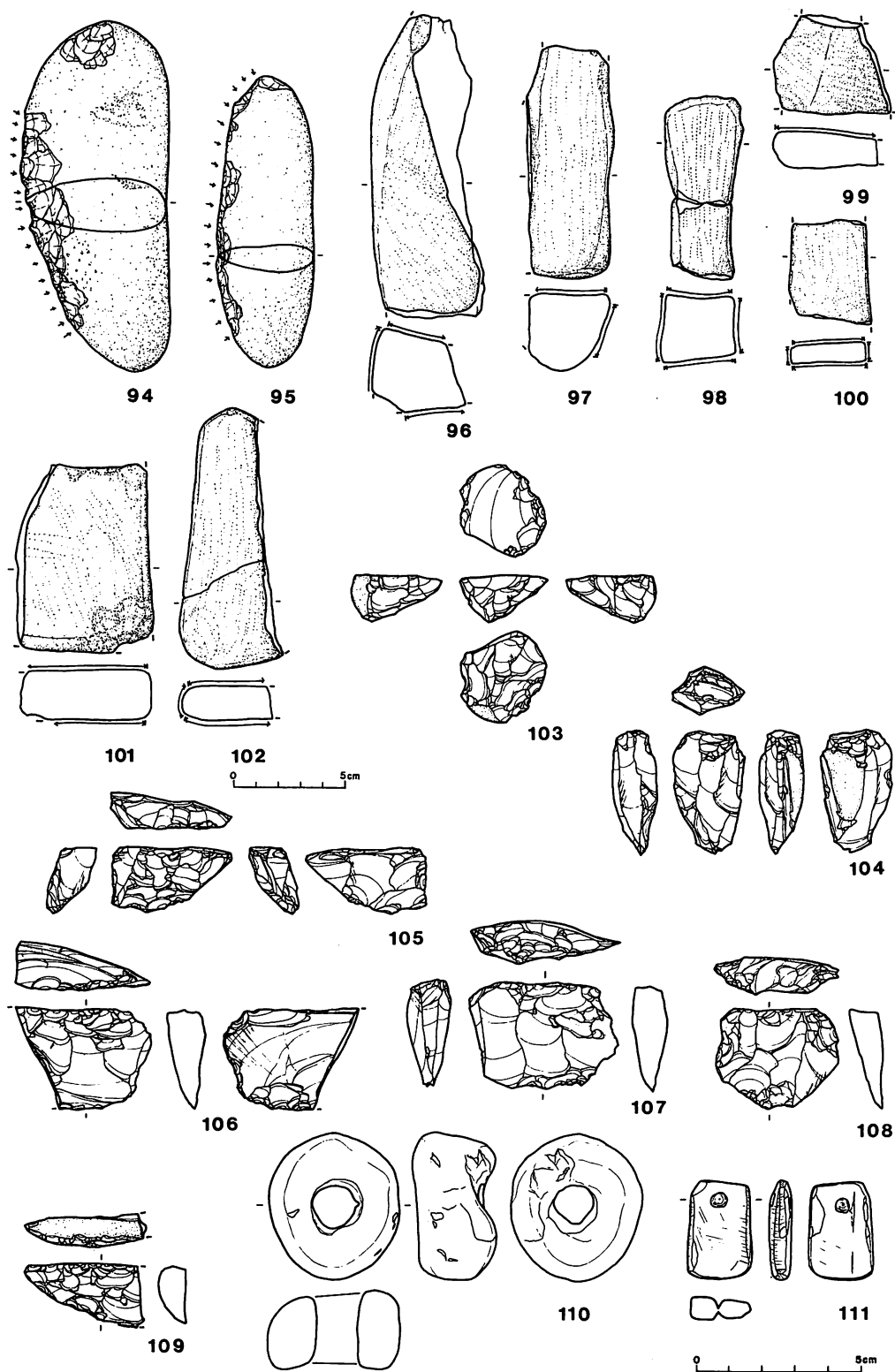
図IV-6 石 器 (4)



図IV-7 石 器 (5)



図IV-8 石 器 (6)



図IV-9 石 器 (7)

Ⅳ 包含層出土の遺物

掲載土器一覧

番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考	番号	分類	発掘区	備考
1	北筒式	H-69-a		8	北筒式	I-77-c		15	余市式	G-68-c	15・16同一個体
2	〃	H-69-a		9	〃	H-69-a		16	〃	G-68	
3	〃	I-79-a		10	余市式	H-69-a		17	不明	I-72-b	
4	〃	I-73-a		11	〃	G-68-c		18	〃	I-72-d	
5	〃	H-69-a		12	〃	K-80-a		19	〃	H-69-a	19・20同一個体
6	〃	G-68-c		13	〃	L-73-a		20	〃	J-78-d	
7	〃	G-74-d		14	〃	I-72-d					

掲載石器一覧

図No	名称	発掘区	寸法 (cm)	重量(g)	材質	図No	名称	発掘区	寸法 (cm)	重量(g)	材質
1	石 鏃	G-76-c	3.1 × 1.0 × 0.2	0.9	Obs.	42	スクレイパー	J-80-d	3.5 × 2.2 × 1.0	7.1	Obs.
2	〃	I-82-a	(2.1) × 1.6 × 0.3	(0.7)	〃	43	〃	I-80-c	(4.7) × 2.1 × 1.2	(9.4)	〃
3	〃	H-73-b	2.5 × 1.3 × 0.2	0.8	〃	44	〃	J-78-d	(3.8) × 2.3 × 1.0	(6.0)	〃
4	〃	K-74-a	2.2 × 1.4 × 0.2	(0.5)	〃	45	〃	H-69-a	4.6 × 2.5 × 0.9	7.3	〃
5	〃	L-64	3.5 × 1.4 × 0.3	1.3	〃	46	〃	H-69-a	(3.6) × 2.9 × 1.2	(8.6)	〃
6	〃	I-74-c	3.4 × 1.5 × 0.3	1.4	〃	47	〃	G-67-c	5.0 × 2.6 × 1.0	9.6	〃
7	〃	H-73-a	2.3 × 1.0 × 0.2	0.5	〃	48	〃	L-82-d	(4.2) × 1.9 × 0.9	(5.9)	〃
8	〃	J-72-a	1.9 × (1.3) × 0.3	(0.6)	〃	49	〃	G-67-c	4.5 × 2.4 × 1.1	8.8	〃
9	〃	K-80-d	3.1 × 1.4 × 0.3	1.5	〃	50	〃	H-76-c	7.6 × 2.9 × 1.3	18.2	Sh.
10	〃	I-81-b	2.0 × 0.9 × 0.3	0.8	〃	51	〃	H-79-b	5.7 × 2.1 × 0.8	8.6	Obs.
11	〃	I-77-a	2.9 × 1.1 × 0.2	0.9	〃	52	〃	J-73	5.8 × 1.5 × 0.9	7.8	〃
12	〃	I-67-d	3.2 × 1.0 × 0.3	1.2	〃	53	〃	K-83-b	4.8 × 3.0 × 2.0	17.6	〃
13	〃	I-81-c	4.0 × 1.1 × 0.6	2.4	〃	54	〃	I-78-b	(4.5) × 3.1 × 1.3	(9.8)	〃
14	石槍又はナイフ	J-81-c	3.4 × 1.6 × 0.3	2.1	〃	55	〃	K-81-d	4.1 × 2.6 × 0.8	5.6	〃
15	〃	L-83-a	4.2 × 1.5 × 0.9	4.1	〃	56	〃	J-79-d	7.6 × 4.4 × 1.4	20.4	〃
16	〃	G-70-b	4.3 × 2.2 × 0.8	4.6	〃	57	〃	H-69-a	6.6 × 3.6 × 1.2	17.7	〃
17	〃	I-69-c	5.2 × 2.1 × 1.1	8.9	〃	58	〃	L-86-b	(5.0) × 3.9 × 1.6	(27.8)	〃
18	〃	K-78-a	6.2 × 2.3 × 0.8	9.6	Gr Mud.	59	〃	L-86-b	(3.3) × 2.2 × 1.2	(6.5)	〃
19	〃	L-72-a	5.2 × 2.6 × 1.1	9.8	Obs.	60	〃	K-83-b	(3.4) × 3.0 × 0.8	(5.6)	〃
20	〃	H-67-c	4.8 × 1.9 × 0.7	5.3	〃	61	〃	G-68-c	(3.4) × 2.9 × 1.0	(4.9)	〃
21	〃	H-77-c	5.9 × 2.0 × 1.1	8.4	〃	62	〃	J-81	3.9 × 2.6 × 1.2	6.0	〃
22	〃	H-68-b	8.0 × 2.2 × 1.2	15.7	〃	63	〃	K-83-b	5.0 × 2.9 × 1.0	11.6	Che.
23	〃	I-79-c	7.1 × 2.4 × 0.9	12.2	〃	64	〃	K-81-b	3.7 × 3.5 × 1.3	11.7	Obs.
24	〃	K-83-a	5.1 × 1.7 × 0.8	5.1	〃	65	〃	K-78-a	4.2 × 2.8 × 1.1	6.7	〃
25	〃	H-67-c	(4.7) × 2.5 × 1.1	(11.6)	〃	66	〃	G-69-c	4.7 × 3.3 × 1.2	11.4	〃
26	〃	H-69-d	6.1 × 2.6 × 0.6	6.8	〃	67	石 の み	I-82-a	(5.3) × 1.8 × 0.8	(15.3)	Sch.
27	〃	G-69-c	8.3 × 2.7 × 0.9	16.4	〃	68	〃	K-82-a	(6.2) × 2.2 × 1.5	(24.4)	Gr Sch.
28	〃	H-76-b	7.7 × 2.5 × 0.8	12.4	〃	69	〃	I-72-d	9.9 × 2.2 × 1.2	39.6	Ser.
29	〃	I-80-d	(7.5) × 2.4 × 0.9	(12.8)	〃	70	〃	H-69-a	11.2 × 2.2 × 1.3	50.8	〃
30	〃	K-81-a	(6.3) × 1.8 × 0.6	(7.3)	〃	71	〃	J-78-d	15.7 × 3.9 × 2.5	212.4	Gr Sch.
31	〃	G-69-c	(6.7) × 2.0 × 0.8	(8.8)	〃	72	〃	H-69-a	(8.1) × 4.3 × 2.5	(147.7)	〃
32	〃	L-83-d	5.0 × 1.7 × 1.2	8.3	〃	73	石 斧	M-72-b	6.9 × 2.0 × 0.9	20.3	〃
33	〃	L-82-d	4.7 × 2.1 × 1.0	6.8	〃	74	〃	I-81-b	7.3 × 2.7 × 0.9	29.0	〃
34	〃	H-69-d	6.5 × 2.3 × 1.2	14.0	〃	75	〃	H-77-c	6.4 × 2.0 × 0.6	16.8	〃
35	つまみ付ナイフ	H-75-d	4.5 × 2.3 × 0.8	6.3	Che.	76	〃	H-68-b	9.0 × 3.0 × 1.3	54.6	〃
36	〃	I-80-d	4.8 × 2.0 × 0.8	4.5	Obs.	77	〃	I-72-d	8.9 × 3.8 × 0.9	41.7	〃
37	〃	H-69-a	(6.2) × 1.9 × 1.1	(7.1)	〃	78	〃	J-78-d	8.9 × 3.3 × 1.3	62.2	Ser.
38	〃	L-82-a	4.9 × 2.1 × 1.1	6.6	〃	79	〃	I-77-c	9.9 × 3.4 × 1.5	78.6	Gr Sch.
39	〃	K-81	5.0 × 2.6 × 0.8	6.5	〃	80	〃	H-80-b	10.1 × 2.4 × 1.3	48.4	〃
40	〃	G-68-b	5.3 × 2.3 × 1.1	7.9	〃	81	〃	I-67-d	11.0 × 3.0 × 0.9	44.2	Sch.
41	スクレイパー	I-79-a	3.8 × 2.5 × 0.9	7.4	〃	82	〃	K-80-d	12.6 × 3.8 × 1.7	99.0	Gr Sch.

Ⅳ 包含層出土の遺物

図No	名 称	発掘区	寸 法 (cm)	重量(g)	材 質	図No	名 称	発掘区	寸 法 (cm)	重量(g)	材 質
83	石 斧	H-68-a	11.8 × 3.1 × 1.3	80.6	Gr Sch.	98	砥 石	I-72-b	8.3 × 3.6 × 3.1	95.5	Sa.
84	〃	K-78-b	13.2 × 3.7 × 1.3	109.9	〃	99	〃	L-82-d	(4.5) × 5.4 × 1.6	(48.6)	〃
85	〃	H-68-d	11.0 × 3.6 × 1.6	74.4	〃	100	〃	H-69-b	(4.7) × 3.8 × 1.0	(29.6)	〃
86	〃	J-68-c	11.0 × 2.9 × 1.2	58.9	〃	101	〃	J-80-b	(8.5) × (6.2) × 2.3	(224.8)	〃
87	〃	H-69-b	(10.1) × 4.4 × 1.3	(89.8)	〃	102	〃	J-74-a	11.7 × (4.8) × 1.6	(110.0)	〃
88	〃	I-67-d	(10.8) × 4.2 × 2.3	(150.4)	Sch.	103	コ ア	K-79-d	2.6 × 2.7 × 1.4	8.3	Obs.
89	〃	H-67-a	(10.9) × 4.6 × 2.3	(205.3)	〃	104	〃	H-68-a	3.6 × 2.1 × 1.3	9.4	〃
90	〃	G-68-b	(9.7) × 4.8 × 2.7	(203.6)	〃	105	〃	M-84-c	1.9 × 3.4 × 1.5	8.8	〃
91	〃	H-68-d	(9.5) × 3.4 × 2.9	(203.4)	Gr Sch.	106	〃	H-68-d	3.1 × (4.0) × 1.4	(13.9)	〃
92	〃	H-68-a	(11.9) × 3.9 × 3.5	(251.8)	〃	107	〃	H-68-c	3.2 × 4.5 × 1.3	16.7	〃
93	〃	H-67	(14.9) × 5.7 × 5.2	(484.3)	Ser.	108	〃	H-78-b	3.0 × 3.7 × 1.1	11.9	〃
94	た た き 石	M-82-b	6.7 × 15.9 × 2.5	345.7	And.	109	〃	H-69-b	1.9 × (3.6) × 1.0	(7.6)	〃
95	〃	I-80-c	4.4 × 13.1 × 0.8	108.5	Sch.	110	石 製 品	K-83-b	4.5 × 4.0 × 2.8	49.3	Mud.
96	砥 石	I-69-b	(13.7) × (5.1) × 3.8	(298.4)	Sa.	111	〃	I-78-b	3.0 × 1.9 × 0.7	8.6	〃
97	〃	K-84-a	(10.1) × 3.9 × 4.2	(218.2)	〃						

V ま と め

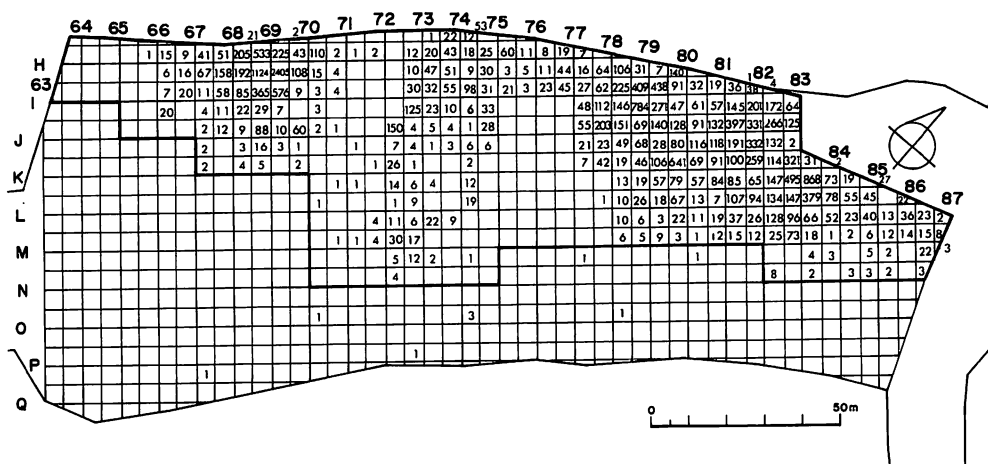
1 調査のまとめ

今回の調査によって本遺跡からは、竪穴住居跡 3 軒・土壇 5 基・焼土跡 1 箇所、そして 2 万点あまりの遺物が発掘された。出土した土器や石器から判断すると、縄文時代中期末～後期初頭の集落跡であったことが推定される。

遺跡が立地する音江川右岸の一帯は開拓期以来、畑地・牧草地・養鶏場などとして利用されており、調査区域は全域にわたって耕され、ある部分は耕地の均平化のため削られていた。とくに耕うん機による耕作は、黒色腐植土が未発達なこととも相まってほとんどの区域で地山であるⅣ層まで達している。このため遺跡の保存状態は良好とはいえ、遺物の大半も耕作表土に包含されており、厳密な意味での原位置を失っている。耕作の影響は遺構にも及んでおり、掘り込み面や、遺構周囲に堆積していたと考えられる排土などはすべて削平され、調査においてこれらを捕えることはできなかった。また本遺跡の主体を占める縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡は、今までの調査例をみると掘り方が浅い傾向があることから、本遺跡には耕作によってまったく隠滅してしまった住居跡もあらうかと思われる。

出土遺物のなかには、縄文時代早期～前期のものと考えられる遺物もわずかにあるが、主体は北筒式・余市式といわれる土器とそれに伴う石器群である。ただし両者の遺物は混交しており、明確に分離することはできなかった。分布は遺構とはほぼ対応しており発掘区北東側の平坦な区域と南西側の傾斜地の裾に集中し、発掘区域外へ続いていることが予想される(図Ⅴ-1)。

出土遺物のうち大半を占めるのはフレイク、チップで、なかでも緑色片岩のものが多数を占めるのが本遺跡の特徴である。石斧未製品が多数出土していることからみると、神居古潭の変成岩地帯を控えたこの一帯で石斧製作が盛んにおこなわれたのであろう。



図Ⅴ-1 包含層の遺物出土分布

広範囲でしかも希薄な遺物包含層、未発達な黒色土、開拓以来の耕作等による攪乱といった諸条件は深川市向陽2遺跡¹⁾や砂川市空知太2遺跡²⁾などでも観察されており、空知地方の縄文時代中期末から後期初めの遺跡に共通するありかたとおもわれる。遺跡の実相はこのような条件のため捕え難い面がある。しかしこの縦貫自動車道に係る一連の調査で、大河川に面した丘陵地帯に展開する広大な縄文遺跡群の姿が少しずつ明らかにされつつあるといえよう。また、空知地方に分布が偏ることが知られ、特徴のある形態から先学が系統論などをしばしば話題とした「丸のみ形石斧」が4点包含層より出土したが、前述のように包含層が攪乱されていたため明確に共伴遺物を判断することが出来なかった。今後、この地域の遺跡を調査する際に追求すべき課題と考える。(森 秀之)

注 1) (1986)『深川市向陽2遺跡』(北海道埋蔵文化財センター

2) (1986)『砂川市空知太2遺跡』(北海道埋蔵文化財センター

2 丸のみ形石斧について

本遺跡の遺物包含層中から、刃面にえぐりのある丸のみ形石斧が出土した。深川市内においては、過去に何点かの丸のみ形石斧が採集されており、すでに学会にも発表されている。¹²⁾

ここでは、同じく市内で採集され未発表であった資料3点について紹介し、あわせて丸のみ形石斧にまつわる問題について考えてみたい。³⁾

1は昭和35年に当時の音江村教育長池田輝海氏によって採集されたもので、「音江村字音江六七二番地 渡辺春治氏耕作地内拾得」との注記がある。全長16.9 cm、最大幅2.4 cm、厚さ1.8 cmである。蛇紋岩を用いており、基端部と左側面⁴⁾に原石面を残すほかは、全体に研磨されている。研磨痕はやや粗く、なめらかではない。2は音江町字内園採集とされているが地点の特定できない資料である。全長18.4 cm、最大幅2.8 cm、厚さ2 cm。材質は1と同じく蛇紋岩を用いている。研磨は全体に及んでいるが、とくに刃部は入念である。3は採集地点不明のもので、長さ13.7 cm、最大幅3.4 cm、厚さ1.7 cm、緑色片岩製である。この丸のみ形石斧は製法が特異で自然石の形状を巧みに利用し、周辺に敲打を加えた後、刃部のみに研磨を施している。後主面の刃面にはステップ・フレイキング様の剝離が認められるが、使用痕ではなく製作段階のものであろう。

参考のため、4～9まで既発表の丸のみ形石斧を示した。4～9は音江町向陽地区で採集されたもので、駒井和愛博士が報告したものである。⁵⁾7～9は池田輝海氏によって採集され、加藤晋平氏が紹介したものである。⁶⁾採集地点は7が音江475番地、8は向陽383番地、9は内園432番地と記録されている。

北海道における丸のみ形石斧の分布は道北から道央部とされており、現在知られている南限は苫小牧近辺にあるようだ。⁷⁸⁾とくに石狩地方北部から空知地方に集中するといわれている。⁹⁾この地域から発見された丸のみ形石斧には、いくつかの共通する特徴がみとめられる。すなわち、蛇紋岩、片岩などの柱状の原石を用いることが多く、長さに比べて幅が狭い、いわゆる「の

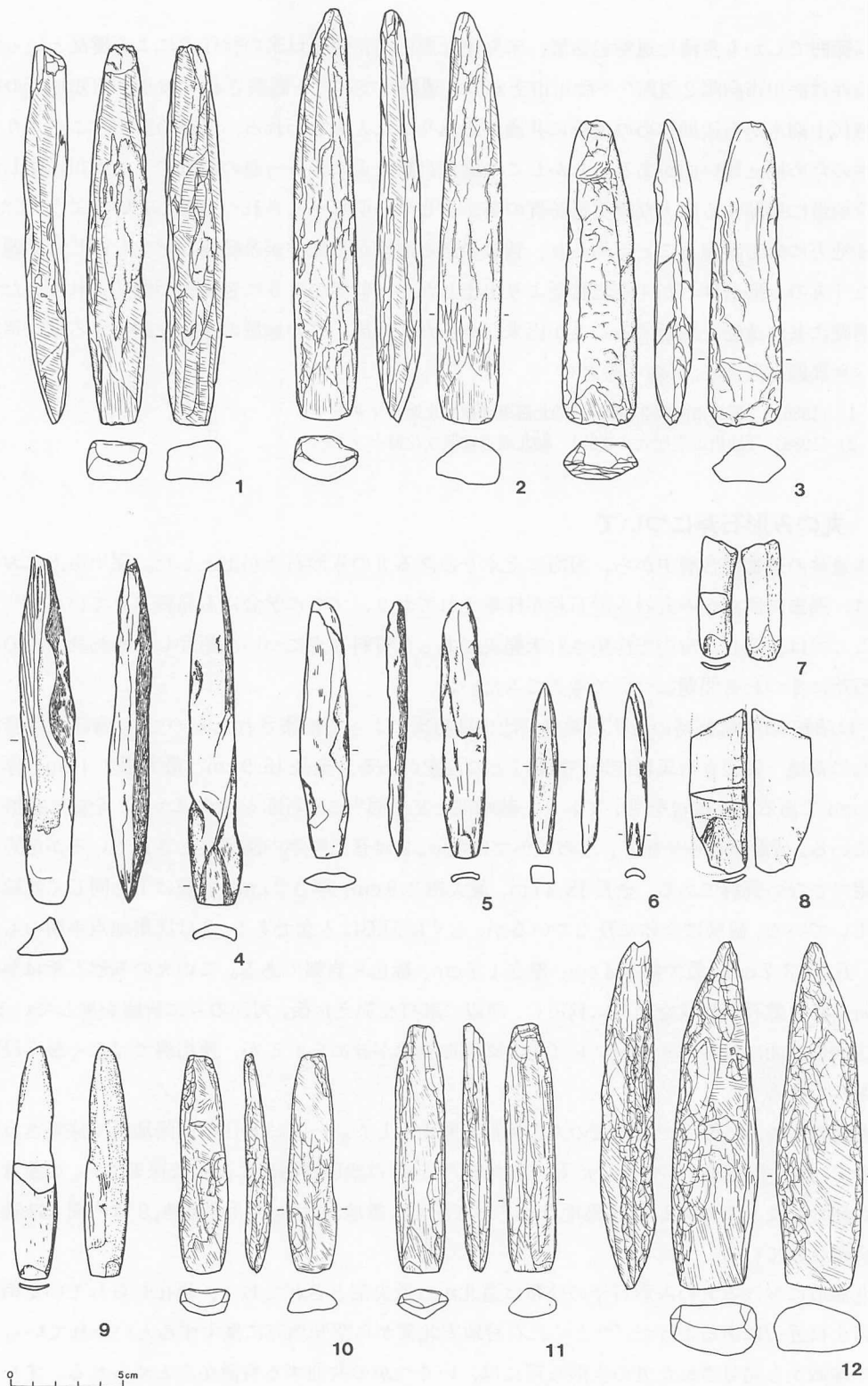


図 V-2 深川市内発見の丸のみ形石斧

み形」である。断面形は半円形ないし三角形、あるいは方形になるようにつくられており、平坦な側を前主面とする。研磨は全体におよんでいるが、凹部に原石を残した例が多い。刃面のえぐりは、前主面から見て長軸からわずかに左傾している。

これらの特徴は前述の1～3、今回音江2遺跡から出土した10～12にも見てとることができる。このような丸のみ形石斧を仮に“空知形”とすれば、報告例ははるかに少ないものの、北見市とその周辺には“北見型”ともいうべきやや異った形態の丸のみ形石斧が存在するようである。¹⁰⁾ これは“空知型”より幅広で、断面はレンズ状になっている。掲載実測図で見ると、研磨は入念で全体に滑らかである。刃面のえぐりは大きく、長軸に正中している。

丸のみ形石斧の編年の位置づけについて加藤晋平氏は、これが北筒式・余市式などといわれる土器片とともに採集されている事実注目して、北筒式土器に円形突瘤文や石刃技法などの「シベリア的な様相」があること、北筒式土器のうち「古期のもの」の分布が丸のみ形石斧のそれとオーバーラップすることなどから「北海道出土の丸のみ形石斧は、北筒式土器群のうちで、古い時期の一群の土器に伴存」するのではないかとの仮説を立てている。¹¹⁾

近年の発掘調査によって丸のみ形石斧の出土例はわずかながらも増えつつある。しかし、共伴遺物や遺構に恵まれない場合が多く、時期決定に関してはいぜん推測の域を脱し切れないのが現状のようだ。本遺跡の丸のみ形石斧も、北筒式・余市式の土器片と共に出土したが、耕作による攪乱のため、いずれにも積極的に共伴関係をみとめることはできない。ただ先述した丸のみ形石斧“空知型”の南限である苫小牧市タブコブ遺跡においては、北筒式を混じえない状態で余市式と共に丸のみ形石斧が発見されており、¹²⁾ 同じく厚真7遺跡の短報では、住居跡内から土器を伴った出土例が報告されるなど、¹³⁾ 新しい展開がみられるようである。

丸のみ形石斧については、学史上、文化系統論の証左として強調されていた時期があった。その編年的な帰趨が北筒式・余市式土器のいずれに——あるいはその両方に——決するにしろ、多様な環境への適応の一例として、石器組成全体のなかからとらえ直す視点が必要であろう。

(森 秀之)

注 1) 駒井和愛(1959)『音江——北海道環状列石の研究——』

2) 加藤晋平(1963)「丸のみ形石斧について」『考古学雑誌』48—4

3) これらの遺物は深川市中央公民館郷土資料室に展示されている。

4) 石斧各部の名称については、佐原 真(1977)「石斧論——横斧から縦斧へ——」『慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集』によった。

5) 前掲1)

6) 前掲2)

7) 宮夫靖夫(1984)『タブコブ——北海道苫小牧市植苗地区国道36号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』苫小牧市教育委員会 苫小牧市埋蔵文化財センター

宮夫靖夫ほか(1986)『苫小牧東部工業地帯の遺跡群 I——苫小牧市静川1遺跡・厚真町厚真1・2・8・10遺跡発掘調査報告書——』苫小牧市教育委員会 苫小牧市埋蔵文化財調査センター

8) 登別市千歳6遺跡でも「丸ノミ状刃部形態をもつもの」として報告された例がある。

大島直行ほか(1982)『札内台地の縄文時代集落址——北海道登別市千歳6遺跡発掘調査報告書——』登別市教育委員会

- 9) 前掲 2)
- 10) 前掲 2) および、加藤晋平ほか (1979) 『北見市史歴史編 (原始・古代)』
- 11) 前掲 2)
- 12) 前掲 7)
- 13) 苫小牧市埋蔵文化財調査センター (1987) 『とまこまい埋文だより』 No. 9

3 耕作土から出土した銃弾について

耕作土からは、先史時代の遺物のほかに農機具の部品とおもわれる金属製品・硬貨・陶器片などの様々な遺物が出土した。これらはすべて近・現代の遺物である。この遺物群のなかから、とくに銃弾をとりあげ、紹介してみたい。

銃弾は今年度の調査区から 14 点、昨年度実施した立会調査区から表面採集により 1 点の計 15 点が得られた。形態はいずれも先がまるい円筒形で、底面はくぼんでいる (図 V-3)。長さは完形のもので 3.0~3.2 cm、直径 1.1~1.2 cm (0.43~0.47 インチ)¹⁾ 重量は 29.3~30.2 g。材質は鉛である。周囲には先端を上にしてわずかに右傾する縦位の条痕が 7 条みとめられる。これは、銃弾に回転を与え弾道を安定させるための「ライフル条痕」²⁾ (以下「条痕」と呼ぶ。) である。すなわち、この銃弾を発射した銃は、右転 7 条の腔綫をもつ³⁾ ライフル銃である。

このように 15 発の銃弾は、形態・寸法・条痕の数や傾き、材質などが同一であり、弾頭部があたかも硬い物体に衝突した様につぶれているものがあること (図 V-3-7)、出土分布がある程度限定されること (図 V-4)、発砲のさい、その場に廃棄される薬莖が発見されないことなどから、同一ないしは同一型式のライフル銃によって離れた地点から一定の方向に発射され、

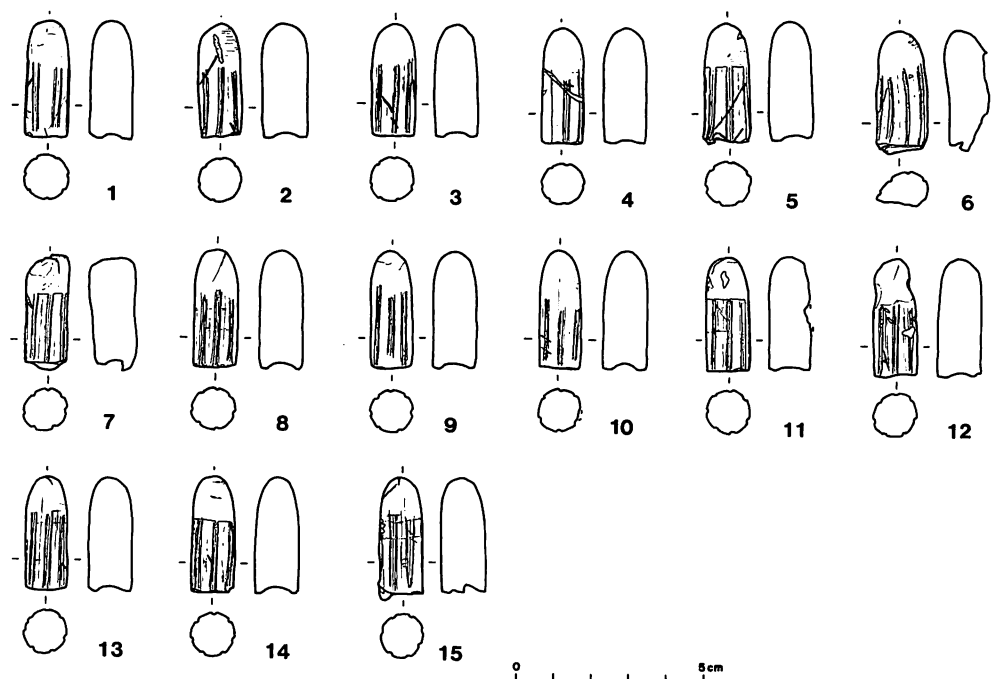


図 V-3 耕作土から出土した銃弾

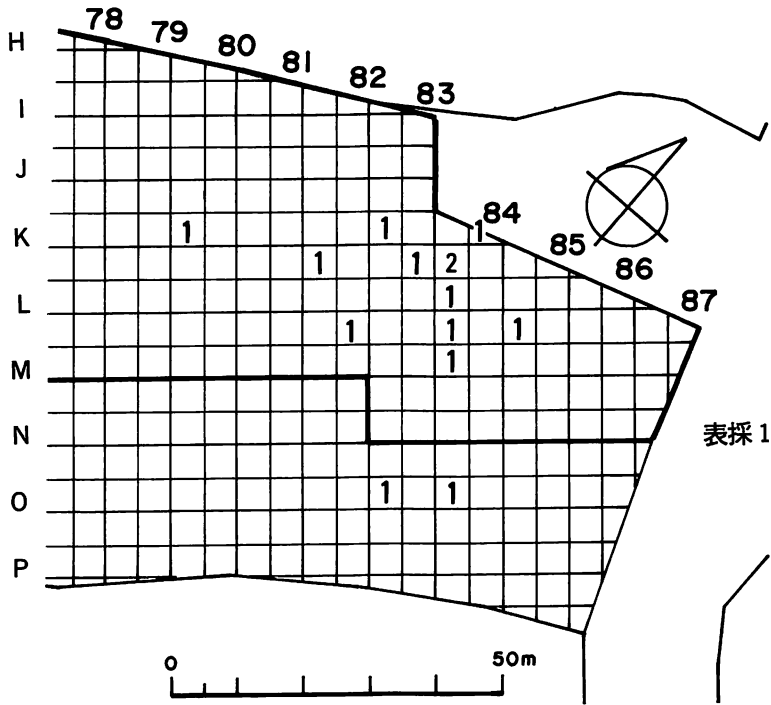


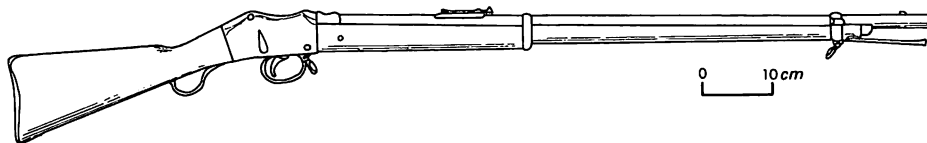
図 V-4 銃弾の出土分布

着弾したものであると判断される。また銃弾の直径が比較的大きく、かつ鉛のみでつくられていることから、有煙火薬を用いる旧式の銃によるものと考えられる。⁴⁾

さて、これらの銃弾はどのような経緯でここに残されたものであろうか。同一種類の銃弾は直線距離にして約1km離れた国見2遺跡からも15点あまり発見されており、⁵⁾ 遺跡周辺の土中に多数包含されていることが予想される。ライフル銃はふつう熊や鹿など、大型獣の狩猟に用いられるが、同一種類の弾薬を一定地域で多数消費する状況は考えにくく、またこの音江地区周辺で大型獣を多数射獲したという記録や伝承も知らない。やはり射撃訓練などによるものとするのが妥当であろう。

深川市は、屯田兵の入植を組織的開拓の嚆矢としている。『深川市史』⁶⁾によれば、明治28年には深川市一已(当時深川村)に屯田歩兵第1大隊本部が設置され、同大隊が解散される明治35年まで開墾と軍事教練に従事したという。明治32年には国見峠を中心に「陸軍機動演習」がおこなわれたとの記録があり、⁷⁾ 音江2遺跡や国見2遺跡から出土した銃弾もこのような軍事訓練のおりに残されたものと考えられる。

屯田兵が使用した銃器について、久保勝範氏は北見市内で出土した古銃を紹介したなかで、アメリカ製の「ピーボディー・マルチニー銃」(以下「ピーボディー」と称する。)であると述べている。⁸⁾ それによれば、「ピーボディー」は明治23年以降編成された部隊に支給され、既存の部隊も「エンフィールド銃」・「レミントン銃」から逐次改変され「ピーボディー」に統一し



図V-5 ピーボディー・マルチニー銃（『武器』マール社より加筆転載）

たという。深川市に駐屯していた歩兵第1大隊も明治28年の編成であるから、この「ピーボディー」が装備されていたに違いなく、音江2遺跡や国見2遺跡の銃弾はこの銃から発射されたものであろう。⁹⁾

ところで、屯田兵各隊に対するこの「ピーボディー」の支給については釈然としない点がある。前述のように「ピーボディー」の支給が開始されたのは明治23年であるが、その以前の明治13年にはすでに国産の「13年式村田銃」が制式となり、さらに18年には「18年式改良村田銃」が、22年には連発式の「22年式村田銃」が開発され陸軍の装備となっている。これに対し「ピーボディー」は一時海軍が採用したものの、発射の際反動が強烈で不評を買ったという銃で、¹⁰⁾ あたかも余剰兵器となった輸入銃の始末を屯田兵が引き受けたかの感がある。新装備の「22年式」は無理としても「13年式」や「18年式」すら支給されなかったのはなぜだろうか。「ピーボディー」の支給が開始された明治23年は屯田兵条例が改正された年で、この改正により従来のような士族資格は廃止され、屯田兵は「平民」から公募されることになった。¹¹⁾¹²⁾ 「ピーボディー」支給の背景には、「農業兼務の軍隊制度」¹³⁾ であった屯田兵制度が、平民屯田によって農業開拓中心の色彩を強め、相対的に軍事的役割が低下したことにその一因があるのではなかろうか。（森 秀之）

注 1) 銃砲の口径（銃身の内径）はインチ表示であらわされるのが慣例になっている。本遺跡出土の銃弾は「.44口径」ないし「.45口径」といわれるものに相当する。

2) 所 莊吉（1972）『図解古銃辞典』 雄山閣

3) 前掲2)

4) 床井雅美（1979）『世界の銃器』 ごま書房

5) （1986）『国見2遺跡』 一北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査概報― 釧北海道埋蔵文化財センター

掲載銃弾一覧

図No	名称	発掘区	寸法 (cm)	重量(g)	材質	図No	名称	発掘区	寸法 (cm)	重量(g)	材質
1	銃弾	K-83-a	3.0×1.2×1.2	30.0	鉛	9	銃弾	J-82-b	3.1×1.1×1.1	28.9	鉛
2	〃	K-83-a	3.0×1.2×1.2	30.2	〃	10	〃	L-84-a	3.1×1.1×1.1	29.8	〃
3	〃	N-83-b	2.9×1.2×1.2	29.8	〃	11	〃	K-81-a	3.0×1.1×1.1	29.3	〃
4	〃	L-83-b	3.0×1.1×1.1	29.4	〃	12	〃	表 採	3.1×1.1×1.1	29.3	〃
5	〃	J-79-b	3.1×1.2×1.2	29.2	〃	13	〃	L-83-a	3.0×1.1×1.2	29.8	〃
6	〃	K-83-b	3.2×1.4×0.9	30.1	〃	14	〃	K-82-d	3.1×1.2×1.2	29.5	〃
7	〃	J-83-c	3.0×1.1×1.1	29.7	〃	15	〃	L-81-d	3.2×1.1×1.1	29.6	〃
8	〃	M-82-b	3.1×1.1×1.1	29.5	〃						

- 6) (1977) 『深川市史』 深川市役所
- 7) (1985) 『農郷』 音江農業協同組合
- 8) 久保勝範 (1972) 「屯田銃ビーボディー・マルチニーについて」 『北海道の文化』 24 北海道文化財保護協会
- 9) 7 条の条痕をもつ同種の銃弾は深川市のほか旭川市、永山町など屯田兵の入植地に点々と残されており、「ビーボディーの弾」と伝えられている。北見市中ノ島遺跡（宮 宏明ほか (1986) 『中ノ島遺跡 II』 北見市教育委員会）でも多数出土しているが、報告者の宮氏は銃弾の直径や条痕の数から「ビーボディー」ではなく「ヘンリー・コンブレイン銃」のものとしている。本稿では文献資料や伝承から一応、「ビーボディー」としておきたい。なお前掲 8) によれば、「ビーボディー」には口径 .41(10.4 ミリ)～.50(12.5 ミリ) の数種類のモデルが存在したようである。
- 10) 前掲 2)
- 11) 秋山岩太郎 (1913) 『雨龍屯田兵村史』
- 12) 桑原真人 (1981) 「屯田兵制度」 『北海道大百科辞典』 北海道新聞社
- 13) 前掲 12)

4 石狩川中流域の北筒式土器・余市式土器に伴う石器について

1 はじめに

繰り返し述べたように、本遺跡で出土した土器の残存状態はわるく、その型式的な特徴を明らかにしうるものは少ない。小破片を含めて総数 800 点に満たないもののうち北筒式土器や余市式土器と認められるものは、図示したとおりである（図Ⅳ－2、34 ページ）。これらの型式的な特徴が明瞭なものをもとに、出土状態等を加味して考えると、その他の破片のほとんどもまた同様なものであろうと推測される。

土器が少なく、片岩や黒曜石の礫・剝片等が大多数という遺跡が、当埋蔵文化財センターによる北海道縦貫自動車道用地内の調査で近年あいついで明らかになった。これは深川市向陽 2 遺跡・砂川市空知太 2 遺跡・奈井江町宮村 2 遺跡・茶志内 4 遺跡のほか、本書と同時に報告書が刊行される深川市国見 2 遺跡もこれと同様である。石狩川中流域におけるこれらの遺跡の遺物残存状況については、黒色腐植土（クロボク）の起源をなす降下火山灰と遺物包含層の関連についての見解がある（1987 a 鬼柳 彰、96 ページ）。

これらの遺跡では土器の出土量が少ないこともあって、検出された石器について土器との共伴関係を明示できる資料に乏しい。そのなかで今回調査した音江 2 遺跡の住居跡 H－3 および空知太 2 遺跡の住居跡 H－1～H－4 から出土した遺物は、土器と石器との共伴が明らかな数少ない例である。

さらに音江 2 遺跡の住居跡 H－3 の周辺では、個々の出土状態からは土器との関係を明らかにし得ないが、包含層の残りの良さや周りの土器の出土状況から土器との関係を推定できるものがある。しかし、これらの石器の分布状態は、北筒式土器に伴うものと余市式土器に伴うものとに区別できない。後に述べる空知太 2 遺跡や砂川市西豊沼 A 遺跡からは、北筒式土器と余市式土器の特徴をあわせもつ土器が報告されており、北筒式土器と余市式土器は時間・空間においてきわめて接近しているのみならず、部分的には同時に存在していたことが推定しうる。

どのような北筒式土器と、どのような余市式土器とが同時に存在していたかについて今回の資料では明示しえないが、時間空間ともにきわめて接近した状態を肯定的にとらえるならば、この二つの土器に伴う石器を一群のものとしてとらえても、あながち無理な判断とは言えないであろう。

ここでは音江2遺跡の資料を空知太2遺跡の資料と対照し、石狩川中流域の北筒式土器や余市式土器に伴う石器検出の実態について述べる。そして、前述した当埋蔵文化財センターが調査した遺跡におけるきわめて特徴的な石器、黒曜石や片岩などの素材の採取と製作の場所などについてもふれておきたい。

2 石器検出の実態

音江2遺跡H-3の石器

今回の調査でえられた資料のうちで、土器と石器の共伴関係が明らかなものとして堅穴住居跡H-3で出土した北筒式土器と石器をあげることができる(23ページ)。この遺構内には他の時期のものと考えられる土器が見られないこと、土器も石器も住居の床面と想定されるところから出土したことから同時期の遺物とみなされ、共伴関係が明らかな遺物としてとらえられる。

図Ⅲ-6-7の土器に伴う定形的な石器は、つぎの4点である(図Ⅲ-6、28ページ)。

8の石器は、黒曜石製のつまみ付きナイフである。破損のため下半は明らかではないが、縦長剥片を素材にしているものであろう。つまり部の加工は両側辺からなされている。9の石器は淡黄白色の珪岩製スクレイパーである。縦長剥片のひとつの側辺に刃部形成の二次加工が顕著に残っている。10の石器は、淡褐色の溶結凝灰岩製の石皿破片である。破片ではあるが、全体的な整形加工を想定しうるものである。11の石器は黄褐色砂岩製の砥石である。全体的には角柱状をなし、4面に縦方向に長い研磨痕が認められる。大きくて重量のあるもので、据え付けて使用したことをうかがわせる。

音江2遺跡H-3周辺の石器

土層柱状図(図Ⅰ-3)にも明かなように、住居跡H-3周囲の遺物包含層の残り具合は他の場所に比べると良好である。ここは傾斜面の下側にあたり、縄文時代以降土層の流失が少なく、相対的には堆積するほうが多かったものとみられる。また耕地造成のときも切り取られることなく、逆に盛土の行なわれたところであった。したがって、縄文時代の遺構・遺物の検出が比較的良好な状態でなされたものと考えられる。

住居跡H-3の周辺からは、北筒式土器だけでなく余市式土器も出土している(図Ⅳ-2)。北筒式土器と余市式土器とは、出土の範囲がほぼ重なっており、それぞれの土器に伴う石器を選び出すことはできない。ここ(G・H-68・69区)から出土した定形的な石器には、つぎのものがある(図Ⅳ-3~9)。

石槍と分類したものには、明瞭な茎部の有無により22・26・27などと31・34などとの二種がある。つまみ付きナイフは37・40のように縦長剥片につまみ部の作り出しがなされているが、刃部形成のための二次加工は不明瞭なものである。石のみは70・72のような刃部の片面がえぐ

られて曲がった刃部を特徴とする丸のみ形石斧である。石斧は76・83のように比較的小さくて全面に研磨仕上げが見られるものと87・90・91・92のように比較的大きくて加工途中の打ち剥がし面を残すものがある。砥石は100がこの区域から出土している。破片ではあるが、全体形は角柱状であったことが推定できるもので、4面に研磨面が認められる。

空知太2遺跡の石器

砂川市空知太2遺跡で土器と石器との良好な共伴関係を指摘できるのは、北筒式土器だけが出土した竪穴住居跡H-4の資料である。このほか土器の残存状態は良くないが、住居跡H-1・H-2・H-3でも、土器と石器との共伴関係をもつ資料がある。これらの土器のなかには、北筒式土器とみなされるものだけでなく、余市式土器に含まれるものもある。

住居跡H-4：土器は、北筒式土器とみなされるものだけが床面から出土している。床面から出土している定形的な石器は図V-6-1の砂岩製砥石のみである。これは破片であるが、全体形は角柱状であったことが推定できるもので、4面に縦方向に長い研磨痕が認められる。

住居跡H-1：床面は上層と下層の二つに分かれている。出土遺物のうち下層から検出されたものはごく少数でしかも定形的な石器はなく、大多数は上層からのものである。この上層から出土した土器はすべて小破片であるが、北筒式土器や余市式土器の特徴が認められるものがある。定形的な石器はつぎのものが出土している（図V-6）。石斧は2・3のように比較的小さくて完形に近いものと、4・5・6のように比較的大きくて破損したものがある。小さいものは片岩製で、刃部は両面からの研磨による直線的なものである。石のみ7は破片であるが、幅2cmほどの本体と直線的な刃部が見てとれる。砥石は8・9・10の3点がある。検出された破片を接合してもなお、すべて破損品の状態であるが、いくらかの形態的な特徴を推定できる。8は板状のもので上下2面に研磨面が認められる。9は研磨面が小部分しか残っていないが、角柱状の素材であった可能性がある。10は角柱状のもので3面に縦方向に長い研磨面がある。

住居跡H-2：住居跡H-4と重複した遺構である。出土した土器はすべて小破片であり、図示に耐えないものが多いが、余市式土器とともにわずかではあるが北筒式土器も認められる。定形的な石器はつぎのものが出土している（図V-6）。石錐の11は、黒曜石の幅広い剝片の一部に両面から二次加工を施して錐刺突部を作っている。石斧は12・13・14の3点が出土しているが、ともに破片である。砥石の15は破損品であるが、角柱状の形態を推定できるもので、2面に研磨面が認められる。

住居跡H-3：焼土の高さから推定すると、遺物のうち覆土から出土したものは共伴遺物として扱いうるであろう。土器は図示に耐えない小破片が大部分であるが、北筒式土器や余市式土器の特徴を示すものが認められる。定形的な石器は図V-6-16の石鏃がある。黒曜石製で基部の作り出しは不明瞭である。

石器検出の実態

以上に説明した音江2遺跡の石器群と空知太2遺跡の石器群とはそれぞれに特色を示しながらも、ともに数量的に制約があり石器群の構成としては完全ではない。しかしこれらを合わせ

構成してみると、定形的な石器として、石鏃・石槍・石錐・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石斧・石のみ・砥石・石皿などがあることが明らかになる。

3 そのほかの特徴的な石器

2で述べたもののほかに、出土の状況から判断して北筒式土器や余市式土器に伴うと推定できる石器のうち特徴的な例には、次のようなものがある。

片岩製の石槍：空知太2遺跡から2点（図V-7-1・2）、向陽2遺跡から2点（図V-7-3・4）、音江2遺跡から1点（図IV-3-18）、国見2遺跡から1点出土している。この時期の石槍は黒曜石で作られるものが大多数であり、ごく稀に頁岩製や珪岩製のものが出土することがある。もともと片岩は石斧の素材として用いられるが、これらは片岩の剝片をていねいに加工整形して、黒曜石製の石槍と同じ様な形態に仕上げている。

石のみ：幅が2cmほどの直線的な刃部のものと、刃部が曲がっており丸のみ形石斧と呼ばれるものがある。この丸のみ形石斧は空知太2遺跡から2点（図V-7-5、6）、音江2遺跡から3点（図IV-7-69～71）、国見2遺跡から1点出土している。

砥石：角柱状で研磨面が3面よりも多いものがある。角柱の横断面でみると、上下の2面にとどまらず左右の2面にも研磨面がある四面砥石と呼ばれるものは空知太2遺跡（図V-7-7）、音江2遺跡（図IV-9-98）、国見2遺跡から出土している。

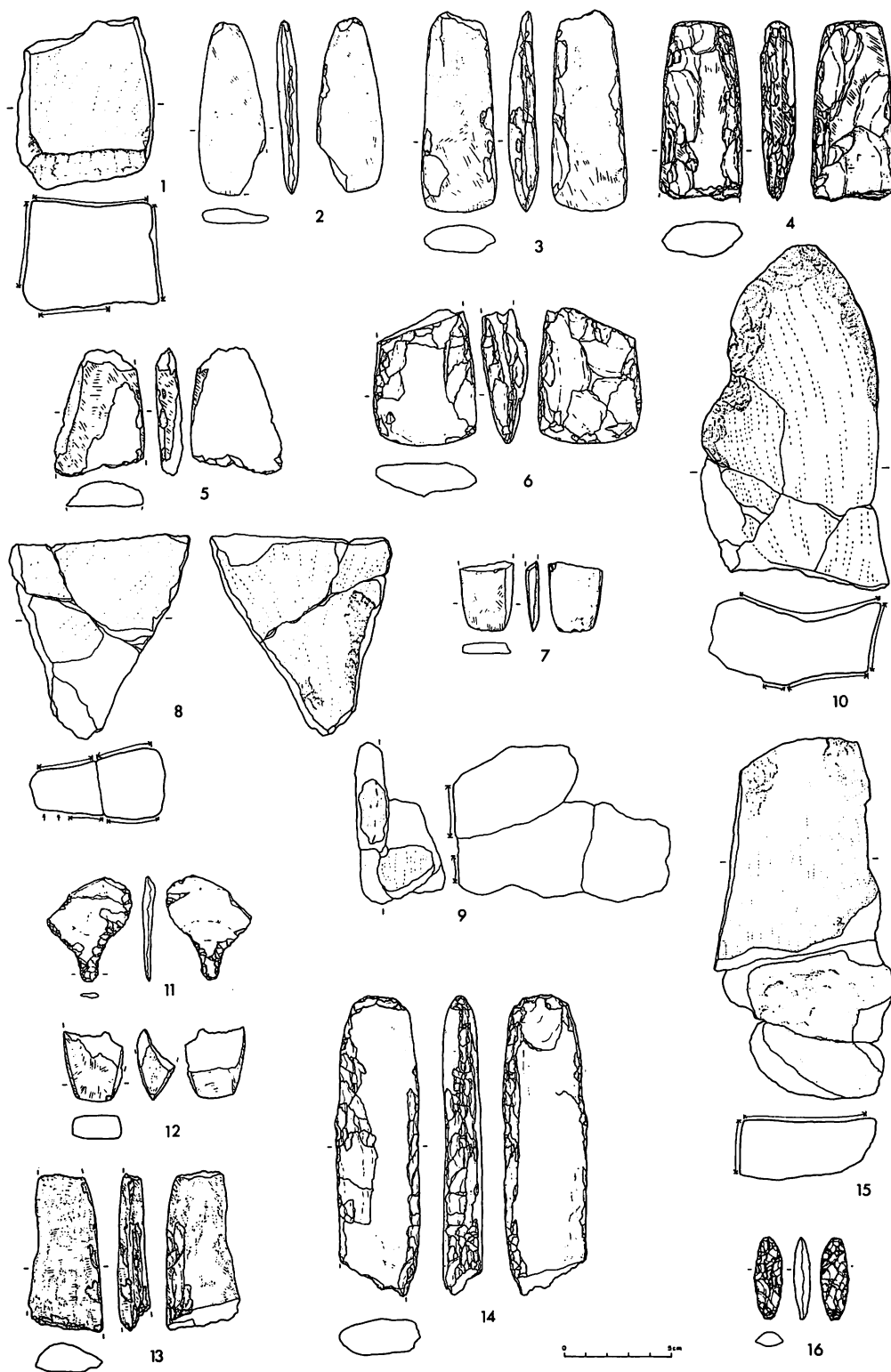
4 素材礫の採取と製作の場所について

図V-1によれば、遺物分布は3か所の住居跡の近くに濃く、遠ざかるにしたがって薄い。これらの遺物のうち圧倒的に多量なのは、黒曜石や片岩の礫・剝片等であることはすでに述べたとおりである。

石鏃・石槍・石錐・スクレイパー・つまみ付きナイフなどのほとんどは、黒曜石製である。これら黒曜石製石器は住居の近くで素材の礫を打ち剝がし、加工整形して作られたものと考えられる。空知太2遺跡でも黒曜石の礫や残核・剝片・碎片の出土状態は、住居跡の付近により多い傾向を示している。また、黒曜石の原材産地推定の成果がいくつか知られている。空知太2遺跡の堅穴住居跡から出土したものは、白滝・近文台・滝川・赤井川などで、包含層から出土したものは白滝・近文台・滝川・赤井川・十勝・置戸などである。向陽2遺跡の包含層出土の黒曜石は、白滝・近文台・十勝などが産出地である。

石斧・石のみの多くは片岩製である。音江2遺跡はもちろん空知太2遺跡・向陽2遺跡・国見2遺跡のいずれの遺跡においても片岩の礫や残片・剝片・碎片などが検出されており、これらの出土状態や出土量などから推定すると、石斧・石のみもまた住居の近くで作られたものであろう。定形的なものとしては明示していないが、川原の円礫を使ったたたき石は片石の剝離作業に、砂岩製の特徴的な四面砥石は仕上げの研磨作業に用いられたものと推定できる。

神居古潭変成岩地帯に由来する片岩の礫は、石狩川の川原にいまなお多くみられる。砥石に使われる砂岩も、その原産地と目されるところは明らかではないが、同様の石は石狩川の川原にある。石狩川との直線距離はそれぞれ音江2遺跡1.0 km、空知太2遺跡3.0 km、向陽2遺



図V-6 空知太2遺跡、遺構出土の石器

V まとめ

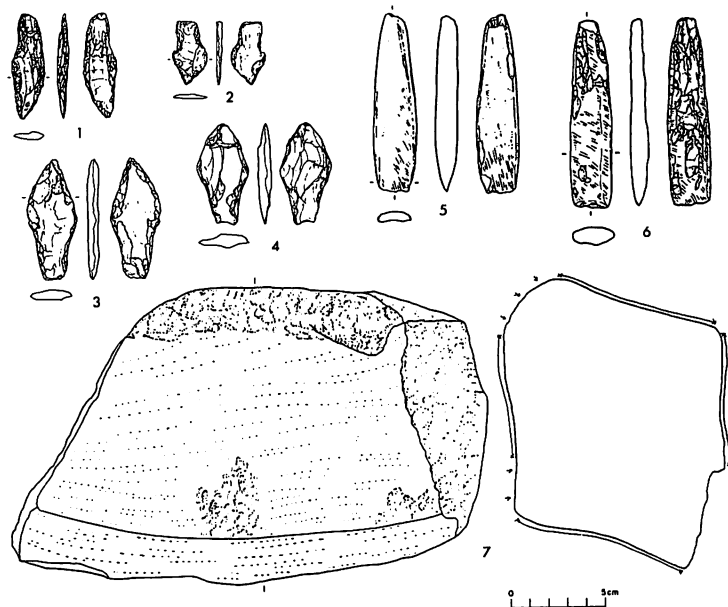
跡 1.8 km、国見 2 遺跡 1.0 km である。石斧・石のみは素材の片岩、加工用道具の円礫・砥石ともに石狩川の川原よりもたらされたものと推定できる。(西田 茂)

引用・参考文献

(1987a) 『砂川市空知太 2 遺跡』 (北海道埋蔵文化財センター)

(1987b) 『深川市向陽 2 遺跡』 (北海道埋蔵文化財センター)

(1988) 『深川市国見 2 遺跡』 (北海道埋蔵文化財センター)



図V-7 特徴的な石器

音江 2 遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地分析

藁科 哲男、東村 武信（京都大学原子炉実験所）

遺跡から出土した黒曜石製石器、石片は、風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水和層の影響は、軽い元素の分析ほど大きい。したがって、Ca/K、Ti/K の両軽元素比量を除いて産地分析を行なった。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやや不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

石器の分析結果から石材産地を同定するために原石群との比較をする。相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの T^2 検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する¹⁾²⁾。遺物の産地推定の結果は黒曜石原産地 53 箇所の 70 個の原石群³⁾と比較して、確率の高い原石産地のものだけを選んで表 1 に記した。

原石産地（確率）の欄にマハラノビスの距離 D^2 の値で記した遺物については、この D^2 の値が原石群の中で最も小さな D^2 値である。この値が小さいほど、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えてほぼ間違いないと判断されたものである。分析した 100 点の中で 8 点の遺物は原石産地を明らかにできなかった。また、試料番号 18509 の遺物は、名寄市の原産地の原石と判定されているが、本遺跡からさらに名寄産原石と判定される遺物が確認されるまで、この 1 点を名寄原産地の原石であると決定することを保留する。原石産地が判定された遺物のうち黒曜石製遺物の 85 点には本遺跡より西方約 85 km 離れた白滝原産地の原石、5 点には旭川市の近文台、雨粉台原産地の原石、1 点には滝川市の江部乙の礫層の黒曜石の組成と一致する結果が得られた。これら産地分析の結果からは、白滝原産地地域との交易が主体的であったことが推測される。

引用・参考文献

- 1) 東村武信（1976）産地推定における統計的手法 『考古学と自然科学』9：77—90
- 2) “ （1980）『考古学と物理化学』学生社
- 3) （1986）「嵐山 2 遺跡出土の黒曜石製遺物の石材産地分析」『鷹栖町嵐山 2 遺跡』127—138（財北海道埋蔵文化センター）

表 1 音江 2 遺跡出土の黒曜石石片の原材産地推定結果

試料番号	名称・位置・層位	原 石 産 地（確率）	判 定	試料番号	名称・位置・層位	原 石 産 地（確率）	判 定
18479	Na 1 K-83-a	白滝第 1 群（1%）	白 滝	18486	Na 8 K-83-a	白滝第 1 群（ $D^2=43$ ）	白 滝
18480	2 “	“（ $D^2=31$ ）	“	18487	9 “	“（ $D^2=42$ ）	“
18481	3 “			18488	10 “	“（ $D^2=29$ ）	“
18482	4 “			18489	11 “	“（ $D^2=96$ ）	“
18483	5 “	白滝第 1 群（0.1%）	白 滝	18490	12 K-82-d		
18484	6 “	“（1%）	“	18491	13 “	白滝第 1 群（ $D^2=42$ ）	白 滝
18485	7 “	“（ $D^2=56$ ）	“	18492	14 “	“（ $D^2=34$ ）	“

試料番号	名称・位置・層位	原 石 産 地 (確率)	判 定	試料番号	名称・位置・層位	原 石 産 地 (確率)	判 定
18493	Na 15 K-82-d	白滝第1群 (1%)	白 滝	18536	58 G-69-b	白滝第1群 (4%)	白 滝
18494	16 "	" (D ² =76)	"	18537	59 "	" (D ² =34)	"
18495	17 "	" (D ² =28)	"	18538	60 "	" (D ² =27)	"
18496	18 "	" (6%)	"	18539	61 H-68-d	" (0.5%)	"
18497	19 "			18540	62 "	" (D ² =35)	"
18498	20 I-81-b			18541	63 "	" (0.1%)	"
18499	21 "	白滝第1群 (D ² =32)	白 滝	18542	64 "	" (4%)	"
18500	22 "	" (0.2%)	"	18543	65 "	" (17%)	"
18501	23 "	" (D ² =45)	"	18544	66 "	幌加沢 (1%)	"
18502	24 "	" (11%)	"	18545	67 "	白滝第1群 (2%)	"
18503	25 "	" (1%)	"	18546	68 "	" (0.4%)	"
18504	26 "	" (4%)	"	18547	69 "	" (0.2%)	"
18505	27 "	近文台第1群 (61%)	近文台	18548	70 "	" (8%)	"
18506	28 I-78-d	" (D ² =44)	"	18549	71 "	" (7%)	"
18507	29 "	白滝第1群 (D ² =66)	白 滝	18550	72 "	" (1%)	"
18508	30 "	" (D ² =36)	"	18551	73 "	" (D ² =31)	"
18509	31 "	名寄第1群 (0.1%)		18552	74 "	" (D ² =46)	"
18510	32 "	白滝第1群 (D ² =50)	白 滝	18553	75 "	" (D ² =106)	"
18511	33 "	近文台第1群 (D ² =53)	近文台	18554	76 "	" (D ² =30)	"
18512	34 "	白滝第1群 (1%)	白 滝	18555	77 "	" (0.3%)	"
18513	35 "	" (D ² =62)	"	18556	78 "	近文台第1群 (31%)	近文台
18514	36 "	" (D ² =31)	"	18557	79 "	白滝第1群 (8%)	白 滝
18515	37 "	" (0.1%)	"	18558	80 "	" (D ² =49)	"
18516	38 "	" (D ² =86)	"	18559	81 H-69-a	" (D ² =34)	"
18517	39 G-68-b			18560	82 H-69-a	" (17%)	"
18518	40 "	白滝第1群 (0.1%)	白 滝	18561	83 "	" (19%)	"
18519	41 "	" (0.2%)	"	18562	84 "	" (D ² =26)	"
18520	42 "	" (D ² =29)	"	18563	85 "	近文台第1群 (4%)	近文台
18521	43 "	" (D ² =28)	"	18564	86 "	白滝第1群 (D ² =30)	白 滝
18522	44 "	" (39%)	"	18565	87 "	" (6%)	"
18523	45 "	" (D ² =43)	"	18566	88 "	" (20%)	"
18524	46 "	" (18%)	"	18567	89 "	" (D ² =43)	"
18525	47 "	" (1%)	"	18568	90 "	" (4%)	"
18526	48 G-69-b	" (1%)	"	18569	91 "	" (17%)	"
18527	49 "	" (1%)	"	18570	92 "	" (0.2%)	"
18528	50 "	滝川第1群 (10%)	滝 川	18571	93 "	幌加沢 (7%) 白滝第2群 (3%)	"
18529	51 "	白滝第1群 (1%)	白 滝	18572	94 "	白滝第1群 (D ² =31)	"
18530	52 "	" (0.2%)	"	18573	95 "	" (D ² =29)	"
18531	53 "	" (0.1%)	"	18574	96 "		
18532	54 "	白滝第2群 (0.1%)	"	18575	97 "	白滝第1群 (1%)	白 滝
18533	55 G-69-b	白滝第1群 (1%)	白 滝	18576	98 "	" (1%)	"
18534	56 "	" (D ² =78)	"	18577	99 "		
18535	57 "	" (53%)	"	18578	100 "	白滝第1群 (1%)	白 滝

音江2遺跡出土木炭の液体シンチレーション炭素年代

測定者 山田 治 (京都産業大学教授)

KSV-1667 音江2. P-5 4,830±90y. B. P

写真図版



発掘調査前の状況（NE—SW）



発掘調査前の状況（S—N）



側道部分調査後の状況 (NE-SW)



側道部分調査後の状況 (S-N)



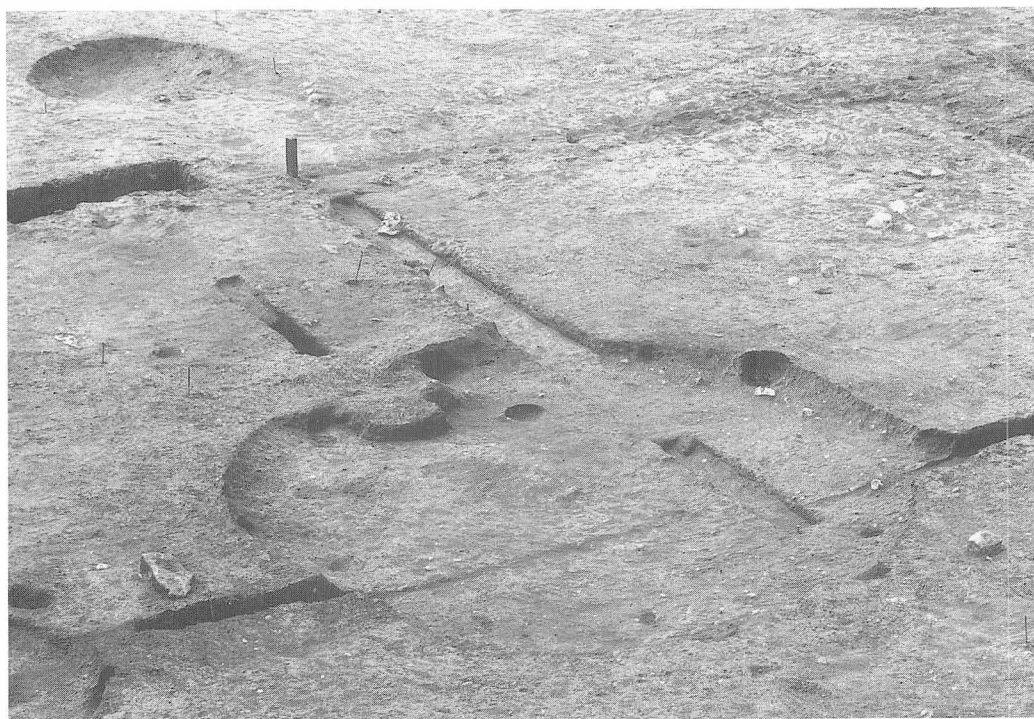
調査後の状況（S—N）



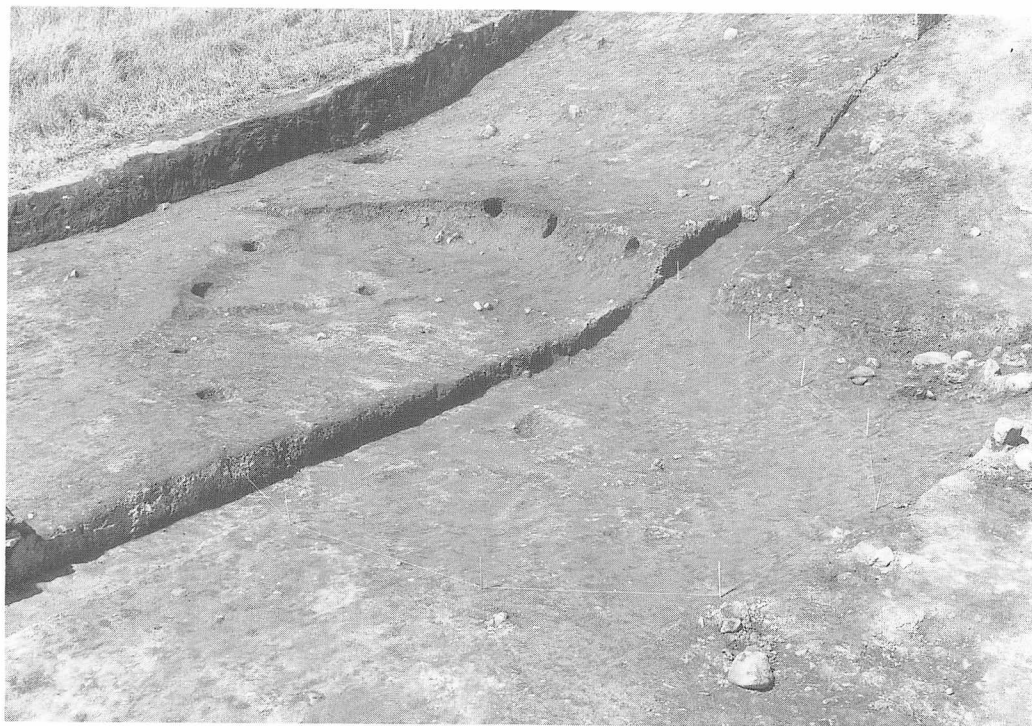
調査後の状況（SW—NE）



H-1



H-2



H-3



H-3 床遺物出土状況



H-3 床遺物出土状況



P—1



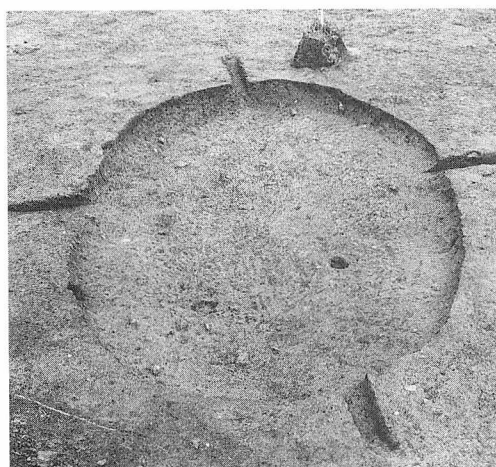
P—2



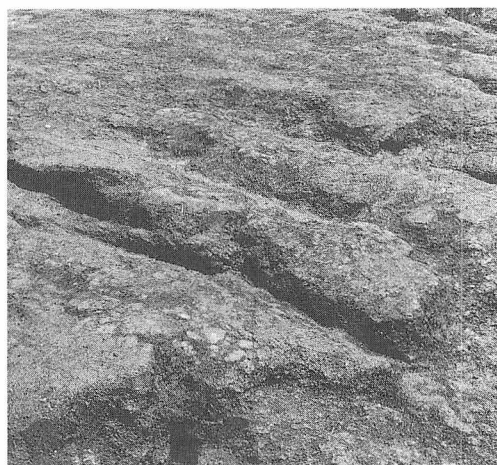
P—3



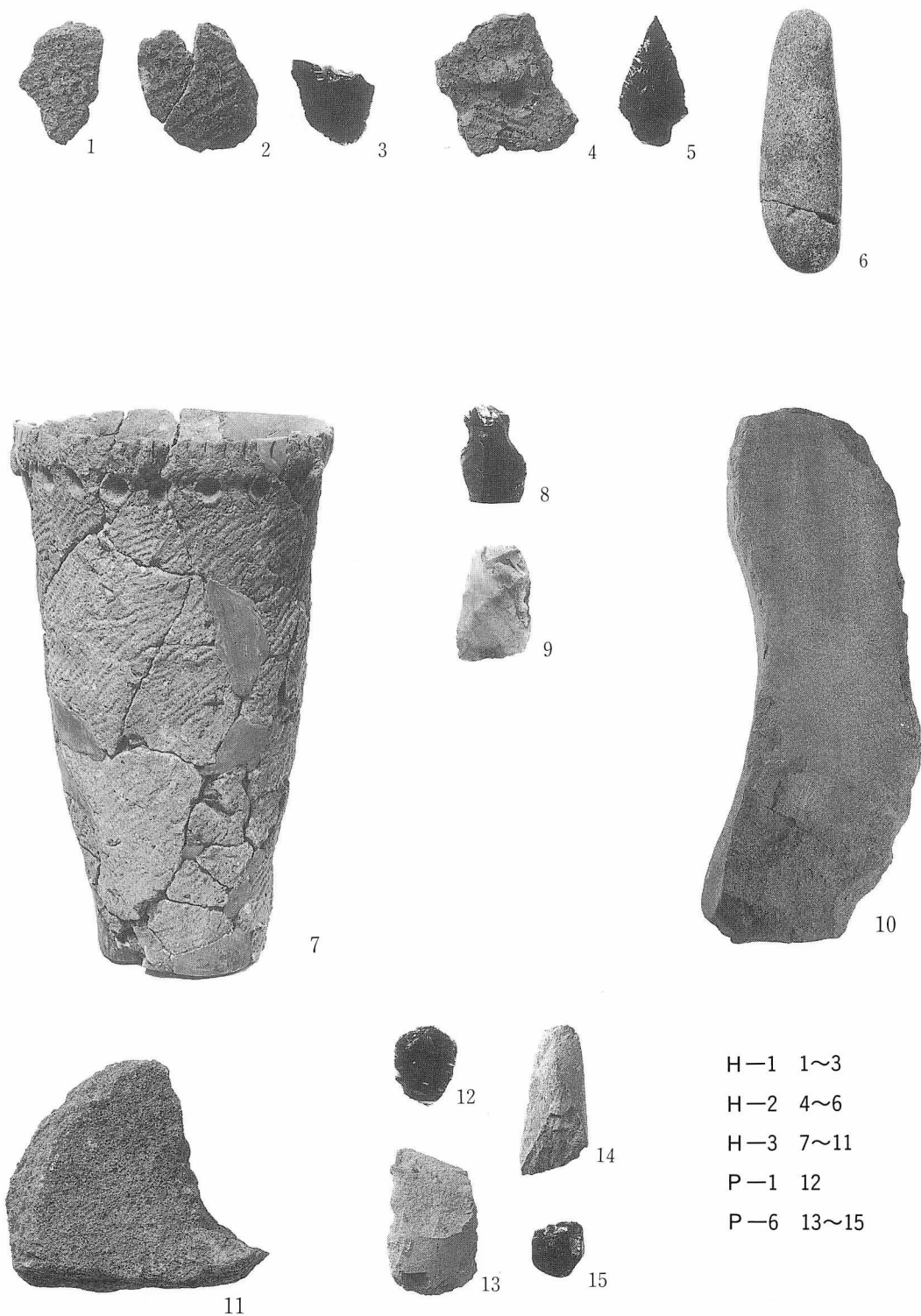
P—5



P—6



F—1



H-1 1~3
H-2 4~6
H-3 7~11
P-1 12
P-6 13~15



作 業 状 況



作 業 状 況



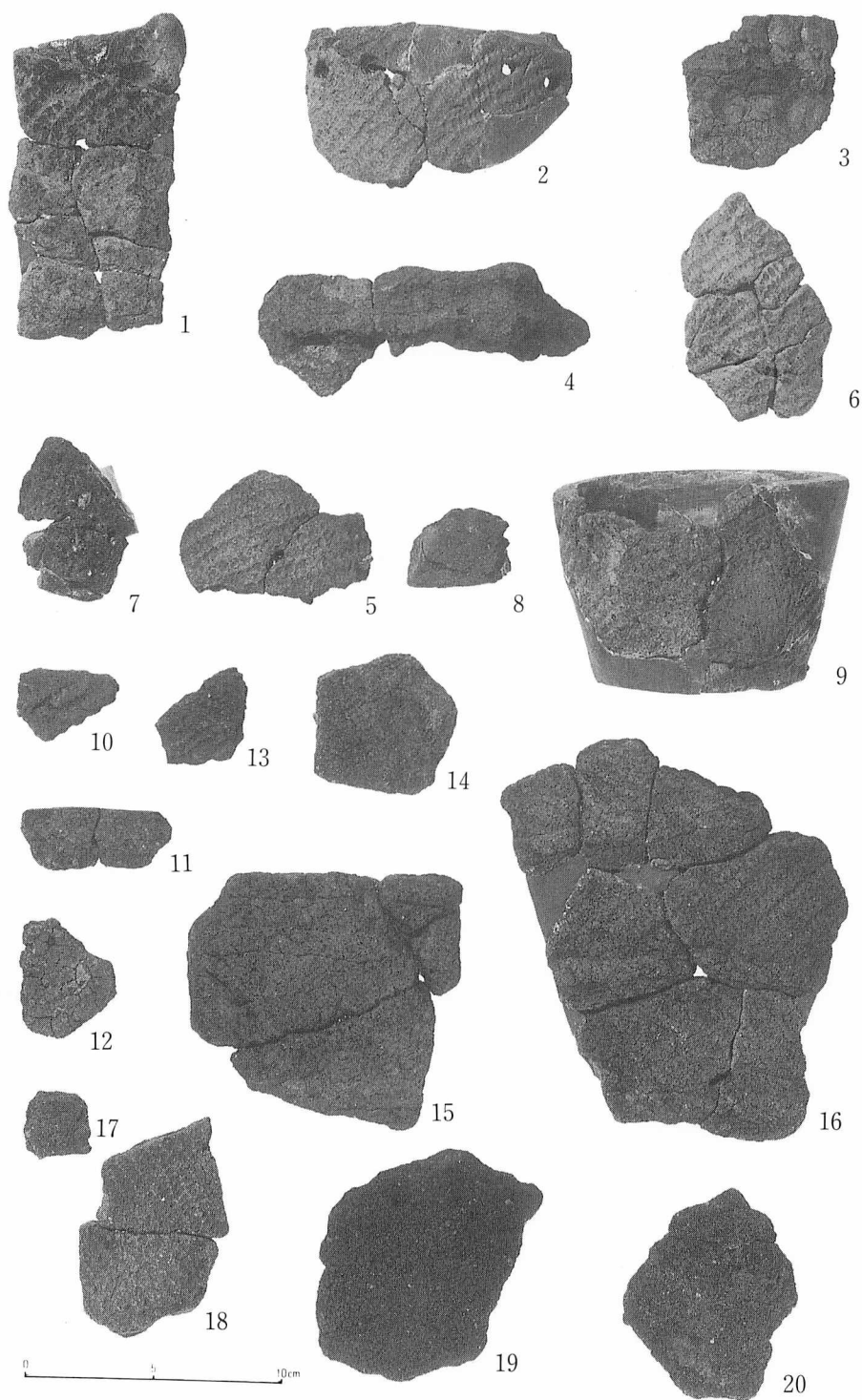
遺物出土状況（H-69-a・NW-S E）



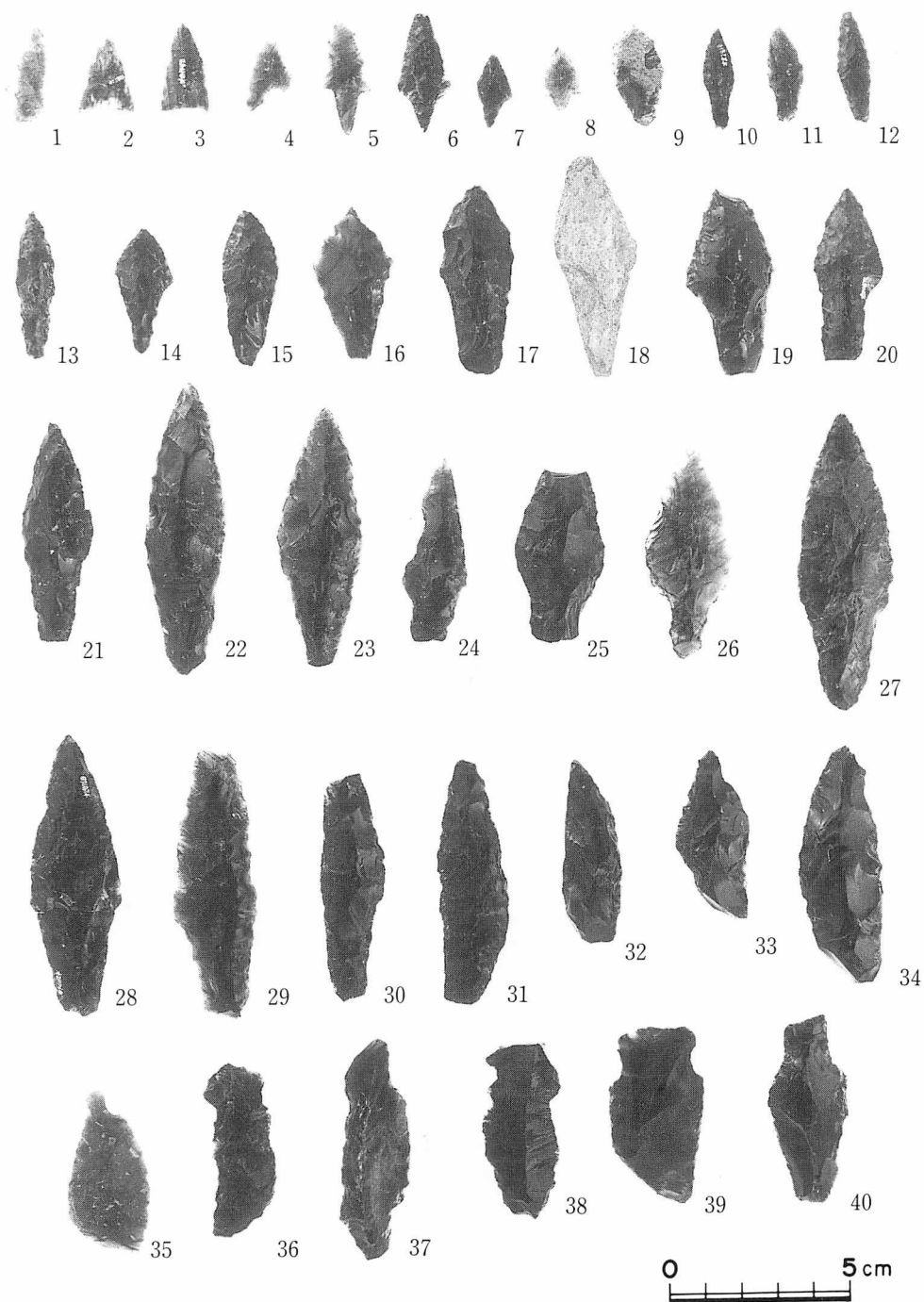
遺物出土状況（H-79-a・W-E）



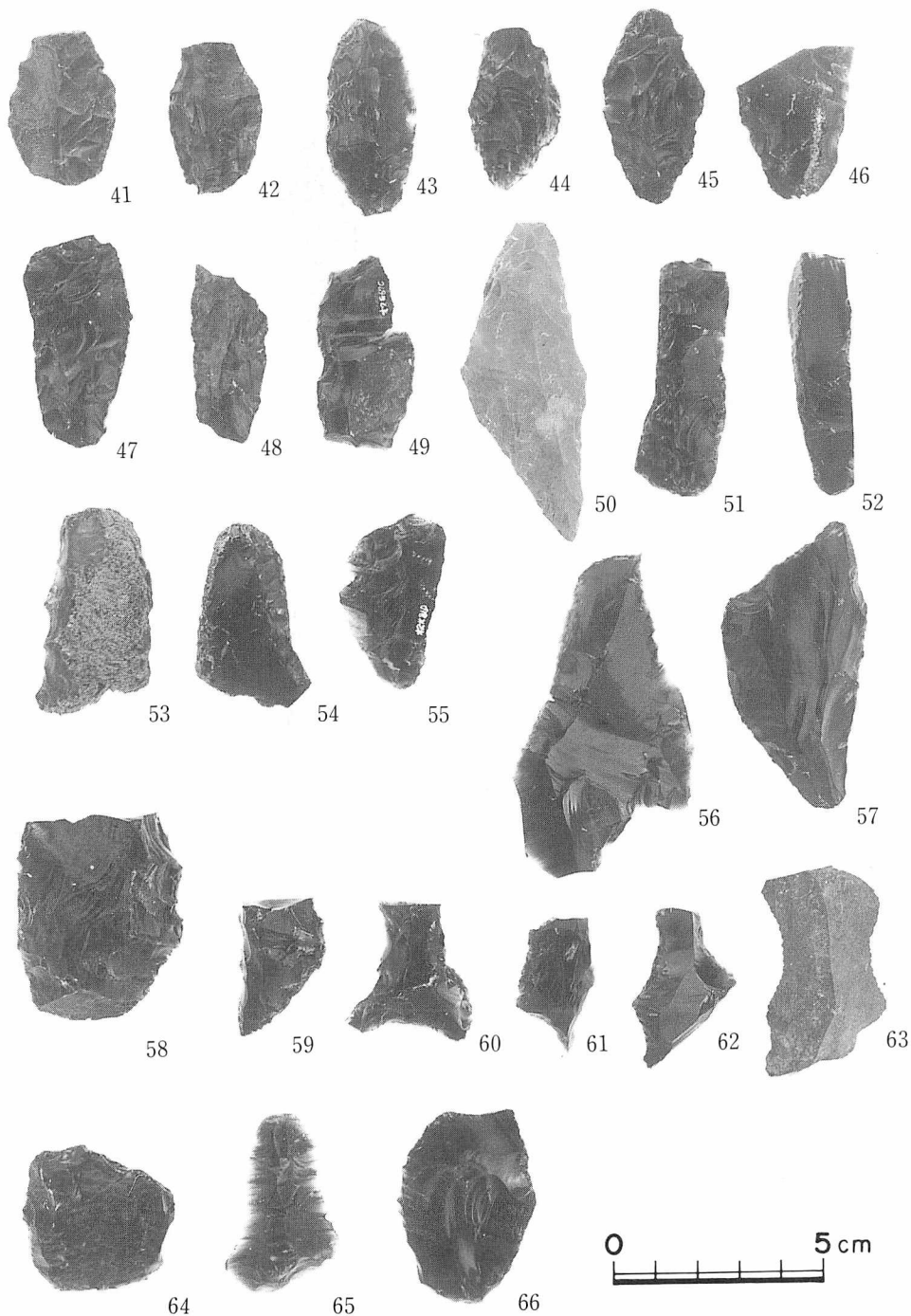
遺物出土状況（H-79-a・W-E）



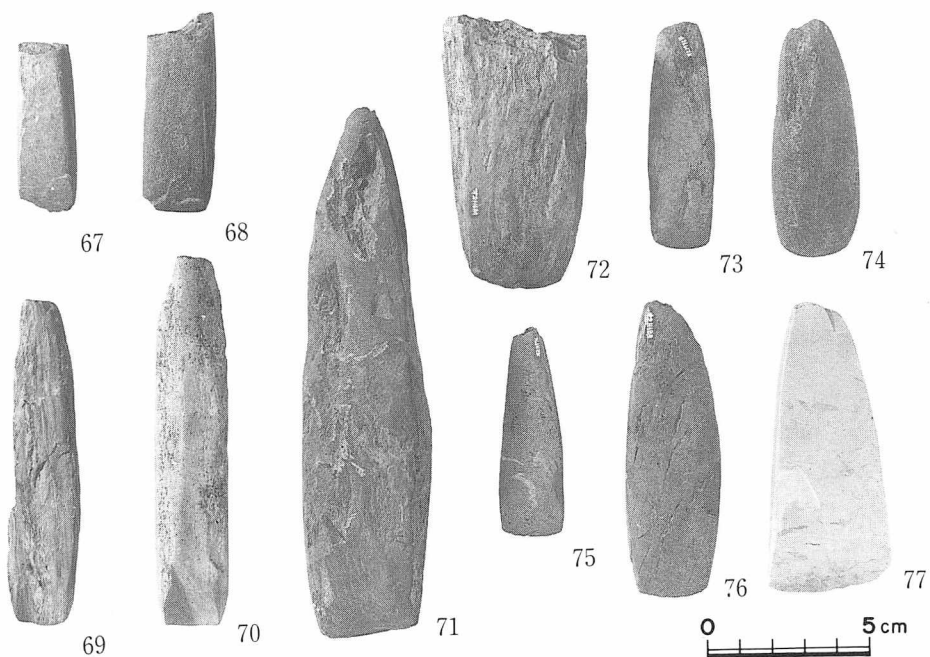
包含層出土の遺物（土器）



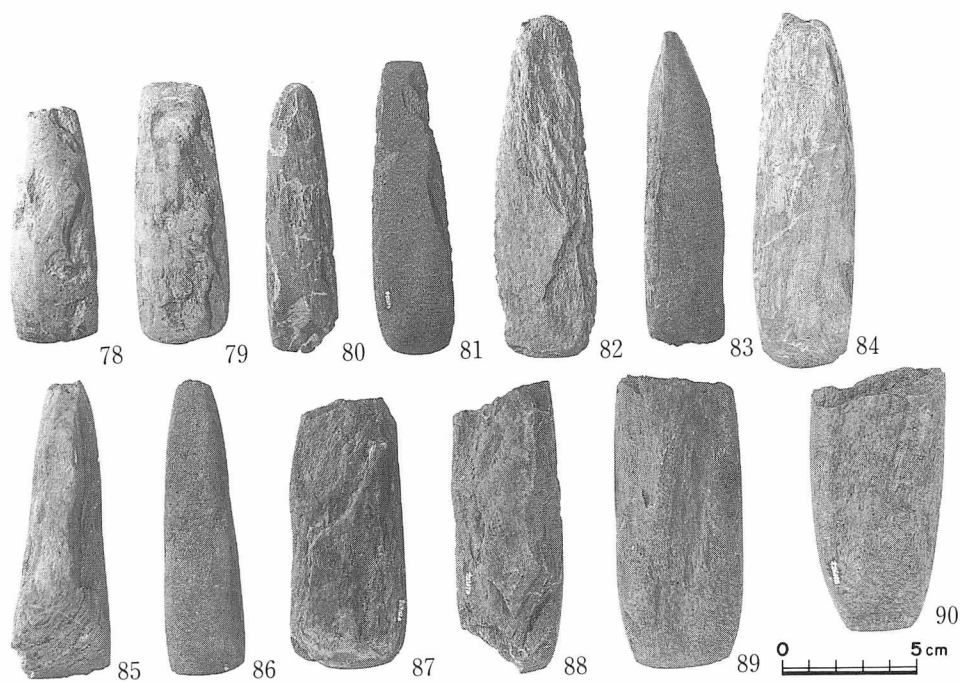
包含層出土の遺物（石器）



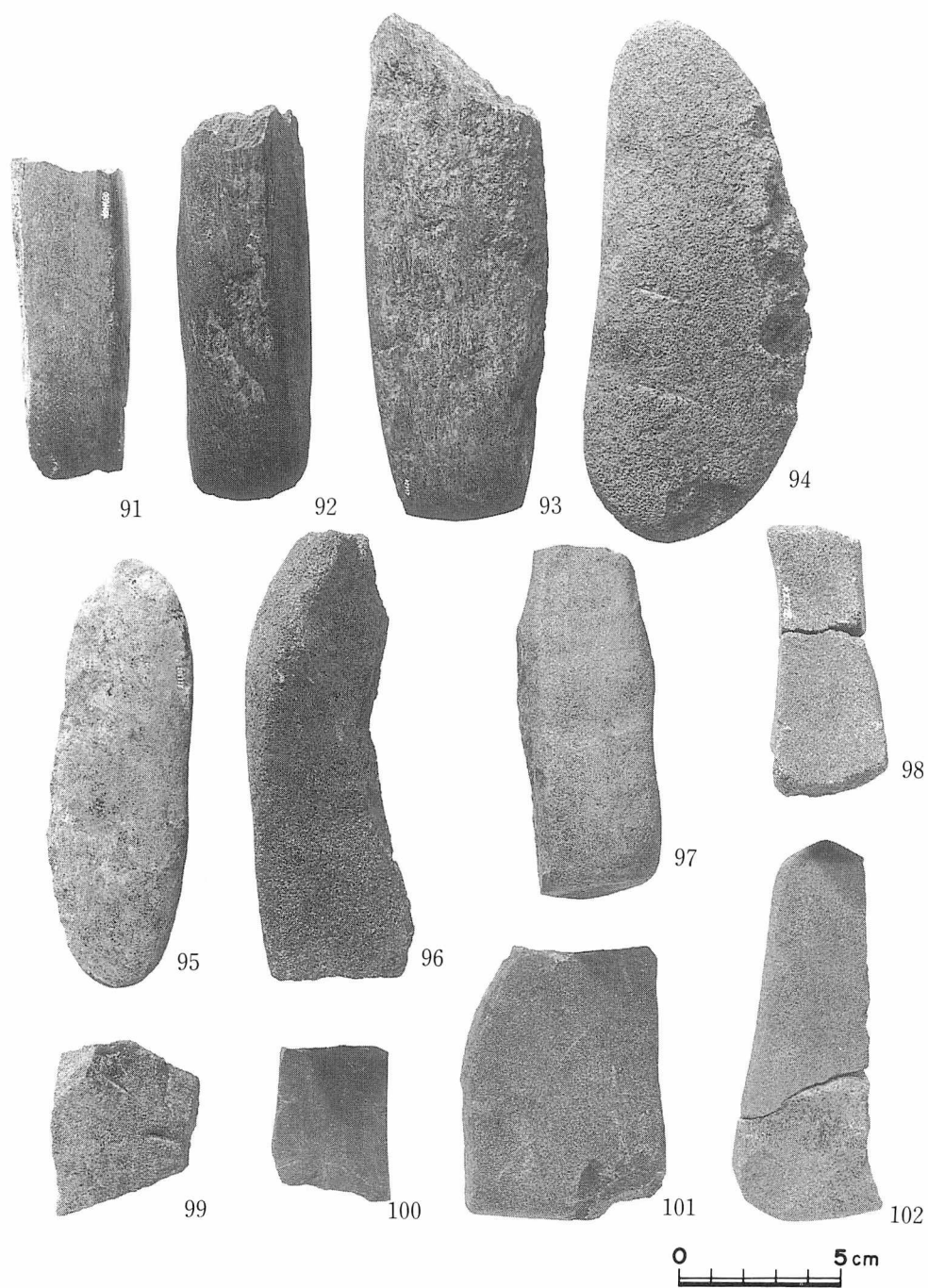
包含層出土の遺物（石器）



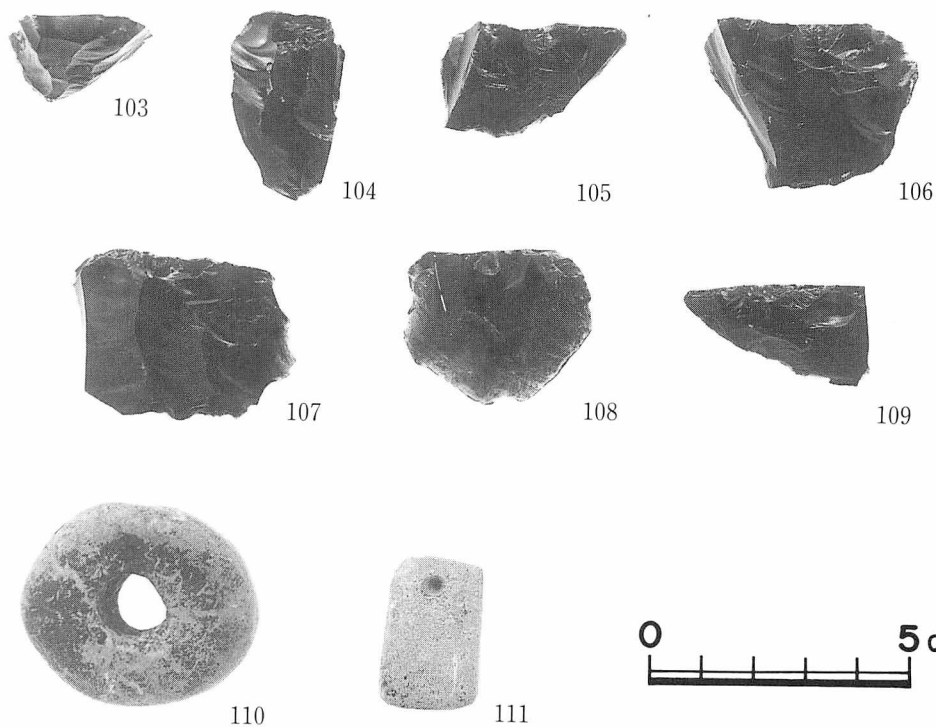
包含層出土の遺物（石器）



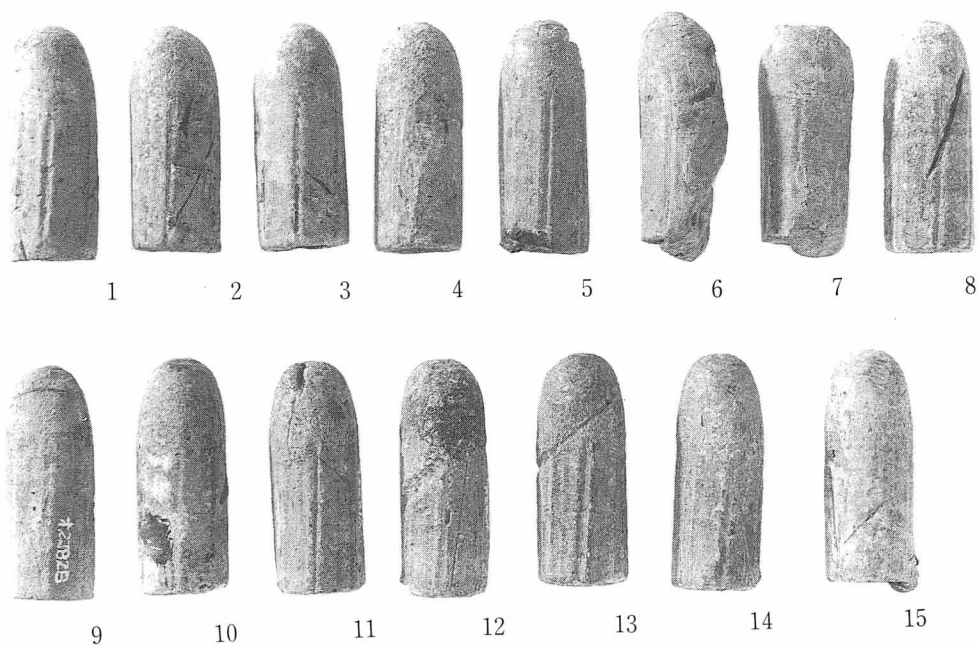
包含層出土の遺物（石器）



包含層出土の遺物（石器）



包含層出土の遺物（石器）



包含層出土の遺物（銃弾）実物大

財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第49集

深川市 音江 2 遺跡

北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和63年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
064 札幌市中央区南26条西11丁目
TEL (011)561-3131

印刷 興国印刷株式会社
063 札幌市西区手稲東3南1丁目
TEL (001)661-2221(代)

この報告書は、日本道路公団札幌建設局のご了解を得て増刷したものです。